建築と社会

特　集

● 都市のパブリック

4
1999

日本建築協会

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈳日本建築協会事務局（TEL06-348-0635、FAX06-348-0634）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

A5判・130頁～160頁　発行:学芸出版社　本体価格¥1,200～¥1,400

1 茶室の話　岡田孝男
3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
5 すまいの語録　茶谷正洋
7 構造計画とやさしい力学1　須賀好富
8 建具の知識と意匠　山片三郎
9 エレベータ・エスカレータ 立体駐車場　木村利雄
10 構造計画とやさしい力学2　須賀好富
13 医院・診療所の計画と設計　池田有隣・船越輝由
14 設計のコンピューター手法　飯塚英雄
16 石垣と石積壁　窪田祐
17 基礎と地盤の手ほどき　中堀和英
18 ショッピングセンターの計画　西脇顕正
19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
21 住宅の家具　光藤俊夫
23 設備技術者のための建築再入門　光安義光
24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
26 建物と地震災害　竹内吉弘・島田耕一
28 建築金物の知識　立野一郎
30 住宅三備心得帳　平田純一
31 住宅のエレクトロニクス　監修　小林郁
32 建築塗装の手引き　児島修二
33 建築式典の実際　若林嘉津雄
34 建築設計と高齢者・身障者　吉田あこ
36 日本壁　山田幸一
37 身近な耐震設計法　前川陽一
38 住宅の照明　監修　大島博
39 建築を志す人びとへ　日本建築協会出版委員会

特装本
火災安全学入門　岡田光正

選書シリーズは、在庫図書を掲載

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ

四六判2色刷り　発行:学芸出版社　本体価格¥1,600～¥2,500

TQCから見た建設業　荒木陸彦
躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
現場マンのアイデア発想　合原一夫
建築基準法の実際　矢吹茂郎
ニュー組積建築のすすめ　福島孝之　他
建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅　松村秀一
鉄骨工事の現場学　石田満喬
建築紛争の実際　岡本辰義
仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
ゼロ災への道 建設現場の安全管理活動　表　一郎
木造住宅のしくみ 在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敬博
コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
新版 建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
木づくりの常識非常識　上村　武
建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
都市計画法読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版

B5判　発行:学芸出版社　本体価格¥2,800～¥3,800

構造コストと経済設計　須賀好富
新・建築と設備の接点　宮脇　毅・南部　武
建築設備の健康診断　牧野　茂
外壁構法チェックリスト　飯塚五郎蔵
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
建築・都市・住宅・土木一情報アクセスブック　菊岡倶也
建築デザインのための構造計画　須賀好富
場所打ち杭の設計と施工　阪口　理
建築と緑　瀧　光夫
入門・建築積算　生島道春
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会

昭和生まれ　関西の建築家50　1987年

A4判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念

講演記録集　## 話のはなし　1997年

B6判5分冊　企画:日本建築協会建築クラブ　1セット10,000円(消費税含む)

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款　A4判のみ取り扱い

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項
1部¥230（消費税含）送料 実費

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会　1988年

A4判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集　1992年

A4判　企画・発行：日本建築協会　定価2,000円

日本建築協会創立80周年記念出版

建築を志す人びとへ

A5判　日本建築協会出版委員会編著　本体価格1,800円

会告

総会議決お知らせ

平成11年2月24日開催の総会において、監事および評議員が選任されるとともに、新名誉正会員が推挙されました。また平成11年度事業計画並びに収支予算が承認されましたので、ここに会告いたします。

1.監事および評議員改選
2.新名誉正会員推挙
3.平成11年度収支予算書
4.平成11年度事業計画

1. 平成11年度 監事・評議員改選

●監事／伊藤　俊夫（松村組）

●評議員（順不同）

鶴田　昭一（建築工房和泉屋）
山形　政昭（大阪芸術大学）
坂本　　佶（松村組）
林　　憲三（大日本土木）
宮崎　靖司（鴻池組）
任田　　勉（西松建設）
遠藤　裕造（三井建設）
窪田　裕彦（鉄建建設）
宗田　奎二（竹中工務店）
原　　眞一（コーナン建設）
中道　正伸（中道組）
成尾　克彦（きんでん）
岩橋　貞雄（八千代電設工業）
高岸　宗吾（近畿工業）
藤井　　篤（須賀工業）
川瀬甲子雄（扶桑管工業）
福谷　守弘（朝日工業社）
志田　　稔（ゼネラル化成）
月城　則男（新東洋合成）
井上　弘美（アオケン）
福永　敏男（福永建設）
林　　金之（愛知工業大学）
盛田　輝勇（丸善深見建装）
森田富士男（シード）
福田　泰造（福田泰造建築事務所）
井村　真哉（井村建築設計事務所）
北山　泰秀（北山組）

2. 新名誉正会員推挙

石川　　修　　光安　義光　　本條　乕夫　　金剛　利隆
片山　金市　　時山龍太郎　　城口　庸平　　田村　真二

3. 平成11年度収支予算書 ―平成11年4月1日から平成12年3月31日まで―

勘定科目	平成11年度	平成10年度	増・減	平成11年度予算内訳
Ⅰ．収入の部				単位:千円
会費収入	88,671	92,186	△ 3,515	
個人正会員	35,452	35,769	△ 317	14,400円×［2,656−(81+143+40)+140/2］
個人正会員（地方）	1,801	1,890	△ 89	12,600円×143人
団体正会員	51,275	54,275	△ 3,000	25,000円×［2,081−40+20/2)］
準会員	143	252	△ 109	8,400円×17人
事業収入	71,500	85,461	△ 13,961	
会誌収入	53,000	71,000	△ 18,000	広告料、会誌頒布等収入
契約約款収入	2,200	2,211	△ 11	195円×10,800部×1,045
会員名簿収入	7,500	—	7,500	
出版委員会収入	1,500	1,500	0	企画料、印税、講座参加料
事業委員会収入	1,200	1,500	△ 300	見学会、講演会参加料
教育委員会収入	3,000	3,650	△ 650	実務講習会参加料
建材委員会収入	100	100	0	
受託事業収入	1,000	3,500	△ 2,500	研究、調査委託料
雑収入	2,000	2,000	0	建築クラブ他
寄付金収入	100	100	0	
雑収入	1,000	1,000	0	預金利息、会議室使用料
記念事業積立金取崩収入	800	2,000	△ 1,200	
退職給与引当金取崩収入	8,000	0	8,000	
借入金	10,000	0	10,000	
当期収入合計（A）	180,071	180,747	△ 676	
前期繰越収支差額	0	1,693	△ 1,693	
収入合計（B）	180,071	182,440	△ 2,369	
Ⅱ．支出の部				単位:千円
事業費	66,280	87,212	△ 20,932	
会誌発行費	52,000	70,000	△ 1,8000	印刷費、原稿料他
契約約款費	1,000	907	93	80円×10,800部×1.15
会員名簿発行費	4,000	—	4,000	印刷費、通信費ほか
出版委員会費	1,000	1,000	0	講座開催、学術書等出版経費
事業委員会費	2,500	2,500	0	見学会、講演会等経費
教育委員会費	3,000	4,500	△ 1,500	実務講習会、コンクール経費
建材委員会費	50	50	0	資料収集他
日本建築協会賞費	800	0	800	日本建築協会賞選考事務費
記念事業費	0	4,000	△ 4,000	
受託事業費	930	3,255	△ 2,325	研究、調査受託
雑費	1,000	1,000	0	
管理費	105,496	92,228	13,268	
給料・手当	56,976	61,533	△ 4,557	本給、手当等 50,676千円+6,300千円
退職金	18,000	0	18,000	職員退職金
福利厚生費	7,500	7,500	0	社会保険料事業主負担金
小　計	82,476	69,033	13,443	
助成費	4,200	4,200	0	支部への交付金・補助金
会議費	1,500	1,500	0	総会、評議員会、理事会等
旅費交通費	150	100	50	
通信運搬費	2,400	3,080	△ 680	電話料、切手代等
集金費	2,000	2,000	0	会費収入振替料等
消耗品費	1,500	1,500	0	パソコン費他
修繕費	350	100	250	
印刷製本費	500	600	△ 100	
光熱水費	350	330	20	電気代他
火災保険費	20	35	△ 15	
租税公課	4,300	4,000	300	固定資産税、消費税、府民税・市民税
清掃費	250	250	0	
建物管理費	4,000	4,000	0	事務所共益費
雑費	1,500	1,500	0	新聞購読料、慶弔費等
小　計	23,020	23,195	△ 175	
退職給与引当金積立支出	3,000	3,000	0	
借入金返済支出	5,295	0	5,295	元金5,295+利息295（10,000×2.9%）
当期支出合計（C）	180,071	182,440	△ 2,369	（長期金利2.4%+0.5%）
当期収支差額(A)−(C)	0	0		
次期繰越収支差額(B)−(C)	0	0		

（注）平成11年度の借入限度額は3000万円とする。

4. 平成11年度事業計画

日本建築協会は、建築関係の広い分野から参画した人々で構成し、建築に関する学術、技術等の進歩発達に寄与するとともに、建築を通じて社会に貢献することを目的としている。

現在、我が国経済は未曽有の危機的状況に遭遇し、かつて経験したことのない規模の財政出動にもかかわらず、景気の動向は、なお不透明な状態で推移しつつある。

都市計画事業や住宅建設等建設関係への需要を一層喚起するためには、本会としても会誌の活用をはじめ各委員会活動を通じ、本会の情報発信機能の一層の充実を図りながら情報社会への働きかけを活発に展開することとする。

以上のような観点に立って、平成11年度は以下に掲げる事業を実施する。

1．会誌「建築と社会」の発行（編集委員会）

大正6年9月の創刊以来、第2次大戦終戦前後の一時期を除いて毎月発行を続け、会員連帯の手段として、また建築界と社会を結ぶ接点として本会の歴史と伝統を継承する役割を果たしてきた。本年の第80輯発行に当たっては、「Openness」（開放による自己鍛練）の実践と良好な社会的資産を形成するための価値ある企画提案を編集方針のキーワードに、会員相互の交流を図る会誌としての役割はもとより、一般の方々にも親しみやすくわかりやすい内容の誌面づくりに努めることとする。

なお、現下の長引く不況により、これまで本会の会誌発行事業に対し積極的に支援し、賛助された関係企業等の経営環境が厳しさを増す現状において、当編集委員会としても経費節減にさらに創意工夫を凝らし、会誌発行事業の経営の健全性確保に一層留意しつつ事業を推進することとする。

2．「建築技術選書」と＜プロのノウハウ＞の企画（出版委員会）

本委員会は、建築技術の単行本を企画する会である。「出版企画と著者さがし」にアンテナをはりめぐらせている一種の探偵集団ともいえよう。

協会創立60周年記念事業として建築技術選書を企画刊行したが、それ以来こんにちまで、建築図書専門の学芸出版社を版元とし、技術選書39冊・特装版11冊・プロのノウハウ30冊の計80冊に及ぶ単行本を世に送ってきた。

本年度は、さらに委員の結束を固め、よい技術書を出版できるよう努力していく。また、出版書をテキストに使用した著者の講演会は、例年どおり実施する。

3．講習会などの実施

1）建築工事実務講習会（教育委員会）

本会創立直後から各種技術講習会を実施してきたが、昭和32年度以降、中堅技術者を対象とした講習会を毎年開催し、平成10年度までに延べ65回を数えている。

本年度も現場実務に即応した講習内容のさらなる充実を図るほか、支部と連携して、引き続き本講習会開催の拡充に努める。

2）情報の提供等（事業委員会）

時宜に適したテーマを選び、会誌の特集や見学会との連携にも留意しながら、講演会、講習会、研修会を実施するとともに、話題建築物について、その建築の意図、設計の主旨などを発注者または設計者から聞く会を開催する。また、各種メディアを活用した情報の提供についても検討する。

3）見学会（事業委員会）

新建築や地域開発プロジェクトなどを対象とする見学会を毎月1回程度実施する。

また、年1～2回は、茶室、近代建築、町並み保存の見学会を行い、当該地域の歴史や伝統文化との触れ合いを通じて会員との交流を図る。さらに、特色ある地方の作品にも注目した企画を立て、地方会員との交流を図る。

4）若い会員の交流（事業委員会）

若い会員の感性と活力を展開するため、サロン形式の集会を適宜開催し、講師と参加者との対話に重点を置き、会員相互の親睦・交流を図る。

4．新建築材料の調査検討（建材委員会）

建築工事に伴う材料の選定にあたっては、環境への配慮はもとより改正建築基準法の施行時期を間近にひかえ、なかでも仕様規定から性能規定への変更は建築物の性能（とりわけ部材の強度、防火性能等）について、従来に増して確かなデータと情報が要求されるものと考える。

本委員会では、こうした時代に即応できる優れた建材の調査検討を行うとともに、確かな情報の提供に努めていきたい。

5．青年技術者の顕彰（青年技術者選考委員会）

昭和29年度から本顕彰を実施し、平成10年度まで712名の顕彰を行った。

本年度は46回を迎えるが、例年のとおり満35歳以下の会員を対象とし、選考のうえ「建築と社会」誌上で顕彰する。

6．工高生デザインコンクールの実施（教育委員会）

このデザインコンクールは工高生の設計技能の向上奨励のため、昭和30年から毎年テーマを変えて実施しているが、年々参加校が広域化し、応募件数も増加して、まさに全国的規模に発展してきている。

本年度は第45回を迎えるが、さらに大きな広がりと成果が得られるよう努める。

7．工高等建築科優秀卒業生の表彰（教育委員会）

昭和27年度から本表彰を実施し、平成10年度は242校、277名を表彰した。本年度も学校長推薦により引き続き表彰を行う。

8．周年記念関連事業等の実施（協会全体）

本年度は「日本建築協会賞」を募集、選考の年度である。本賞は、建築を通じて社会に貢献するという本会の理念に基づき行われるものであり、適切な広報活動を展開し、本会の理念の発揚にふさわしい「優秀な業績」が発掘できるよう努める。

9．会員の増強（協会全体）

社団法人にとって、会員の維持増強は重要な事項である。このため、従来、会勢理事会を中心として会員の勧誘活動を展開しているが、本年度は、一会員一勧誘をスローガンとして、会員増強活動を展開することとする。

10. 支部、地方との連携強化（協会全体）

本会の会員組織は、現在、本部および京都・中国・東海・和歌山の各支部ならびに地方会員、準会員で構成され、その活動はこれら会員を対象として広範にわたっている。

本部の活動は常設委員会を中心として行われているが、各支部の活動と関連させた事業の実施が強く望まれており、引き続き各支部の活動と繋がりをもって各事業の推進に取り組むものとする。

11. 調査・研究業務の受託（事務局）

本受託業務は、毎年、公共団体、公的機関その他各方面から委託を受けて実施してきたが、昨年度は、関係業界や地方団体の研究費の低減により、調査研究活動が著しく減少した。本会としては、平素から調査研究委託が発生した場合に備え、その受け入れ体制は確保しておくこととする。

12. 図書閲覧制度の充実（事務局）

本会は、昭和63年度から本会所蔵の図書や資料を「資料公開規程」を制定して、会員をはじめ一般市民の利用に供してきたが、本年度も所蔵図書の点検整備に務め、管理の適正化に努めるとともに、より一層の利用を図る。

13. 業務の効率化等（事務局）

本会の事務局体制は、総務、編集および事業の三課制を採っているが、年々その事務量が増加している。このため、事務の合理化に努めるとともに、事務経費の節減に取り組んできた。また、これまで進めてきた会員名簿の電算システム化の準備も、ソフト面の整備が計画どおりに進捗したので、本年度は出来るだけ早期にパソコンを導入し、システムを運用することとする。

14. その他

本会は、建築関係友好諸団体との協力・協調に努めながら、本会の目的に整合する適当な事業の企画に対しては後援または協賛を行う等、これを支援してきた。

本年度も他団体の優良な企画に対し、同様の措置を実施する。

30's EYE- 21世紀へのエスキス

第32回　再掲

宮川 武

都市問題経営研究所主任研究員

アメリカまんゆう記

米国まちづくり事情について



「30's EYE-21世紀へのエスキス」をテーマに、30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。気軽にご参加下さい。

日　時　1999年 4 月23日(金)
18:30—20:30

会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第３ビル21階

講　師　宮川　武

定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選

参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
学生500円引（飲物付、税込）
＊団体会員扱いは１社１名に限る

申　込　４月16日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：30's EYE
②氏名
③個人会員･団体会員･一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を４月19日(月)に発送します。

申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001

主　催　㈳日本建築協会事業委員会
若い会員の集い小委員会
担当主査：樋上新治





市民参加、住民参加、官民パートナーシップ、非営利団体（NPO）…?!
アメリカのまちづくりは、これらの事柄が大きな要素を占めています。我々の国とは、国の形成過程、国民のスピリットも違うので、何とも言えませんが、まちづくりには、合意形成のために多くのエネルギーが必要です。アメリカでは、そのエネルギーを効率よくまちづくりにつなげるために、いろいろなことが行われています。視察を通じて仕入れた情報を元に一緒に考えていきたいと思います。
どうやら、まちづくりのための人々の合意形成への道筋は、できるだけ多くの立場の人（直接関係ある人も、そうでない人も）にまちづくりにおける検討課題を共有してもらい、その開発が始まる時には、その町の市民、企業、行政が少なくともコンセプトを理解し、開発に対する協力関係を築き上げていることのようです。
視察した都市を比較すると、どこも非常に個性的です。どうしてこれだけ個性的な町になっているのでしょうか。我々の国では、考えられないくらい一つひとつの町にアイデンティティがあります。日本の町は、金太郎あめのようであるとよく言われますが、金太郎あめでないまちとは？…も、ついでに考えてみましょう。　（宮川　武）

宮川　武（みやがわ　たけし）
1958年兵庫県生まれ
1982　近畿大学建築学科卒業
㈱都市問題経営研究所入社
現在　同社主任研究員
一級建築士、再開発プランナー
＜まちづくりに関与した街＞
四日市一番街等、丸亀中央、福井駅前、福山本通、高松常磐街、三本松、匹見町、名古屋大須、長浜、箕面、黒門市場、山口、阪神西宮、その他

大型児童館 ビッグバン（仮称） 見学会

日　時　1999年 5 月18日(火)
13:30—16:30

講　師　太田隆信／坂倉建築研究所代表取締役大阪事務所長

集　合　現地
＊泉北高速鉄道「泉ヶ丘」駅前

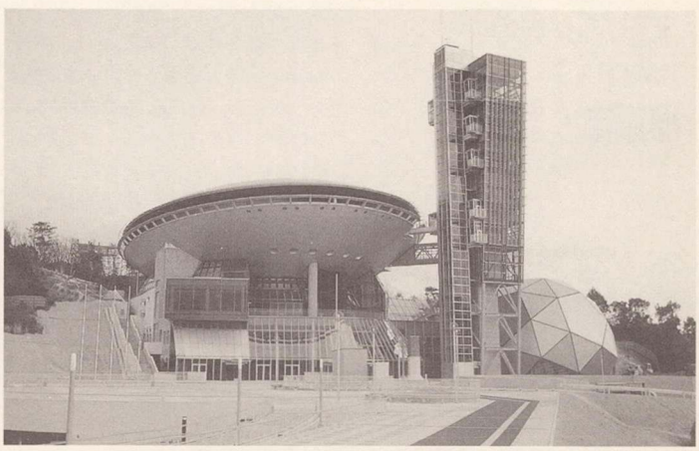
定　員　40人＊申込多数の場合は抽選

参加費　会員 1,000円、一般2,000円／税込

申　込　５月11日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：ビッグバン見学会
②氏名
③個人会員･団体会員･一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を５月12日(水)に発送します。

申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001

主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：松本　剛／大阪府



ビッグバンは、泉北ニュータウンの地区センターに隣接し、池や雑木林などの起伏に富んだ自然環境が残る敷地の中に計画されている。建物は、このような貴重な周辺の緑と調和し、敷地の地形を生かしたダイナミックな構成となっている。
「本館」は、円盤をイメージしており、内部はあそびゾーンとおもちゃ体験館とで構成されている。「遊具の塔」は、地上53mの高さを有し、最上階から４階まで約24mの間に垂直遊具を取り付け、こども達が中に入って楽しめる巨大遊具である。「こども劇場」は、人形劇を主体とする、惑星をイメージした球形の劇場で、約300人収容できる。

●建築概要
所 在 地　堺市茶山台1-9-1
設　　計　坂倉建築研究所大阪事務所
施　　工　大成･三菱･森本建設JV
敷地面積　106,170㎡
建築面積　4,423㎡
延床面積　10,332㎡
構造規模　RC･S､B2･8F
工　　期　1996年８月～1998年12月
オープン　1999年６月（予定）

近代建築見学会
(第9回)
田尻歴史館を訪ねる



日　時　1999年 5 月 1 日(土)
14:00―16:00
見学先　田尻歴史館
泉南郡田尻町大字吉見1101-1
＊南海本線「吉見ノ里」駅より徒歩約10分
講　師　山形政昭／大阪芸術大学教授
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員1,000円、一般2,000円／税込
申　込　4 月23日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：近代建築見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を4月26日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：小林一成／鴻池組



関西国際空港島の対岸に位置する田尻町に、平成６年より歴史館として維持活用されている上質の西洋館がある。明治33年に大阪合同紡績株式会社を起こし、また大阪倶楽部及び綿業会館の建設に献身的努力を惜しまなかった実業家谷口房蔵が、大正12年に郷里に建てた邸宅である。設計は大正10年、関西建築界に君臨していた片岡建築事務所によるもので、当時事務所のチーフ格で活躍していた安井武雄の手によるものと見られている。

明るい色タイルで装った西洋館の特色は、明治期の古典的様式から脱して、20世紀初頭のユーゲント様式の流れを引く個性豊かな構成と、いかにも大正期の自由な美意識を窺わせる多彩多様なステンドガラス、そして灯具など所々に現れる和風感覚の意匠にある。およそ2,000坪の邸内には、この西洋館に加えて接続する和館、茶室、３棟の土蔵、そして門屋に庭園などがよく整い、見所の多い近代の邸宅遺産のひとつとなっている。　（山形政昭）

まちなみ見学会
(第2回)再掲
橿原市今井町



16世紀に宗教自治都市として生まれた寺内町今井は、東西600m、南北310mに濠をめぐらした完全な城塞都市であった。その後、商業都市としての変貌をとげ、江戸時代には「大和の金は今井に七分」といわれるほどに南大和最大の都市となって大いに栄えた。現在も、今井町の大半の民家が江戸時代以来の伝統様式を保っており、しかも慶安３年（1650年）の今西家（重文）をはじめすぐれた民家が多く建ち並び、今なお町全体が戦国時代にできた寺内町の歴史の重さをずっしり感じさせています。
ぜひこの機会に、歴史が息づくまちを陽春に歩いてみませんか。

日　時　1999年 5 月 8 日(土)
13:00―17:00
講　師　米村博昭／今井町町並保存整備事務所所長補佐
見学先(予定)　今西家住宅（重文）
豊田家住宅（重文）
旧米谷家住宅（重文）
高木家住宅（重文）ほか
集　合　今井まちなみ交流センター
「八木西口」駅より徒歩約５分
定　員　50人＊申込多数の場合は抽選



今西家住宅（重文）

参加費　会員1,500円、一般2,500円／税込
＊学生割引500円
＊個人住宅見学お礼を含む
申　込　4 月27日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名:まちなみ見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を 4 月28日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：松本　剛／大阪府

建築と社会 4 1999
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第80集／通巻925号

今月の表紙
表紙デザイン　安里俊久

CONTENTS

特集● 都市のパブリック

［総論1］ 都市のパブリック
パブリックの陥穽—「公共」による〈公共〉の喪失をめぐって—●吉見俊哉 22

［総論2］ 世界の都市のパブリック
①“Public” in Thailand●Chatri Archjananun 26
②「公共空間」—ドイツでは—●Johannes Preisinger 27
③Lo spazio pubblico in Italia●Daniela Poli 28
④海外のパブリック●Fran çois de Kerchove d' Exaerde、André de Roo、Moussa Adama Dembele、徐金泓、マヤ・アンドリア・ニラワティ、秦丹尼、王小栄、張江華 31

［各論］ パブリックの視点
①町並み—公共空間の正念場—●中川　理 32
②アート—環境をデザインする—●田中直人 34
③表現—演劇はコミュニケーション—●松原利巳 36
④店—商空間にみるコラボレーション—●角野幸博 38
⑤コミュニティー—日常のなかから自己生成する—●林　泰義 40
⑥緑—交じり合う空間・滲み出す環境—●中瀬　勲 42

［点描］ パブリック
都市のパブリックとは…—アンケートにみる— 45

会告　総会議決お知らせ—平成11年度監事・評議員改選.新名誉正会員推挙.平成11年度収支予算書.平成11年度事業計画.30's EYE㉜宮川武—アメリカまんゆう記—.大型児童館ビッグバン（仮称）見学会.近代建築見学会⑨田尻歴史館を訪ねる.まちなみ見学会②橿原市今井町. 1

作品作風
あけぼのパーク多賀 6
なら100年会館 10
まなびのプラザ 12
アサヒプリテックテクノセンター 14
久保田セメント工業（株）本社 16

gallery　出屋敷の家（安田憲二）●杉原　繁 18

建築の眼　隠された家並●本多友常　明治建築の再生●安永三郎
向こう三軒両隣●森崎輝行　情報ネットワーク時代を生きる（4）—ホームページ—●本間利雄 20

法令コーナー　「ペット飼育可能住宅」の住まい方のルール●高木左京 51

being　木下直之（東京大学総合研究博物館助教授）●加藤俊明 52

素材と技術が生み出すデザイン　「石」ー石刻から●奥田英雄 54

Book Station　短評4題●伊藤郁郎・大谷由紀子・河崎敦子・高橋麗子 56

書評　「建築史学の興隆」●河邊　聰 57

構造の頁　大阪国際会議場（仮称）の構造設計●彦根　茂・金山　功 58

設備の頁　ガス吸収式大温度差システム対応吸収冷温水機●畠山幹雄 60

施工材料の頁　布製防火・防煙シャッター●岡田敏夫 61

基礎講座　屋内消火栓の設置—3—●由上雅章 62

information　SDコース5月開講.'99総合建築材料・設備展.国際美学会議シンボルマーク募集.神戸輸入住材展'99.第5回ISO14001建築セミナー.日本文化藝術財団の助成顕彰者に宮本佳明氏.空間デザイン・コンペティション作品募集. 63

Sketch Book　各地にみる建築作品８点 64

月間の動き　平成11年１月分 66

■特集予告
5月号／関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる
6月号／大阪城天守閣平成の大改修　堂島アバンザ
7月号／改正建築基準法

編集委員会（平成10年度）
■副会長　金多　潔　葉袋　公明
■編集理事　荒巻　恭士　井上　豊　小島　雄　佐野　吉彦　竹中　統一　立野　一郎　真塚　達夫　松村　慶三　山田　修　◎奥謝野　久
■特集小委員会　○内田　直樹
□計画分科会　★計画系　伊縫　憲幸　梅村　宏尚　※小浦　久子　鈴木　克彦　田中　直人　松川　敏正　横関　真紀　吉村　英祐　★建築計画系　上杉　秀隆　江副　敏史　大村　昌聡　荻窪　伸彦　菅野　忠司　笹村　欽也　佐藤不二男　塚本　史郎　※刃金　国雄　服部　光宏　山本　匡　★インテリア・住宅系　※石川　佳子　加藤　力　北浦かほる　小梶　吉隆　小島　保人　中田　誠　中村　雅人　中村　孝之　畑　康之　西田　和子　ペリー史子　水谷　美香
□構造分科会　大氏　正嗣　岸本　一蔵　岸本　圭暁　楠本　隆　佐治　明志　下野　直人　田中　剛　※田辺　太一　野口　拓也　松村　和夫　吉澤　幹夫
□設備分科会　梶井　宏修　河津　隆之　田ノ畑好幸　西岡　道雄　野口　太郎　堀内　一夫　桝井　貴廣　水谷　昇　村上幸三郎　谷津　和久　※山根　敏和
□施工材料分科会　植田　実　小椎八重猛　太刀川丈爾　※十倉　毅　能美　敏男　野口　幸忠　福井　茂和
□法令分科会　城戸　史郎　椎名　辰之　※炭崎　勉　中　勝生　中岡　光平　浜野　幸雄
■作品作風小委員会　赤木　隆　秋山　克彦　秋山　茂　朝倉　一晃　小笠原絵理　川上比奈子　倉渕奈千子　杉原　繁　寺岡　宏治　中村　文紀　藤城　義丈　△前川　治彦　前田　幸宏　牧野　雅一　増田　敬彦　増田　俊哉
■会員企画小委員会　伊藤　郁郎　池田　聡実　稲木　裕子　大谷由紀子　糟谷　浩史　河崎　敦子　高岡　伸一　髙田　光雄　高橋　麗子　△塚口　明洋　辻川ひとみ　土田　伸二　長友理津子　福田　瑞穂　増渕　昌利　山嵜　章子
■広告企画小委員会　岩井　武夫　△小幡　義明　加納伸太郎　勝　一弘　家森　康彰　片山　恒男　渡邊　浩文

◎委員長　○委員長代行
△副委員長　※幹事

印　刷　平成11年3月25日
発　行　平成11年4月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕


あけぼのパーク多賀

作品風作

設計監理■
日建設計

施工■
熊谷組大阪支店（建築）、住友電設（電気）、三建設備（機械）
桑原組（外構）、亀井造園（植栽）、丹青社（展示）

あけぼのパーク多賀

多賀町立図書館·多賀の自然と文化の館

『あけぼのパーク多賀』は、図書館と博物館の複合施設を発展させ、「読む」—「体験する」—「調べる」という機能を融合させた生涯学習施設である。1993年に多賀町で出土した約180万年前のアケボノゾウの全身骨格の化石を博物館の展示の中心に据えていることから「あけぼの」を冠した施設名がつけられた。

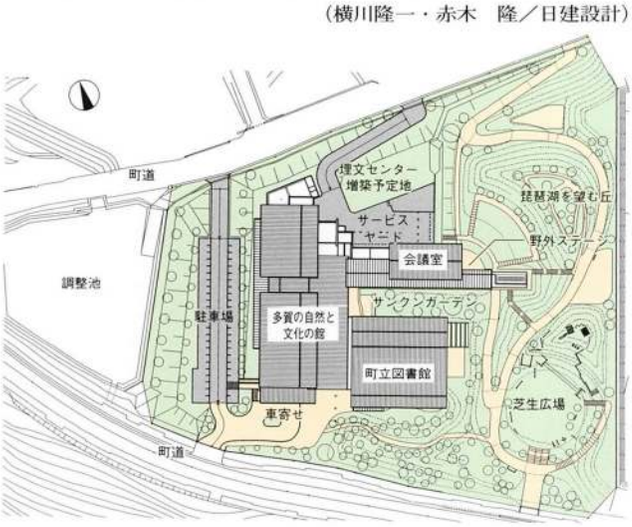
敷地は、びわ湖東部中核工業団地の導入部にあり、前面道路の向かい側には小高い雑木林がある。周辺は閑静な田園風景が広がる、いかにも多賀らしい場所である。そこで建物は、多賀の集落をイメージさせる配置とし、重なる屋根の美しさを表現した。

図書館は、向かい側の雑木林と敷地の起伏を生かし、前面道路の喧騒を和らげながら、閲覧室から外を眺める時、雑木林が前庭と繋がって見えるようにした。閲覧室には、さまざまなタイプの読書席やコーナーを設け、町の人達が図書と親しみながら、ゆっくりとくつろいでもらえる多彩な空間となっている。

一方、博物館には、アケボノゾウの実物骨格化石を軸とする展示に加えて情報学習コーナーが設けられ、多賀町のフィールドワークの拠点としての機能も併せ持った施設となっている。

室内はできるだけ天井を設けず構造の美しさを表現した。瓦屋根に覆われた天井の高い開放的な内部空間を持つ建築群と起伏のある緑豊かな外構とが一体となって、町の人々の新たな憩いの場が生まれた。

（横川隆一・赤木　隆／日建設計）



配置図　1：2500

所 在 地 ——滋賀県犬上郡多賀町大字四手976番地の2
敷地面積 ——18,207.74㎡
建築面積 —— 3,135.24㎡
延床面積 —— 3,673.37㎡
構造規模 ——RC、S、2F
工　　期 ——1997年2月～1998年12月
最 寄 駅 ——近江鉄道多賀駅、JR彦根駅
撮　　影 ——東出清彦





サンクンガーデンを見る



中庭からのアプローチ

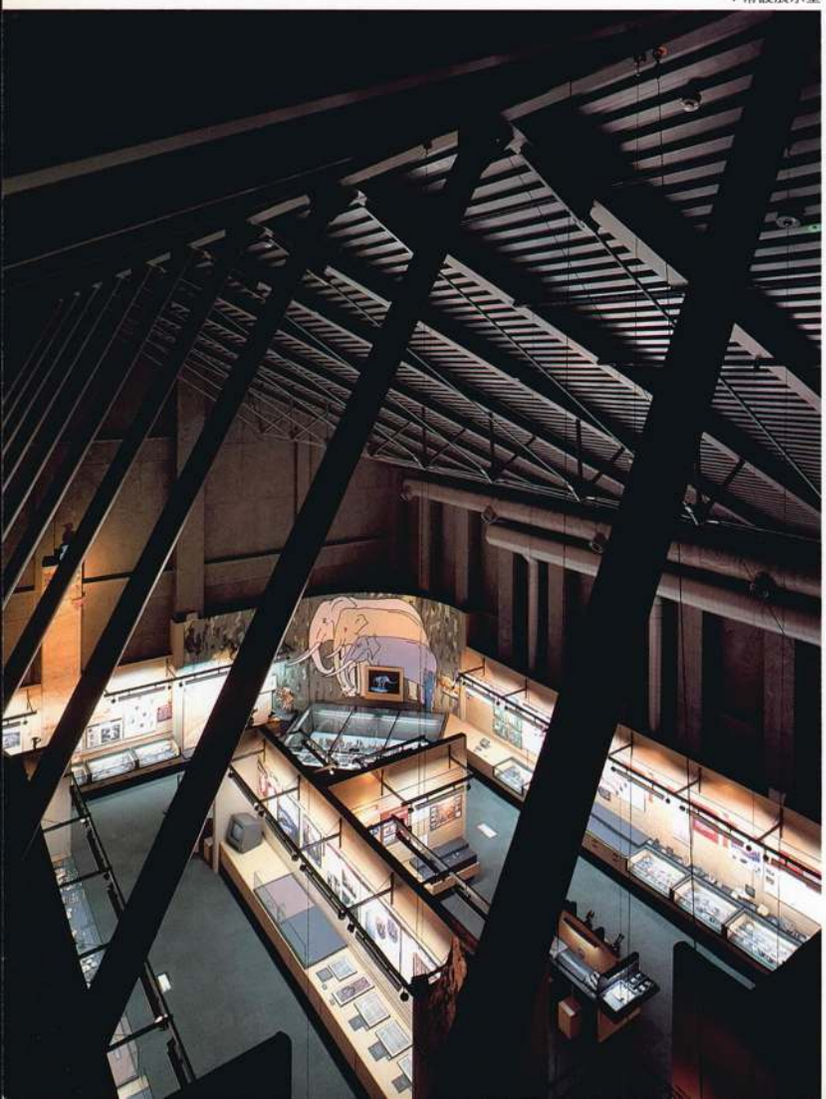
▼南側正面外観





▲図書閲覧室

▼常設展示室





図書閲覧室を入口より見る



図書閲覧室こどもコーナーを見る



常設展示室

あけぼのホールよりエントランスを見る▶



南東面外観



北東面外観

作品

設計監理■
磯崎新アトリエ、川口衛構造設計事務所
環境エンジニアリング

施工■
大林組・鴻池組・大日本土木・森本組・浅川組・尾田組
・中村建設・木村建設・ホクシンJV

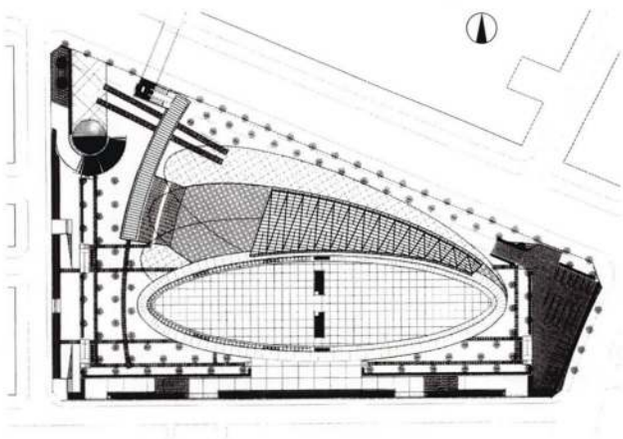
なら100年会館

JR奈良駅周辺では現在再開発事業が奈良市によって進められているが「なら100年会館」はこのJR奈良駅西口に位置している。楕円形の平面及びクロソイド曲線状の断面形を為す幾何学的外殻（大屋根）の採用にあたっては、古代都市の面影を残す景観への連続性が意識された。また周辺の民家との間に形態・スケールでその異質性を際立たせ、超越的な構築物の出現の過程を可視化することで、市制100周年記念の象徴的記号となることが意図された。外殻構造の形状的な特性を生かし建方にはパンタドーム構法が採用された。寺院の大屋根に応答する素材として燻し瓦風タイルが選ばれ、その外皮が覆われた。

敷地は平城京条里の都市軸及び鉄道軌道に並行する都市計画道路に拠って象られている。楕円形外殻の長軸は条里制の南北軸に合致する。またこの南北軸を鉄道軌道に基づいて旋回させることで、施設全体への導入部分が形成された。鉄道軌道と並行に旋回して設けられたPCパネル自立壁と、楕円形外殻の隙間がエントランスホールで、ここは上部がガラスで覆われた半戸外的な空間となっている。

大ホール＝コンベンションホールでは、舞台範囲の伸縮性と客席の可変・可動性で多様化＝多焦点化した舞台・客席間の視軸関係をつくりだし、演目に応じたホールとしての空間作りが行える仕組みになっている。また通常はホワイエとして扱われる客席背後の空間を、ホール内部に取り込み「虚舞台」と名付けて舞台の一部として利用できることが提案された。外殻を以って決定される大空間の内に2重のガラス箱として置かれる中ホール＝コンサートホールでは、ガラスのサイズ・厚さ・傾きに変化を持たせて、良好な音響空間を得ている。また外殻沿いに設けられたトップライトから差し込む自然光と2重のガラス壁の間に配置された人工光によって、中ホール内外の視覚的連続性が感知される空間演出が求められた。

（宇野　亨／磯崎新アトリエ）



配置図



エントランスホール



中ホール



大ホールセンターステージ形式

所 在 地 ——奈良市三条宮前町9-1
敷地面積 ——16,061㎡
建築面積 —— 6,416㎡
延床面積 ——22,682㎡
構造規模 ——コンクリート補強鋼板シェル構造、B1F、5F
工　　期 ——1996年4月～1998年10月
最 寄 駅 ——JR奈良駅
撮　　影 ——山崎浩治（伸和）



作品
作風

建築主■
和泉市

設計監理■
住宅・都市整備公団　関西支社
小笠原設計

施工■
田中建設

造園設計■
都市環境計画研究所

まなびのプラザ

「トリヴェール和泉」は、住宅・都市整備公団が和泉市に豊かな自然環境を活かして開発した３つのブロック（三つの森）より成るニュータウンであり、文化という視点から「心のまちづくり」を目指している。

「まなびのプラザ」は、「トリヴェール和泉」の東部ブロックにある宮ノ上公園に完成した。この公園は、桃山学院大学が立地する学園ゾーンにあり、定住性の高いアメニティ豊かな住宅地区に接している。それらの地域と融合して文化の核施設となる機能性をもたせた。

この施設は、緑化活動の場となるエリア、歴史資料の展示・研究エリア、そしてエントランスホールの３つのエリアから構成されている。それらを空間的に、そして外観的にも区別しながら、しかも一体の施設となるよう計画した。

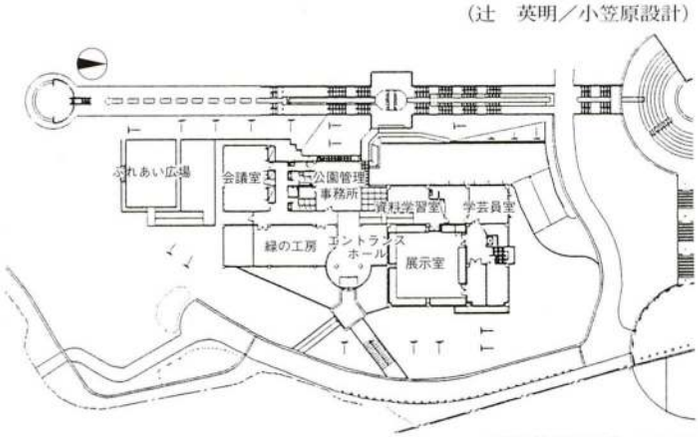
緑化活動エリアは、水・緑・光を取り込む空間構成とし、それと外部施設との関係から形づけられた。

一方、歴史資料のエリアは平面を正方形とし、外壁に地肌色の割肌タイルを全面的に張って安定性と重厚さを出した。エントランスより展示室までの空間は展示のプロローグとし、物語性のある展示空間を演出した。

そしてエントランスホールは、両エリアへの導入性と求心性を持たせ、シリンダー状にしている。

この施設が歴史・文化を通じ、市民意識の高揚と、個性を育む市民文化の場として親しまれる様願っている。

（辻　英明／小笠原設計）



配置図兼1階平面図　1：1400

所 在 地 ―― 大阪府和泉市まなび野２－４
敷地面積 ――53,518.00㎡
建築面積 ―― 1,160.34㎡
延床面積 ―― 1,688.19㎡
構造規模 ――RC、1F、B1F
工　　期 ――1998年１月～1998年10月
最 寄 駅 ―― 南海泉北高速鉄道・和泉中央駅
撮　　影 ―― （左頁）河合止揚、（右頁）栗林威城


鳥瞰


外観


エントランスホール

▼展示室



外観正面



外観西面



作品風

設計監理■
東畑建築事務所

施工■
新井組

アサヒプリテックテクノセンター

アサヒプリテックは、写真の現像廃液から銀を析出回収することに始まり、歯の撤去冠、メッキ液などからの、貴金属のリサイクル事業を中心として、資源の有効利用、地球環境の保全に対し、独自の開発技術をもって取り組んでいる企業である。

本テクノセンターは、アサヒプリテックの最先端の技術開発と生産を担うモデル工場として計画された。

多様な分野の研究と生産工場としての機能と同時に、アサヒプリテックへの見学者を積極的に受け入れ、企業理念をイメージさせる施設を目指している。

この施設は、様々な生産工程を含む工場部門と、研究開発・会議部門の大きく二つのゾーンに分けることができる。従って、建築も二つの棟で構成されているような姿を見せている。

内部においては、これら二つの棟の間を、三層吹き抜けのエントランスホールとして、初めての来場者にもこの建物の構成が、一目で理解できるように考えられた。

建築の外部デザインは、工場部門の棟にあっては直線的な形態であり、研究・会議部門棟の屋根、あるいは外壁はゆったりとしたカーブを描く。色彩についても、はっきりとした濃淡のグレーを二つの棟に使い分け、明確に二棟を分離している。

貴金属をまとう優美な女性（ソフト）と、それを支える男性の力強さ（ハード）をこれら二つの棟が表しているだろう。そうして、このことがまさしく多様な事業とそれを支える開発技術という、アサヒプリテックの企業のあり方そのものを暗示するのである。

（北村　潤／東畑建築事務所）



配置図　1：1600

所 在 地 ——神戸市西区室谷1-6-3（神戸ハイテクパーク）
敷地面積 ——7,189.97㎡
建築面積 ——1,663.95㎡
延床面積 —— 4,601.58㎡
構造規模 ——S、3F
工　　期 ——1998年３月～1998年11月
最 寄 駅 ——神戸市営地下鉄・学園都市駅
撮　　影 ——藤　義則（エスエス大阪）



ホール



吹抜け階段

▼夜景





作品
作風

設計監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

久保田セメント工業㈱本社

建築主は、コンクリートブロックやインターロッキング等のメーカーであり、本社ビルは、未だ開発途上のポートアイランド２期の地にブロックの自然の肌合いを見せ峻として力強く建ちあがった。
若材齢の地盤に建っているため不同沈下修正機構の基礎の上に明快なコア柱を立てスラブを渡す方式で明るく快適な事務空間を創出した。
使用したRMブロックは、このために新しく開発されたもので従来の壁式構造型のものと違って、ラーメン構造の柱型を容易に構成することが可能であり、空間設計の自由度を高めることが出来る。型枠なしで鉄筋コンクリート造が施工でき、従来の２枚ウェブ型でなく、１枚のウェブで成型され、柱配筋の可能な構成ができるほか、壁配筋においても先に縦筋を配筋でき、施工性が格段と向上し品質の確保が容易になった。更に大断面の柱型等役物の開発も行っている。
新型RMブロックを柱、壁に使用し、基礎、梁については樹脂パネル型枠、床版はスパンクリート合成床版を用いベニアレス型枠の建物を完成して地球環境保全にも貢献している。

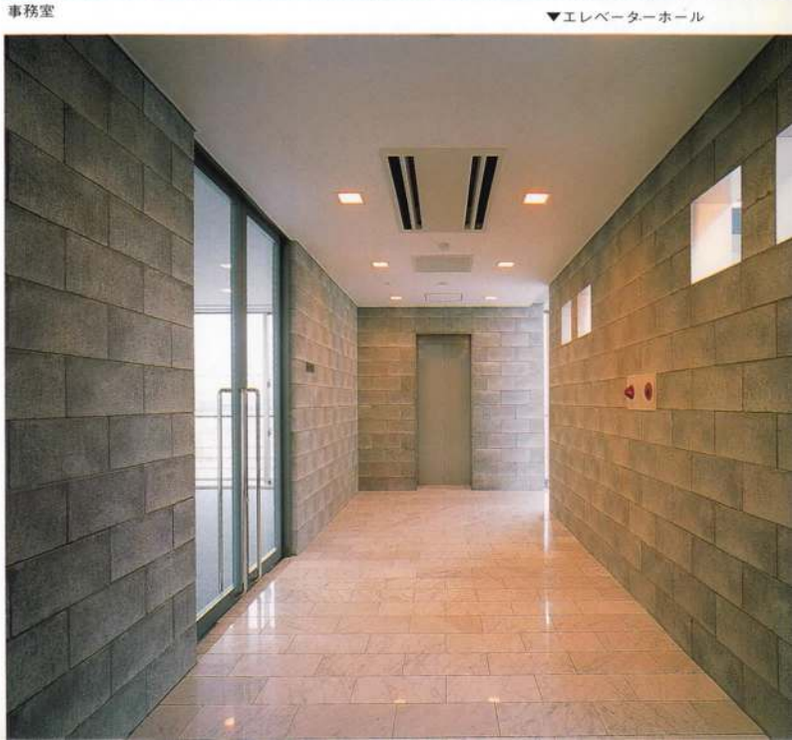
（平沢　勇・小谷美知夫／竹中工務店）

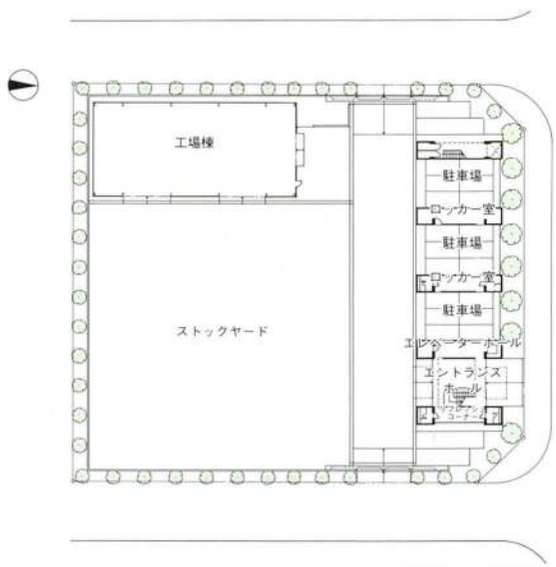


外観


事務室

▼エレベーターホール





配置図・１階平面図　１：800

所 在 地 ――兵庫県神戸市中央区港島南町3
敷地面積 ――4,000.00㎡
建築面積 ――　519.00㎡
延床面積 ――1,117.24㎡
構造規模 ――RC、3F
工　　期 ――1998年１月～1998年10月
最 寄 駅 ――神戸・ポートアイランド線・市民広場駅
撮　　影 ――名執一雄

gallery

出屋敷の家

設計
安田憲二

小さくても、

りっぱでなくても、

光が戯れ、

風が通り抜ける、

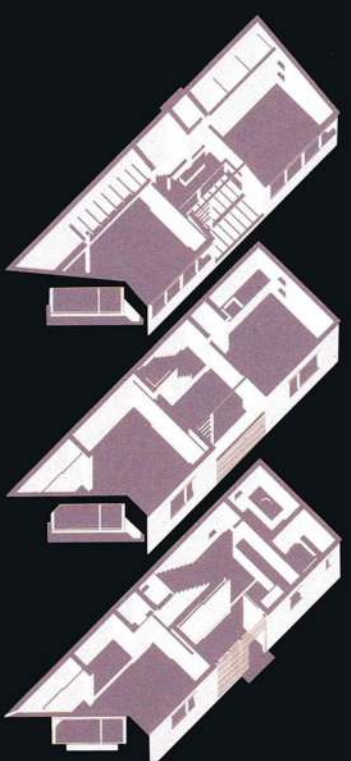
暖かで、

居心地のいい場所が、

この家にはある。



安田憲二（やすだけんじ）
1959　大阪府生まれ
1983　神戸大学卒業
1985　同大学大学院修了
　　不二建設
1988　中川巌・建築綜合研究所
1991　アイ・エフ建築設計研究所
1998　安田憲二建築事務所設立



撮　　影―福澤昭嘉
企画編集―杉原　繁（作品作風小委員会）



隠された家並

本多　友常

かつて紀伊湾に浮かぶ島々が、縄文時代後期にかけて紀ノ川の堆積と砂州の発達によって陸続きになったといわれている。そこはやがて自然の良港として、一本釣り漁法をはじめとする漁業の村を生み出していった。標高５mから50mぐらいの斜面に密集して貼りついた家々の丘の上には、この集落の外周をふちどるように細い自動車道が走り、そこから下の埋め立てられた浜に下りていく道が数本通っている。車の道からはその道の存在はほとんど分からない。ごく普通の四角い２階建ての建物が並んでいるだけで、なんの変てつも無いからだ。主要な急階段の曲がりくねったルートは、その隙間から浜へと通じている。今度は車の道に沿って埋め立てられた浜まで迂回して下りてみると、かつての浜辺沿いにやはり２階建ての四角い住宅が立ち並んでいるように見える。釣り人が目にする風景は、丘に貼りついたキューブな形の目立つ漁村の印象が強い。ところが集落の内部に入り込んでいくと、細い道に沿ってびっしりと勾配屋根を持った家々がひしめいている。いわばまんじゅうの皮のように、外周部には２階建ての住宅が建っているために、あんこにあたる昔ながらの家並みは隠されていることになる。今ここをまもる人々には一人住まいのお年寄りが増えてきている。それでも階段のおかげでみんな元気に歩き回っている。まんじゅうの皮は少し堅くなりすぎたが、まだまだ中身のあんこは味を出している。

和歌山大学教授システム工学部環境システム学科

明治建築の再生

安永　三郎

郵便局は全国津々浦々に約24,700局あり、国民の皆様に親しまれている。このうち、国の建物で、現在も郵便局として使われている明治建築は、全国で２局しか残っていない。ともに西日本にあり、ひとつは京都の中京郵便局（明治35年竣工）であり、もうひとつは山口県の下関南部町（しものせきなべちょう）郵便局（明治33年竣工）である。また、偶然の一致であるが、両局とも設計者は逓信省技師・三橋四郎である。

中京郵便局は京都三条通に面しており、赤レンガの外壁が街並の景観形成に重要な役割を果たしているが、昭和53年の新増築工事の際、内部はすっかり造り替えられ、外壁のみが保存・再構成されたものである。最近では各種の保存手法が発展してきたが、このような本格的な外壁保存は日本では初めての試みであった。

これに対し、下関南部町郵便局は100年近く経った今も当時のままの建物構造で使われており、隣接した秋田商会（大正３年）や旧英国領事館（明治39年、現下関市考古館）とともに、下関市の歴史的景観地区を形作っている。同局はこの一年、耐震補強工事が進められ、今春４月からリニューアルされた姿で蘇り、新しい世紀を迎える。歴史と人々の記憶を継承しつつ、建築が生きていくことは幸せな事である。

近畿郵政局施設部長

向こう三軒両隣

森崎　輝行

下町のコミュニティは、路地をその装置として成立していた。＜向こう三軒両隣＞といった近接した人々の親密な日常の付き合いから成立し育成されてきた。これには、時間がかけられ、培われてきた。そのコミュニティは、財産保全する為ではなく、むしろ財産分与ともいえる相互扶助で成立している。元々、経済的余裕の欠如が原因であることも否めないが、むしろ、その背景は、＜人＞の接触の頻度と家屋の配置性に関係がある様に思える。

下町は、ハレの場（全面道路・表路地）とケの場（裏路地・し尿汲み取り通路）が交互に配列されている。＜ハレ＞の場は、＜表の付き合い＞（５世帯）、＜ケ＞の場は、＜裏の付き合い＞（５世帯）である。海外旅行に行った土産、バラ寿司をつくったおすそ分け等を配るのは、＜表＞であって、＜ハレ＞の場である。世にいういい格好をする場である。しかし、少し足りないお金、味噌、醤油を借りるのは、＜裏＞であって、＜ケ＞の場である。人に見られたくない恥部ともいえる部分である。このような付き合いの範囲を向こう三軒両隣と呼び、その重層した地区を下町と呼んでいるのである。

森崎建築設計事務所

情報ネットワーク時代を生きる (4) ホームページ

本間　利雄

グループウェアとイントラネット。これらは規模が大きくなるとデータ量も当然多くなり、本当に自分が欲しい情報があるのかどうか、あるとすればどこにあるのか、探すのに一苦労である。検索の容易さと確かさが生命線である。また、宛行扶持（あてがいぶち）のツールという気持ちがあると、参画意識も乏しくなり組織の活性化もおぼつかない。そこでこれらのマイナス要因をなくすために、部のホームページを作り運営することを考えた。イントラネットが新聞の全国版であるとすれば、部のホームページは地方版である。マスコミならぬミニコミである。「部の壁新聞を作ろう」をキャッチフレーズに、身の回りの情報から意見・感想に至るまで、何でもどんどん書き込んでいくように呼び掛けてみた。その結果、なんとかホームページらしきものが立ち上がったのが昨年の初夏。以来、初心忘るべからずの精神で奮闘中である。ホームページは、その開設にもまして更新・運営が大変だとはよくいわれることだが、まさにそのことを実感している。もう一つわかったことは、このようなミニコミ紙的なホームページを自主運営していくには、利用者は受信した以上の情報量を発信すること、すなわちギブアンドテイクの精神、ひいてはボランティアの精神が必要だということである。

大林組建築設計第２部部長

都市のパブリック

都市におけるパブリックとは何だろうか。
ヘルツベルハーは「パブリックとは集団的に維持管理され、誰でもがいつでも立ち入ることのできる領域」といっているが、公園や広場、公共施設だけではなく、民間施設であっても私有地でも〈アクセシビリティ〉が確保されている場合、パブリックスペースといえる。それでは仮設店舗や屋台の並ぶ道や広場、ホームレスに占拠された地下通路など、特定の目的に専用されている公共空間の場合はどうだろうか。〈使われ方〉もパブリックの質や程度を左右する。スペースだけではなく、地域の人々に〈共有化された〉都市の記憶や風景もまた、パブリックといえるだろう。レルフは、パブリックプレイスとは「共通の経験、共通の意味を通して創造され、理解される場所」という。通りの風景は、個々の建物が〈集合的：collective〉につくりだしているものであり、そこに地域の風土や文化が表現される。
この特集ではパブリックという視点から、現在の都市環境を見直してみる。

総論■都市のパブリック
パブリックの陥穽―「公共」による〈公共〉の喪失をめぐって―／吉見俊哉
総論■世界の都市のパブリック
①"Public" in Thailand/Chartri Archjananun
②「公共空間」―ドイツでは―／Johannes Preisinger
③ Lo spazio pubblico in Italia／Daniela Poli
④海外のパブリック／François de Kerchove d'Exaerde、André de Roo、Moussa Adama Dembele、徐金泓、マヤ・アンドリア・ニラワティ、秦丹尼、王小栄、張江華
各論■パブリックの視点
①町並み―公共空間の正念場―／中川　理
②アート―環境をデザインする―／田中直人
③表現―演劇はコミュニケーション―／松原利巳
④店―商空間にみるコラボレーション―／角野幸博
⑤コミュニティ―日常のなかから自己生成する―／林　泰義
⑥緑―交じり合う空間・滲み出す環境―／中瀬　勲
点描■パブリック
都市のパブリックとは…―アンケートにみる―



サンフランシスコの PIER39にて
写真提供／伊縫憲幸

本特集企画・伊縫憲幸／梅村宏尚／小浦久子／鈴木克彦／田中直人／松川敏正／横関真紀／吉村英祐

「パブリック」の陥穽

—「公共」による〈公共〉の喪失をめぐって—

吉見俊哉

「静かな住環境づくり」?

私の友人で、隣人にひどく悩まされている人がいる。3人の小さな子どもを持つ彼の家は東京の山の手の住宅地にあるのだが、隣人からの度重なる抗議に困り果てているという。最初の衝突は、彼らが家の北側の窓を閉めていなかったことが原因だったらしい。7メートルほどの道路を隔てて向かいに住むその隣人夫婦は、家が覗かれているような気がするからカーテンを閉めるようにと言い、また音が漏れるから家の北側は窓を閉め切るように要求してきた。諍いを起こすのも面倒だったので、友人たちは窓を閉め、昼間はレースのカーテンを、夕方からはすっかりカーテンを閉めるようにしたそうだ。たしかに彼の家には3人の小さな子どもたちがおり、両親が子どもと遊んだり、子どもたちの友達が家に来たときなどはかなりにぎやかになる。その音が漏れるのもこの隣人にはたいそう気に入らなかったようで、父親が子どもたちと家で「怪獣ごっこ」や「かくれんぼ」をしたときなど、間髪を入れず抗議に来て、遊びをやめさせてしまった。結局、彼の家では、子どもが家にいるときには夏でも家の窓はほとんど閉めきる生活を余儀なくされている。

ところがこの隣人の抗議はこれだけでは終わらなかった。次に隣人は、彼の家の玄関先が外から丸見えになっているのは「非常識」だと非難し、壁のようなもので玄関先を見えなくするよう要求してくる。さらに、子どもたちが前の道路で遊ぶのもやめさせてしまう。道路は行き止まりになっており、車が通ることもほとんどない路地のようなものなので危ないということはない。しかし「公共」の道路を子どもたちが声を上げながら走り回るのがひどく気に入らなかったようだ。自分の家の前で事故でも起こされたら困るから、子どもを遊ばせるなら公園に連れていくべきだと言われたという。これにはさすがに友人も我慢しきれず、隣人との話は平行線をたどったままのようだ。ちなみにこの隣人は、彼の家だけに狙いをつけて攻撃しているわけではない。近くに他にも小さな子どものいる家があるが、そこでもこの隣人に気兼ねして子どもたちを家の前で遊ばせるのはやめてしまった。こうして、この友人が子どもの頃は近所の子どもたちが集まってきてキャッチボールや縄跳びを楽しんでいた通りから、すっかり子どもたちの姿が消えてしまったという。

もうひとつ、この噂の隣人の行動で特徴的なのは、行政にいろいろな要求をすることに熱心で、またこうした住宅地の地域環境整備の動向にも非常に敏感な点である。彼らは役所と交渉して家の前の道路にオートバイなどが通れないようにガードレールを設置させ、区に溝を浄化させ、各地の生活環境整備の情報を熱心に仕入れてきている。それはそれで一面では結構なことなのだが、そうした動向についての彼らなりの解釈が、前述のような音に対する苦情や道路からの子どもの排除の理由として使われていくのである。彼らは何度も、近隣がお互いのプライバシーを侵さないことが住宅地の環境づくりで申し合わされるようになってきていると主張し、そうした「先進的」な「公共性」の観点からするならば、玄関先が丸見えだったり、子どもを道路で遊ばせたりするのは「非常識」だと相手を非難した。あるときは友人に、ご丁寧にも近くの「先進的」な市が発行する『静かな生活環境作り』なるパンフレットを渡し、よく読んでおくようにと説教したようだ。

この逸話には、プライベートとパブリックの関係についての非常に異なる二つの立場の対立が明瞭に示されているように思う。一方で、この話に出てくる隣人夫婦に見られるのは、自分たちのプライベートな住環境をちょっとでも侵害されることに対する過剰なまでの防衛反応である。彼らは隣家から境界を越えて張り出していた木の枝をすべて切らせ、自宅前の道路で近くの子どもたちが遊ぶのをやめさせた。また隣人の家の窓や玄関先を遮蔽させ、お互いが相手をできるだけ見ない空間をつくろうとしている。そしてこのようなプライベートな住環境を行政は保護するべきであり、また昨今の住環境整備の動きは自分たちの考え方と一致していると考えている。そのために彼らは行政に要求をして自分たちの家の前の溝を暗渠化させ、浄化させ、小道の入口にガードレールをつけさせるのに成功してきた。ここでは一貫して、住宅地で保護されるべきなのは自分たちのプライベートな住環境であり、それを侵害してくる一切のものは排除するし、行政や地域の協議会などを通じてこうした意味での住環境整備を推進していこうという発想が見られる。

これに対して私の友人は、このような「プライベート＝自分の生活」と「パブリック＝行政」の結びつけ方に違和感を感じている。彼らはもしもこうした仕方で「健全な住環境の整備」が進んでいくと、ますます自分たちは「プライベート」の領域に押し込められていくと感じている。ここにはもうひとつ、コミュニティの異質性に開かれた意味での共同性の観点が欠けているのだ。この考え方からするならば、他人の迷惑になるから子どもたちは近所の路地で遊んではならず、ちゃんと行政が設置した公園に隔離されなければならない。実際、たしかにこの隣人から渡されたというパンフレットを見ると、「生活騒音」が隣近所に迷惑をかけることが取り上げられ、「子どもたちの遊び声」や「隣人の話し声」が、「集会・行事の騒ぎ声」や「自動車の空ぶかし」などと同じように「生活騒音」として括られている。ここで理想とされているのは、人々がそれぞれの家の中に閉じこもり、防音壁に守られて音を外には漏らさず、道路のような中間的な空間から子どもたちの遊び声や話し声が聞こえてく



ることがほとんどない「静かな」住環境のようなのである。

たしかにあまりひどい騒音に規制が加えられ、静かな住環境が求められるのは当然である。しかしそうだからといって、子どもの遊び声や路上の話し声などまで、およそプライベートな空間に外から「侵入」してくるすべての音を「生活騒音」とみなし、お互いが隣近所の「迷惑にならないようにする」ことが住環境整備の理想であるかのように語っていくこと、しかもそれを行政が語っていくことは本当に適切なのだろうか。そこでは個人や家族のプライベートな空間の特権性が上から「公共的」に保証され、そのことによって逆に日常のコミュニティの中での共同的な関係形成の可能性が押し狭められていないだろうか。むしろ、住宅地の道路や諸々の境界的な空間はパブリックなものであり、交通上の危険がない限り子どもたちの遊びや様々なコミュニケーションに開かれたものと見ていくべきではないか。その場合、ときにはそうした場からの声や子どもの投げたボールがプライベートな空間を侵すこともあるかもしれないが、むしろコミュニティの中にそうした帰属の曖昧な空間を積極的に創り出していくことに意味があるのではないだろうか。

❖

「まわりのお客さまの迷惑」?

これまで述べてきたことを、少し場面を替えて別の角度から考えてみよう。最近、通勤電車に乗っているとひどく気になることがある。「まわりのお客さまの迷惑になりますから携帯電話を車内で使わないでください」というあの車内放送である。最初にこの放送を聞いたとき、私は妙にこの「まわりのお客さまの迷惑」という言い回しに引っかかるものを感じた。携帯電話をかけることが、いったいどのような「迷惑」になるのだろうか。たしかに中年過ぎの男性などで、周囲を気にせず必要以上に大きな声で電話をしている人を見かけることがある。これはたしかに迷惑と感じられることもあろうが、それならば「携帯電話をかけるときには、まわりのお客さまに迷惑にならないように小さな声でしてください」と注意すれば済む話ではないか。また、もしもこの「迷惑」が電磁波による悪影響の問題を指しているなら、そうした理由を明確にして、私たちがよく飛行機の機内で言われるのと同じような措置が講じられるべきであろう。「話す」という行為だけに限って言うならば、電話で話をしていようが、対面して話をしていようが原理的には違わないはずで、いずれの場合も大声は迷惑だし、小声はそれほどには迷惑ではないのではないか。

もちろん、このように携帯電話がことさらに排斥されることに、メディア論的な説明ができないわけではない。この点は、すでに7年ほど前に友人たちと出した『メディアとしての電話』(弘文堂)という本で指摘したのだが、電話というメディアのリアリティを脱コンテクスト化していく作用にかかわっている。電話をしている人は、物理的には彼が身を置いているその場にいても、意識としては通話をしている相手と空間を共有している。つまり彼は、メディア論的にどうしても「心ここにあらず」という状態になってしまうのである。しかもこうしたことは、彼の話し声や態度から、周囲の人の目にも見えるようになる。ところがわれわれは、普通は同じ場所にいる場合、最も基底的なところでその場所に一緒にいるのだというリアリティを共有している。たとえ互いに見ず知らずの間柄で、話もしないでも、その場所に一緒にいるという認識は共有している。ところが携帯電話は、容易にこうした自明性を壊してしまうのである。電車の車内のような場合、そこにいる人々がお互いに意見が違うからといって反発し合うようなことはない。しかしそれでも、同じ車内にいるのだという前提的なリアリティまで危険に晒されると、無意識のうちにも共有のリアリティをなんとか再建しようという動きが生まれることになる。

しかし、私がここで考えたいのは、こうした携帯電話に対する無意識レベルの違和感の由来ではない。あるいはまた、私はここで、電車の中で携帯電話を使用しても構わないという主張をしているのではない。パブリックの場での携帯電話の使用には、たしかに何らかのルールが必要であろう。しかし私たちの社会は、そのルールをどのように形成しているのであろうか。実際には、私たちは突然、自分たちが乗っている電車の車内放送が携帯電話の使用を禁止するのを聞いた。その理由は、「まわりのお客さまの迷惑になるから」というものであった。つまり私たちは、パブリックな場でのコミュニケーションのあり方をめぐり、ほとんど議論らしい議論をしないまま、車内放送の声によって一方的に何が「正義」であるかが決められているのである。車掌の中には、乗客たちのマナーを「正しく」管理することを自らの使命であると心得ているかのように、私たちのふるまい一つひとつに懇切丁寧に介入してこようとする者もいる。ここでは車掌の役割は、従順な羊の大群を目的地にまで運ぶ羊飼いのようなものである。駅や電車がパブリックな空間であり、そこにおいて人々が従うルールは、上から突然与えられるのではなく、皆の話し合いの中から合意されていくべきだという考えは、どうやら毎日ぎゅうぎゅうづめに詰めこまれ、目的地まで運ばれていくわれわれ羊の大群には無縁の発想のようである。



しかし、このようにして「羊飼い」から「羊」に何の議論もないまま押し付けられたルールは、それほど従順ではない羊にとっては何の強制力もない。実際、私たちは、繰り返される車内放送をものともせずに平気で携帯電話で談笑する若者たちや仕事の打ち合わせをしているビジネスマンたちをしばしば目にする。そしてその横には、彼らを白い目で見、非難めいたひそひそ話をする人々がいる。なかには口に出して相手を咎める人もいることであろう。そんなわけで最近では、車内放送はしばしば「携帯電話の使用をめぐる車内でのトラブルが増えてきた」とも言明している。しかしこうしたトラブルのある部分は、実は車内放送自体によってもたらされているのである。つまり、もともと電車の中がいかなるパブリックな空間であり、どのようなルールが共有されているべきかについての合意がまったくないままに、いきなり車内放送でそうした状況の定義を与えようとしても、そうした「上から」の定義を鵜呑みにする人々と「まわりのお客さまの迷惑」という理由づけに説得力を感じない人々の間のギャップをますます大きくするだけなのだ。

しかも、この車内放送が前面に掲げているのは「まわりのお客さまの迷惑」という個人のプライベートな権利である。つまり、ここでは個人の静けさを守るというスローガンが十分にうるさい車内放送で繰り返し流され、「まわりのお客さま」にとっては不愉快な異分子が排除されているのだ。このような放送を流す鉄道会社やそれを支持する乗客にとって、駅や電車の車内はプライベートな主体としての個人の集合という以上のポジティヴな意味を持ってはいない。これらの空間における公共性とは、それぞれの乗客のプライベートな権利が守られることであり、そのために公共的な権力として車掌が乗客たちを指導していくことになる。もしもこのような考え方が都市全体、社会全体のパブリックな空間まで拡張されているとしたらどのようなことが起こるだろうか。その場合には、街路であろうと、広場であろうと、そこを歩く個人のプライベートな権利が優先的に保証され、公共性は、そこに集まった諸々の人々の間から生まれてくるというよりも、そうした個人の権利を上から保護する管理の主体として立ち現れることになる。1960年代末、新宿駅西口地下広場に若者たちが集合し、フォーク集会を始めていったとき、結局は道路の通行の邪魔になるからという理由で排除されてしまったことを思い出してみてもいい。

このような状況を、たとえばパリの地下鉄と比べてみよう。パリに滞在したことのある人ならば誰でも知っているように、地下鉄に乗っていると、頻繁に流しの楽師たちが乗り込んでくる。そして一駅か二駅の間、音楽を演奏し、歌を歌い、乗客からチップを集めるのである。このような風景はあまりにも自然なものになってしまっているから、誰も彼らの音楽が「まわりの客の迷惑」になるからといって咎める人はいない。音楽が気に入らなければチップを出さなければいいのである。しかもパリでは、こうした楽師たちの駅や地下鉄車内での活動を市当局が「公共的なもの」として認めて許可証を発行している。つまりここでは、「広場的」な公共空間の考え方が地下鉄の駅や車内にまで浸透してきているのである。他方、日本の場合、電車の中の公共性とは、一人ひとりの乗客が互いに相手の領分を侵さないように文字通り「上から」規制する車掌や電鉄会社の側にある。パリの地下鉄に流れる路上の楽師たちの歌声と、東京の通勤電車に流れるお節介な車内放送は、この二つの都市における公共空間の概念の差を明瞭に示している。どうやらここでは、都市が公共的な空間であるということは、そこにおいて一人ひとりが他人の迷惑にならないように上から与えられたルールを守るということを意味するのであって、そこが私的領域とも、国家や企業によって直接管理される領域とも異なる、パブリックなコミュニケーションの場であるということをいささかも含意するわけではないようなのである。

❖

防衛機制としての「パブリック」?

以上の二つの事例から、われわれは日本の都市において「パブリック」な原理を実のあるものにしていくのがいかに困難であるかを見て取ることができる。日本において公共性とは、結局のところ個人の私的権利やプライバシーを保護し、個人間の衝突が起きないように規制していく上位の管理主体という以上の意味をなかなか持たない。最初の例で、私的な権利意識を強固に持った隣人が、頻繁に行政に苦情を申し立てて自分の家の住環境を整備させ、家の前の路地から子どもたちの遊びを排除し、近隣の家々から音が漏れたり、木の枝が張り出したりすることがないようにまわりに要求していったのは、こうした日本的な公共性のあり方にうまく適合しているようにみえる。彼らはおそらく、電車の車内で携帯電話の話し声が聞こえてくるのは個人のプライバシーを侵す「非常識」なことだといって、車掌や電鉄会社に苦情を訴えるのも辞さないであろう。ここでは公共性は、個人と個人、家と家、社会と社会の間の境界領域に生じるものではなく、むしろそうした曖昧な境界領域を排除していく上位の力として働いている。ばらばらな個人が、パブリックな場

でもう一度横に結びついていくのではなく、ばらばらのまま自らの権利を防衛していくことを可能にする上位の管理的な力として、「公共性」が支持されているのである。

かつてリチャード・セネットは、人々の純粋なアイデンティティを追求しようとする願望と結びついてこのような上からの管理的な力が作動していくメカニズムを的確に分析した(『無秩序の活用』中央公論社)。セネットによれば、「社会との厄介な相互作用が自分たちを押し潰してしまうのではないかという怖れは、前もって自己イメージを固定し、自分を社会的状況に影響を受けやすい開かれた人間ではなく、むしろ固定的な対象にしてしまうことによって、処理されている」。個人であれ、集団であれ、彼らは自分たちのプライベートな領域に見知らぬ他者が侵入してくることを怖れ、「首尾一貫し、統一され、恐怖を濾過しさるようなアイデンティティ」を確保していこうとする。そのためには当然、コミュニティや都市空間のレベルで、人々が見知らぬ他者の侵入を防ごうとする共通のアイデンティティを有していると信じこむ仕掛けが必要である。電車の車内放送では、「まわりのお客さまの迷惑」という言葉がキーワードとなって、そうした「迷惑」な行為を防ぐ「われわれ」のアイデンティティが構築されている。冒頭の隣人のケースでは、「住環境の整備」というスローガンが、彼らが近隣のふるまいに介入していくときの口実となっていた。いずれの場合も、他人が迷惑と感じたり、その私生活の静寂を乱すかもしれないような行為はすべて「公共性」の観点から避けられなければならないという考えが根底にある。

セネットによれば、「他者性」に対する怖れをこの神話的連帯によって解決することは、およそ三つの顕著な社会的帰結を含んでいる。第一は、この神話的連帯が、コミュニティの共同生活への実際の参加を不要にし、集団間の直接的な交渉を通じた問題解決への努力を事前に解消してしまうことである。「共通の経験もなしに共通の絆を感じるということが起きる理由は、第一に参加を怖れ、参加の持つ危険と問題を怖れ、それが持つ苦痛を怖れる」からだとセネットは言う。第二に、共通の純粋なアイデンティティを求める人々の連帯は、彼らが求めるアイデンティティから外れた逸脱者を抑圧していく。「われわれ」は自分たちの共通性を、そこから外れる「彼ら」を排除していくことによって確認する。「共通のアイデンティティを表現することと逸脱者を抑圧することは、ともに自らの内にある力を怖れることの表現」なのである。「諸個人は、アイデンティティの形成において、苦痛に満ちた経験や秩序抜きの対決や試行をはっきりと回避することによって、首尾一貫した自己意識を獲得している」。彼らは無秩序や曖昧さ、単一のアイデンティティに回収できないような異種混淆性に対する寛容さを持ち合わせていない。そのため第三に、ひとたび「社会的緊張が突発すると、最後的な方法である侵略や暴力、報復が正当化されるようになるだけでなく、それが生命保存の手段であると見なされるようになる」。

セネットは後に、このような公的領域の喪失が、20世紀の西欧の都市の中でどのように起こっていったかについても跡づけていった(『公共性の喪失』晶文社)。そこでも指摘されたのは、狭い範囲での親密さの強調やプライベートな空間の防衛機制が、パブリックな空間とそこでのパフォーマティヴなコミュニケーションを疎外していってしまうことである。これまで述べてきた例にも示されるように、日本の場合、このような防衛機制は、「公共性」とは「他人の迷惑になるようなことをしない」ことであるという観念によって「上から」支えられている。街路や路地であれ、駅や電車の車内であれ、この国では公的空間を、行政や電鉄会社のような機関によって完全には管理されてしまうのではないようなものとして社会的に想像していくことがきわめて困難である。なぜならば、「公共性=パブリック」が、ここでは結局、個人の私的な生活環境やアイデンティティを守ってくれる上位の権力という以上のものとしては理解されていないからだ。そのために、住環境や都市空間において「公共性」が強調されればされるほど、パブリックな遊びやコミュニケーションの空間が失われていくという逆説が生じているのではないだろうか。

知られるように、西欧の言語における「パブリック」は、民衆ないしは公衆の意味を有している。ところが日本では、「公共」とはもともと「公(おおやけ)」である。それは要するに「公儀」であり、「お上」であった。「パブリック=公共性」をめぐる認識のこの落差が、今日、過去のものとなったとは思えない。しかも最近では、「お上」としての「公共」が、一人ひとりの住民や乗客のプライベートな権利を守る役割を担うべきだと思われているから、話はいっそう厄介である。私的な領域がそれぞれで閉じられていく動きと、行政や電鉄会社、都市開発会社が「公共性=パブリック」を専有していく動きが連動し、結果として異なる他者に開かれた「パブリック」の場は、その存在の余地を狭められてしまうのである。今日、地域の住環境を住民自らが整備していこうという動きや、パブリック・アートの実践や、様々なパブリック・スペースを創出していく動きが盛んになってきている。だが、こうした動きは現代における「パブリック」とは何なのかを問い返していく文化的実践と結びつけられていかなかったら、思わぬ抑圧効果を生む可能性も含み得る。「公共性=パブリック」を閉鎖的な管理の口実とするのではなく、開かれた対話のための方法にしていくことに、私たちは十分に注意深くあらねばならないのである。

(よしみ　しゅんや　東京大学助教授　社会学・都市論)

世界の都市のパブリック

"Public" in Thailand

Chatri Archjananun

タイ王国大阪総領事館領事

Bangkok has been the capital of Thailand since 1782. The origin of this great city of Bangkok today, is located in the city center called "Koh Rattanakosin" or "Rattanakosin Island" which is about 414 hectares. While Bangkok is growing and expanding rapidly, the notion of "public" is well realized ever since it was founded. There are many "public" parks in Bangkok City. Below are two good examples of the "public" area of Bangkok.

(1) Sanam Luang (The Royal Field)

This large open space has existed since the emergence of Rattanakosin. Earlier, Sanam Luang had smaller size than today until the field was extended and reshaped in the Fifth reign (1868-1910). Tamarind trees around the field were also planted in the same period which means they have been standing for about 100 years. Sanam Luang has been used for various public activities. Besides being huge open space in the city core area, it is also used for some Royal rites and ceremonies, including Royal funeral, public meeting and it was the place where weekend market (now relocated to Chatuchak park) had been taking place for many years.

(2) Rommaneenart Park (The Former Central Jail)

The current park area with three western style buildings was initially a jail which had been built and operated from 1890 until a decade ago. It had been used as Bangkok Central Jail until recently when the government realized that a jail with high wall was not appropriate to stand in the heart of the city. After relocating the jail to suburban area in Nontaburi, the government started the area redevelopment and buildings preservation project in 1991. The three main buildings are adapted to be a museum and exhibition hall displaying products manufactured by prisoners. And a vast space inside the former jail is now redeveloped to be a public park, namely Rommaneenart Park. The park is built to celebrate the present Queen's sixtieth birthday.



สวนรมณีนาถ (เรือนจำพิเศษกรุงเทพมหานครเดิม)
"Rattanakosin Town Trail" より

(チャトリ・アーチャナヌン)

バンコクは1782年からタイの首都である。現在では大都市となっているバンコクであるが、その起源は市の中心にある「コー・ラタナコシン（Koh Rattanakosin)」または「ラタナコシン島（Rattanakosin Island)」と呼ばれる地区であった。そこは約414haのエリアであった。バンコクは急速に成長し、拡大していっているが、「パブリック」という概念は、ラタナコシン島で都市が築かれて以来ずっと実感されてきたものである。例えばバンコクには多くの公園がある。そのうち二つの公園を紹介する。これらは、バンコクの「パブリック」な場所の例である。

(1) **サナム・ルアン**（Sanam Luang）〈王宮広場〉

ここは、大きなオープンスペースで、ラタナコシンの発祥以来、ずっと存在し続けている。最初はもっと小さかったが、第5世王朝(1868-1910)のとき拡大整備された。現在広場の周りに並ぶタマリンドの並木は、そのときに植えられたもので、樹齢が100年近くになる。サナム・ルアンは様々なパブリック・アクティビティに利用されている。ここは、市の中心部にある大きなオープンスペースであるというだけではなく、王室の葬儀などの儀式や祝典、市民の集まりが行われる場所でもある。また、今はチャトゥチャック（Chatuchak）公園へ移ったが、長く週末の市が開かれていたところでもある。

(2) **ロマンニナー公園**（Pommaneenart Park）〈旧刑務所跡〉

現在三つの西洋式建物が建つこの公園は、かつては1890年以来100年間刑務所があったところである。ごく最近まで、バンコク中央刑務所として使われていたが、政府が都市の中心に高い塀が続くのはよくないということに気づき、市の郊外にあるノンタブリ地区に刑務所を移転させ、1991年から建物を保存しつつ再開発を行った。三つの主要な建物は現在、博物館と展示場として利用されており、展示場には受刑者がつくった製品が並べられている。刑務所のあった大きな空間は公園として再開発され、ロマンニナー公園と呼ばれている。この公園は現在の女王の60歳の誕生日を記念してつくられた。

「公共空間」–ドイツでは–

Johannes Preisinger

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事

日本とドイツでは公共性について、都市計画と建築の分野で根本的に異なった理解が形成されてきました。日本では、とりわけ土地に関して私有地に対峙するものとしての「公的なもの」という解釈が主流ですが、こうした解釈はドイツでは「Public」という概念の持つ、より複合的解釈の一部にしか過ぎません。「Public」という概念はただ単に、ある特定の広場や、道路、建物が万人に利用されうる、すなわち立ち入り可能であるというだけの意味にとどまりません。ドイツでは、一般的にこの概念はもっと主観的に把握されています。ドイツでは「Public」という概念は個人・個人が自分をとりまく環境をどう知覚するかという状況とも関連してきます。したがって、個々人自身もこの環境の一部であり、ある程度までは Public な存在であり、この周囲の世界と相克しながらその形成に意識的に関与しているのです。

❖

どの建物、通り、木もが、それを所有し利用している人々になにがしかの影響をおよぼすだけにとどまらず、それらは相集まって、そこに住む人々全員に対して複合的な生活環境を形成しているのです。この意味では当然のことながら民家、商店もそれぞれある程度までが Public な存在であります。ドイツでは生活環境への住民の関心は政治的にも表明され、それは多くの法律や条例に反映され、公共の利益・関心を利己的関心から守っております。これは環境保護だけに関してばかりではなく、適切な都市計画による景観保全、緑地や子供の遊び場やそれらに相応しいインフラ設備の創設を指示しております。公共の利益を守ることによって個々人は制限を受けることになります。したがって、常に民主的システムの枠内で、政治的に世論形成を行いつつ異なった種々の関心をバランス良く調整していかねばなりません。その際、オープンな民主的世論形成が制限されると、不均衡が生じます。

❖

日本では Public と Private の区分は、単に土地や建物に関する所有規定に終わっています。建築はそれ以外の強制から自由であります。これはこれでもちろんいいのでしょう。日本には、世界でも有数のクリエーティヴな建築家が何人かおられます。しかしマイナス面も否定できません。とりわけ日本の大都市では個々人の利益よりも公共の利益を優先させるという都市計画の根本理念の実行は不可能のように見えます。

高度経済成長時代の歴史的都市景観の複合的・暴力的破壊はその事実のあかしでありますし、表面的な再建プロジェクトでは失われたものは取り返すことができません。そしてバブル期のいわゆる「公共建築」において、日本におけるこの概念の矛盾が明白になりました。この時期に設計もしくは建てられた多くの建物は、所有と利用という観点からは確かにオープンなものであります。しかし建築の観点からは、この定義は極めて怪しいものです。なぜなら、生活環境への影響は不問にしても、多くの場合、調和的都市景観への公的関心がないがしろにされているからです。このプロセスがまだ終着点に至っていないことは JR 京都駅の建物が示しております。

❖

私の考えでは、ここで簡単に述べた概念規定の相違には、日独の社会システムに内在するより深い文化的ニュアンスが反映されていると思います。両社会は、歴史的成長過程において様々な地理的・政治的要因に影響を受けてきました。日本国民は生活環境に関しては今までドイツ国民と異なった公的関心を持ち、ドイツ国民に比べてそれをあまり前面に押し出すことはしなかったようですが、将来はそれも変化すると思います。—日本語で原稿受理—（ヨハネス・プライジンガー）



まちの歴史を引き継ぐ
市街地の更新

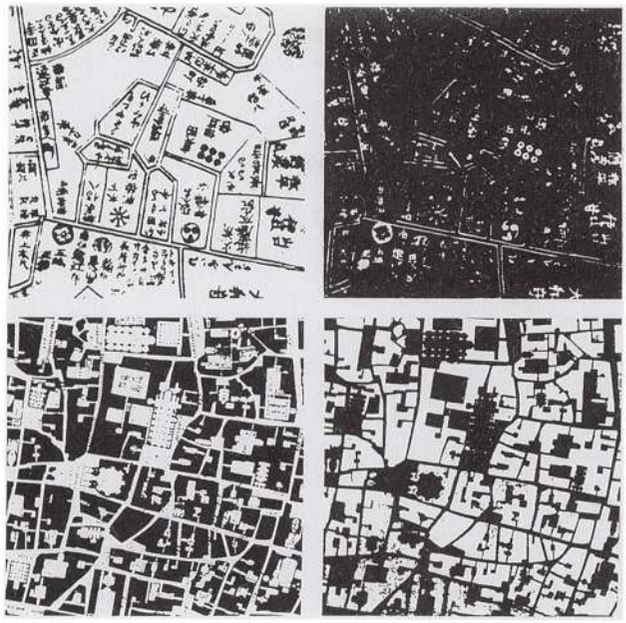


中庭を通り抜ける小道

Lo spazio pubblico in Italia

Daniela Poli

フィレンツェ大学常勤講師



ノッリのローマ地図（1748年）と芦原の江戸の地図の比較

Augustin Berque per descrivere la diversa concezione dello spazio pubblico in Oriente e in Occidente usa la contrapposizione lineare/cellulare (Berque, 1982). Un interessante raffronto compiuto da Ashihara consente di articolare fruttuosamente questa contrapposizione (Ashihara, 1983). Ashihara confronta, con l'ausilio della rappresentazione cartografica, le città di Edo e Roma. La differenza sarebbe apparsa subito anche dal confronto diretto tra gli originali cartografici, ma, invertendo i colori, Ashihara lo rende ancora più significativo. Nel gioco cromatico, in bianco risultano gli edifici ed in nero gli spazi pubblici. Quello che appare è sorprendente: la Roma del Nolli (1748), rimane quasi la stessa, mentre l'antica carta giapponese si annerisce vistosamente. La reazione opposta delle carte rende evidente l'opposizione fra due modalità di vivere e di costruire la città. Una diversità che si gioca tutta sulla concezione dello spazio pubblico. Lo spazio urbano italiano è composto da una geometria ordinata, da una razionalità lineare e geometrica. La città si costruisce su un tessuto fortemente gerarchizzato che usa come materiali principali le strade, gli isolati, gli edifici, le piazze. Nella città giapponese, invece, anche le strade principali - elemento cardine della struttura urbana italiana - sono appena differenziate le une dalle altre e non si impongono come l'orditura fondativa dello spazio urbano (Paba, 1995). Possiamo rintracciare nella città giapponese due caratteri morfologici dominanti, che la caratterizzano come uno spazio *introflesso*: la forte orditura del sistema delle acque e la suddivisione cellulare dello spazio abitato, costituito dall'aggregazione di unità di quartiere e di vicinato, irregolarmente ancorati gli uni sugli altri. La città italiana è all'opposto uno spazio *estroflesso*, uno spazio che riversa la propria immagine e la propria organizzazione politica nella struttura dello spazio pubblico. E' possibile "leggere" il potere e la ricchezza di una città nella quantità e qualità di spazio di relazione di cui essa dispone.

La forma della città italiana che oggi possiamo definire storica - che si va delineando dal periodo medievale fino al periodo ottocentesco - ha origine da un progressivo indebolimento dell'organizzazione comunitaria in cui vita

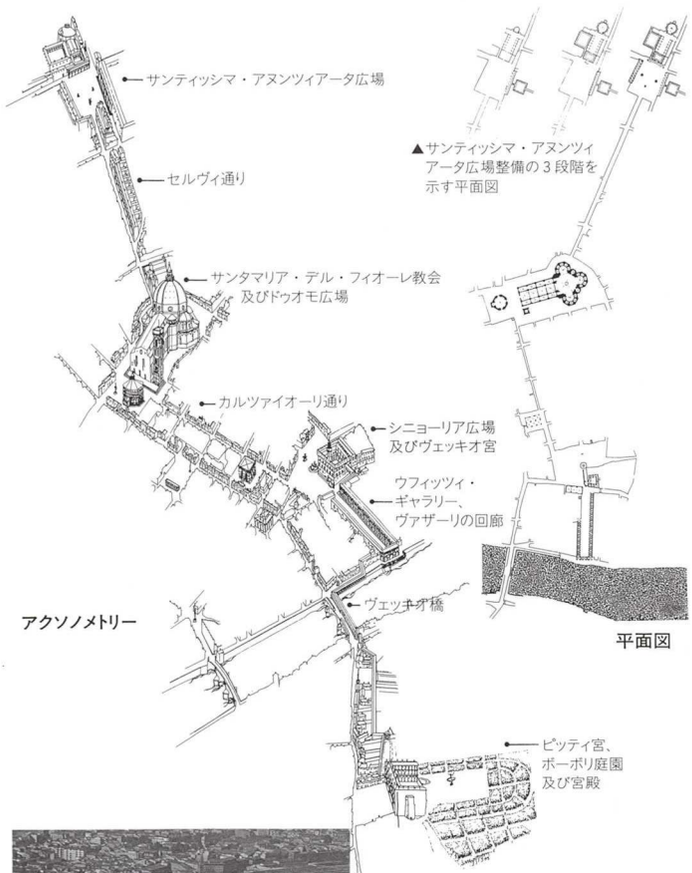
「イタリアの公共空間」

オーギュスタン・ベルクは、東洋と西洋で公共空間の概念が異なることを「細胞状」と「線状」という対比を用いて説明している（Berque, 1982）。この対比的概念は、芦原が示した興味深い比較地図を見るとよくわかる（芦原、1983）。芦原は江戸とローマの町の地図を比較して示し、その違いは一見して明らかであるとするものの、原地図の内容を白黒反転して描くことでその違いをより意味深く見せている。白黒反転すると建築物が白色に、公共空間が黒色になるが、そこに現れてくる地図には驚くべき違いがある。ノッリの描いたローマの地図（1748）では反転前後でほとんどその内容が変わらないのに、日本の古地図では目に見えて黒く変化するのである。

こうしたことから両都市の生活様式や都市構成の違いが明らかになり、特に、公共空間の違いがよくわかる。イタリアの都市空間は、道、街区、建物、広場が主な要素になり、それらが明快なヒエラルキー構造で組み上げられていて、しかも整然とした幾何学、つまり線状や幾何学構成といった、合理的な構成がある。反対に日本の都市では、イタリアの都市では中心的な要素になるであろう主要な道路が他の道路とあまり違いがなく、都市空間を支える不可欠な道筋になっていないのである（Paba, 1995）。こうした日本の都市に支配的な形態的特徴を二つ挙げることができる。一つが川筋の存在であり、もう一つが近隣や地区のまとまりが細胞のようにあり、それによって居住地が分割され、それらが不規則に都市空間の中に根を下ろしていることである。このような姿を「内側へ向けられた（intro-flesso）空間」と特徴づけておきたい。逆にイタリアの都市は、「外側へ向けられた（estro-flesso）空間」をもつのである。

公共空間は独自の都市イメージや政治機構を注ぎ込む空間であり、そこに見られる空間の量や質から、その都市の力や富裕さを「読み取ること」ができるのである。

pubblica e privata non erano marcatamente separate e relegate in spazi autonomi. Anche nella città antica occidentale le abitazioni non si articolavano in un "dietro" o un "davanti" rispetto ad un percorso principale, ma la vita comunitaria, familiare e religiosa, attraversava indifferentemente sia il dentro che il fuori, senza definire nettamente delle divisioni spaziali. La concezione dello spazio pubblico nasce dalla progressiva separazione fra famiglia e comunità e si rafforza nella distruzione, operata dal cristianesimo, delle credenze magiche e totemiche, del culto degli avi e delle caste (Weber, 1950). La strada e la piazza diventano le strutture caratterizzanti il volto delle città occidentali. Esse diventano il dispositivo funzionale, insieme a corti e cortili, di relazioni di vicinanza e di attività economiche, che si insediano tra l'interno e l'esteno degli edifici in uno specifico spazio di transizione tra pubblico e privato. Nel corso del tempo la forma dello spazio pubblico italiano cambia sensibilmente la sua funzione. Nella città comunale la strada nasce adagiandosi alla morfologia del sito topografico, lo legge minuziosamente, percorre i suoi avvallamenti, le sue tortuosità per accogliere, allargandosi in un respiro solidale di tutta la comunità insediata, edifici pubblici e funzioni pubbliche, come il mercato, la chiesa o l'ediflcio comunale. Col cambiamento delle strutture di potere e segnatamente nel passaggio dalla struttura comunale a quella signorile le strade si fanno più dritte, diventano prospettiche per inquadrare il nuovo potere unico e universale. Contemporaneamente le piazze diventano geometriche, esatte, per



▲サンティッシマ・アヌンツィアータ広場整備の3段階を示す平面図

▲サンティッシマ・アヌンツィアータ広場からピッティ宮に至る公共空間のシークエンス（フィレンツェ）



◀サンタマリア・デル・フィオーレ教会周辺の街並みの俯瞰（フィレンツェ）
—ブルネレスキ設計のキューポラの向こうにジョットの塔と洗礼堂の屋根が見え、その奥に、サンタマリア・ノヴェッラ教会と鉄道駅が見えている—

contornare e rappresentare il simbolo della nuova immagine del potere: il palazzo, la fortezza, la chiesa.

❖

La differenza forse più sorprendente fra le città occidentali e orientali è data dal disegno del centro della città. Ancora oggi il cuore di Tokyo è occupato da un recinto imperiale che è sostanzialmente un parco: giardini, alberi, persino

---

❖

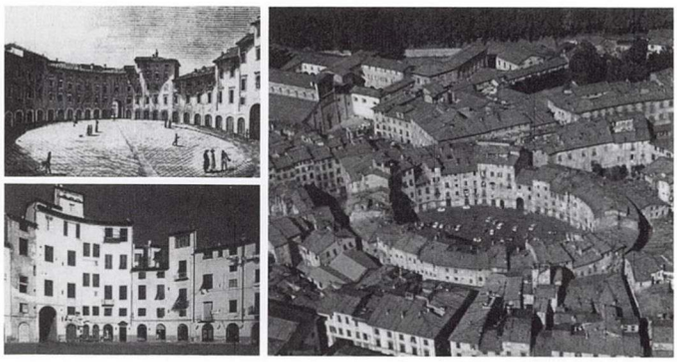
中世期から1800年代までのイタリアにおける歴史的都市は、共同体の弱体化の過程からその形態が形づくられたと言ってよい。共同体空間では公的生活と私的生活が互いに分かれることなく融合しているものだが、西洋の古代都市でも、住宅が主要な通りに対して「後ろ」にひかえるとか、「前」でつながるとかいった分節的な構造がなかった。そこでは、社会生活も家族生活も宗教生活も、空間の切れ目なく、建物の内外で展開していたのである。

ところが、この家族が共同体から徐々に乖離する過程で公共空間が生まれ、それが、キリスト教によって進められた魔術的信仰やトーテム信仰の撲滅、あるいは祖先崇拝や特権階級の撲滅で強化されたのである（ウエーバー、1950）。その結果、道や広場が西洋都市の景観を特徴づけることになった。道や広場が、街区内の大小の中庭とともに、近隣生活や経済活動を機能させる装置となり、建物の内外部で展開されるそれらの活動にとって、公的要素から私的要素へ移り変わる特有な空間を安定的に形づくることになったのである。

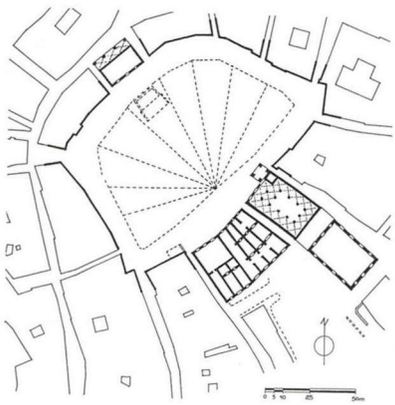
しかし時の経過とともに、この公共空間の形態や機能も少しずつ変わってきている。中世自治都市の道は、地形の微妙な変化に対応して生まれ、曲がりくねりながら居住地の様々な要素を一体的に結びつけるように広がっている。つまり、市場や教会や市庁舎などの公共建築物や他の公共的機能を統一的に結びつける有機的な形態だった。しかし、コムーネ制からシニョーリア制へ権力構造が変化する中で、この新しい唯一の普遍的権力を組み入れるために道は直線的になり、透視画法が用いられてくる。それと同時に、広場も新しい権力の象徴である宮殿や要塞や教会を取り巻き、これを演出するために幾何学的な形態になる。

❖

西洋と東洋の都市の間に横たわるもっと驚くべき違いが、都市の中心部にある。今日でもなお東京の中心部には皇居があり、本質的には大庭園で占められている。そこには、いくつかの庭園、樹林、小さな水田まであり、それらの間で緑に隠さ



▲古い資料にみるルッカのアンフィテアトロ広場（メルカート広場）
—広場内部からと上空写真。古代ローマ期の野外劇場の形をそのまま受け継いで中世期に改築、増築が行われて現在に至る—



◀シエナのカンポ広場
—広場と主要建築物の総合平面図—

una piccola risaia, tra i quali, nascosti nel verde, sono collocati i padiglioni imperiali, costruzioni in realtà assai modeste nella consistenza materiale, se paragonate alla standard europeo del palazzo reale (Paba, 1995). Lo spazio pubblico italiano è incapace di concepire un centro vuoto della città. Il centro della città è spesso una piazza. La piazza è il cuore della città e il cuore di tutto il territorio circostante. Ma la piazza accoglie, la piazza inquadra, la piazza corona la pesante materialità di un palazzo.

❖

La trasformazione della città moderna in città contemporanea ha però cambiato totalmente, fino a renderla illeggibile, la forma dello spazio pubblico. Le espansioni periferiche presentano uno spazio pubblico sempre più dissolto e disseminato. La strada contemporanea, pensata per accogliere il traffico urbano e sovralocale, non svolge più le sue complesse funzioni di relazione sociale. Esse non sono più un dispositivo relazionale. La necessità di relazione e di scambio, che però permane inalterata, viene trasferita, racchiusa e enormemente semplificata nelle grandi strutture del consumo di massa. I supermercati e gli ipermercati accolgono funzioni sempre più complicate, ma legate integralmente al mondo del *loisir* e diventano "la nuova piazza" periferica, il luogo del consumo del tempo libero e del fine settimana. Oggi sono questi gli elementi, assieme alle grandi strutture del trasporto (come aeroporti, aree di sosta autostradali e stazioni ferroviarie) che costruiscono lo spazio pubblico italiano, spazi che Marc Augè ha definito "non luoghi" (Augè, 1992). Anche la città storica - con le sua piazze, le sue strade, i suoi monumenti, la sua capacità di comunicare un'identità definita e specifica - è entrata a far parte di una forma di *loisir*. Non si tratta però di un *loisir* locale, come quello standardizzato degli ipermercati, ma di un *loisir* globale che ricerca le specificità storiche, le peculiarità e le differenze del passato, di cui la città storica italiana è ancora fortunatamente ricca.

（ダニエラ・ポーリ）

Bibliografia citata

Augé M., *Non Luoghi. Introduzione a una antroplogia della surmodernità*, Elèutera, Milano, 1993 (ed. orig. 1992).

Ashihara Y., *The Aesthetic Townscape*, MIT Press, Cambridge (Mass.) 1983.

Berque A. *Vivre l'espace au Japon*, Puf, Paris 1982.

Paba G., *Immagini di Cipango e di Edo: carte e figure della città e del paesaggio tra oriente e occidente*, Bollettino del DUPT, Università degli studi di Firenze, n.2/1995

Weber M., *La città*, Bompiani, Milano 1950

ダニエラ・ポーリ／1961年生まれ
1997年「都市および地域の環境計画・デザインに関する研究」で学位を取得。現在、フィレンツェ大学建築学部都市・地域計画学科の都市及び地域地理領域　契約教員。

れるように皇居が置かれている。その建物をヨーロッパの標準的な王宮に比べると非常に控え目な建築である（Paba, 1995）。イタリアの公共空間でこのような「空っぽ」の都市中心を想像することはできない。中心にはたいてい広場があり、その広場は都市やその周辺地域の心臓であるが、そこには重々しい実体を伴う宮殿建築を受け入れ、それを縁取り、それを取り巻いているのである。

❖

現代都市の変貌は、しかしながら、そうした公共空間を判読できないまでに完全に変えてしまった。郊外住宅地では凝集力の薄い公共空間が分散的につくられ、道は都市内外の交通を受け入れるだけで、複雑な社会的関係をつくり出すことはない。そこは、もはや関係性をつくり出す装置ではなくなっているのである。関係をつくることや交換することは永久に必要なことであろうが、今やそれらは大量消費行為の枠組みの中へ移転され、閉じ込められ、極めて単純化されている。

例えば、スーパーマーケットやイーペルマーケットはかなり複雑な機能を用意して郊外の「新しい広場」になっている。しかし、それらは一貫してレジャーの世界に結びつけられ、自由時間や週末の消費の場となっている。今日のイタリアではこうした空間が、空港や高速道路の休憩エリアや鉄道駅などとともに公共空間と言えるが、それらはマール・オージェが「場所ではない」と定義した空間ばかりである（Auge, 1992）。そして、歴史的都市はそうしたレジャー機能の一部を果たすようになりつつあり、広場や道、記念建造物などがはっきりしたアイデンティティーを伝える力をもった空間構成である場合には、それが消費の対象になっている。しかしこの場合は、スーパーマーケットのように画一的で地域的なレジャー施設でなく、歴史的な特殊性や独自性を楽しもうとする世界的なレジャー施設である。幸いにもイタリアは、この種の歴史的都市がまだ豊富に存在するところである。

（訳　加藤晃規）



海外のパブリック

寄稿いただいた方のほかに、何人かの日本在住の方にも意見を聞いた。そして8名の方から、パブリックについての意見をいただいた。そこからわかるのは、「パブリック」は、コミュニティや帰属感、共同性にかかわる概念であること、不特定多数の人々に開放されていて多くの人が集まる場所、交流やコミュニケーションの場、機能複合されたパブリックライフの豊かな都市環境など、それぞれとらえ方が異なっていた。

確かに、すべての人々に開かれ、みんなのものと意識される場所や状況であることは共通しているが、その場所にいることにおいて、何か規則やルールがありそうだという指摘が興味深い。それは、コミュニティを前提とすれば地域社会のルールや生活文化が人々に共有化されていることであるし、市やマーケットなどの交流空間もそうであるが、広場であっても、多くの人がその場所を使うときの了解事項がありそうだ。

東洋にはなかった概念であり、民主主義の結果だという指摘もある。また、情報化やグローバル化は、それぞれの地域において新しいパブリック概念を生みだしていくのかもしれない。

❖

ベルギー総領事 1 François de Kerchove d'Exaerde

パブリックというのはコミュニティやある集団にかかわる概念で、その反対にプライベートがある。特に都市の基本構造において、コミュニティを基本に考えると、パブリックとは「誰でもが使える」という意味になる。いいかえるならばパブリックとは、コミュニティのためにつくられたものすべてといえる。都市には、人々のための様々なタイプの空間があり、レクリエーションや休息の場所から、バスの停留所や駅のホールまで多様にある。

また、政治的には、パブリックには、すべての人々に何が公開されているかという視点があり、機会の平等という考え方につながる。それは民主主義の中心的課題にまで行きつく。〈日本語要訳〉

オランダ建築設計者 2 André de Roo

都市のパブリックとは、様々な生活にかかわる機能がひとつのところに複合され、相互に調和している環境をイメージする。業務地区や住むだけのニュータウンなど用途分離されたところではない。低層部に商業施設があり、上には住宅があるなど、複合機能都市では、生活の場の近くで何でも用が足りて、まちの中に1日中、多様なパブリック・ライフがある。また、都市の中心への効率的なアクセシビリティが確保されていることも重要である。

アムステルダムでは歴史的建築物を公共施設として使ったり、都心での駐車場整備によるアクセシビリティの改善が進められている。トロントのモールは、寒い地域での有効な都市のパブリックを生みだしている。京都は何でもある町ではあるが、公共交通が使いにくい。新しい京都駅は複合機能性という意味で都市のパブリックのイメージである。〈日本語要約〉

マリ共和国留学生 3 Moussa Adama Dembele

パブリックとは、町や地域に集まった人々が共同活動や様々な交流を行う場所としてつくられたところ。人と人のコミュニケーションやモノの交換が発生する場所。マーケットはモノの交換と同時に社会的交流の場でもある。また、パブリックの基本を開放的な領域と考えると、重要な報告や証明をする場所にもつながる。

韓国留学生 4 徐金泓

不特定多数の人に開いている場所。でもその中には守らなければならない規則がありそう。パブリックな空間の例は「阪神梅田駅の前」(地下広場?)

インドネシア留学生 5 マヤ・アンドリア・ニラワティ

大衆・人々のイメージ。建築的には、人々の施設。〈日本語訳〉

中国留学生 6 秦丹尼

公衆という意味で見ると、社会一般の人々、ある範囲にある関係もつ個人の集合の所有という意味。そこには、公共性だけでなく個人的な意義をもった私有性もある。パブリックはみんなの場所であり、帰属感をもつ個人の場所でもある。理想的な都市のパブリックは、都市にいるすべての人々にとって物質的・精神的に満足できる温かい家の感じ。

中国留学生 7 王小栄

パブリックはすべての人々に共有され、認知され、共同に使っている気楽な生活環境。地域文化のあるコミュニケーション空間。また誰でもが平等に使える国際的空間。

中国留学生 8 張江華

パブリックは、新聞やテレビなどのマスコミを通じて情報を交換し、誰にで知られている人が活躍する現代社会につながる。現代民主主義の結果であり、昔、東洋社会にはなかったものである。

(文責 **小浦久子** 編集委員/大阪大学大学院助教授)

町並み
―公共空間の正念場―

中川　理

よく指摘されることだが、日本語の「公共空間」と英語の「パブリック・スペース」では、その意味する範囲が相当に違っている。「公共空間」が、主に行政が設置し管理する空間を指すのに対して、「パブリック・スペース」は、行政の管理下にある空間だけを指すのではない。ショッピング・モールのように民間の施設内であっても、不特定多数の市民が集まる場所であればすべて「パブリック・スペース」である。都市空間における公共性を考えるときに、この差が意味するところは大きい。

❖

都市の公共的な空間を「パブリック・スペース」として捉えると、実は現在、われわれは大きな変革を経験している。行政が管理するいわゆる「公共」建築だけを見ているとわかりにくいが、大学や、本誌も含めた建築関係の雑誌がほとんど対象としてこなかった商業施設の分野では、近年、とりわけ90年代に入ってから大きな変化が起こっているのである。いわゆる大規模ショッピングセンターを中心にして、その空間のつくり方が大きく変わろうとしているのだ。

最もよくわかる代表的な例として1996年にオープンしたキャナルシティ博多がある。巨大な鐘紡福岡工場跡地に、ホテル、劇場、店舗、オフィスなどが入る。設計は、米国でこうした商業施設に実績のあるザ・ジャーディ・パートナーシップが手がけた。最大の特徴は、名前のとおりの運河を中心にした空間演出である。実際、大きすぎるということもあるが、この建物の外観は、一つの建物としてのまとまりのある印象が欠落している。デザインの演出は徹底して内部にあるのだ。

こうした、外観よりも内部空間の演出を優先させるデザインの方法は、サッポロ・ファクトリー(1993年)、クイーンズ・スクエア横浜(1997年)など、90年代以降各地に登場する複合型の大規模ショッピング・センターに共通した特徴となっている。キャナルシティのような派手な演出はなくとも、必ず「アトリウム」や「ガレリア」と称する巨大な内部空間が、施設の中核となっている。

❖

この背景には、都市空間に対する人々の欲望の変化がある。従来、都市に新築される魅力的な建物といえば超高層であった。なぜ、それが魅力的であったかと言えば、都市を俯瞰する高さを持っていたからである。人々は、そこに登り都市を睥睨し、変貌する都市の姿を自らの目で確認したいと願った。その欲望は言うまでもなく、近代社会のツリー型の社会構造に由来するものであった。全体を把握することのできる頂点があり、そこに誰もが上りたいと思う社会である。

しかし、社会のありようは急激にツリー的なものからネットワーク的な構造に変わろうとしている。個がばらばらに存在し、それぞれが自由に関係性を結ぶ社会だ。そうなると、人々の都市を俯瞰する欲望が希薄になる。社会自身にすらどこにも頂点がなくなるからだ。それに代わり、閉ざされた空間に囲い込まれたい欲望が人々を支配する。強力な組織や仕組みに縛られない個人は、それゆえに絶えず孤独の恐怖と闘わなければならない。囲われた空間は、かりそめのものであっても、そこに集まった人々に、空間を共有しているという、孤独に対するある種の癒しを与えてくれる。もちろん今でも、高層建築の最上階のレストランは人気を集めるが、一方で巨大な建物やガラスに覆われた空間に、人々は確実に魅力を感じるようになっている。

❖

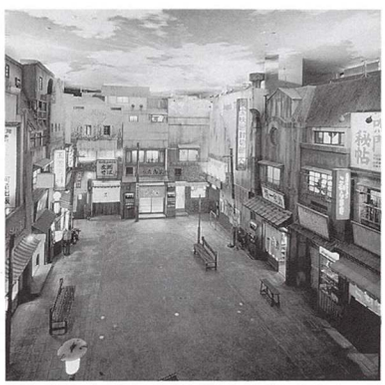
実際、キャナルシティ博多を手がけた関係者は、この施設の理念を、オブジェクトメイキングからプレイスメイキングへという言葉で説明する。つまり従来の建築が「形」をつくることを目標にしたのに対して、ここでは「場所」をつくることを目指したのだと言う。ここで言う「場所」とは、つまり外部から閉ざされ演出された内部空間のことを示している。90年代に入り、複合型の巨大ショッピングセンターが次々と増殖するのにしたがって、都市空間は、そうした演出された個別の「場所」のモザイクとなっていくのである。

そして、この「場所」の演出は当然ながらエスカレートしていくことになる。「アトリウム」や「ガレリア」は、単純なガラスの入れ物の場合が多いが、キャナルシティ博多の中心部は、カラフルに彩られた変化に富んだ空間だ。さらに、演出を入念にということになると、内部空間に何らかの物語世界が導入されることになる。それを最も洗練させたのが、ディズニーランドということになるだろう。


キャナルシティ博多。ホテルやショッピングセンターなどさまざまな商業施設を複合している


運河を中心に展開されるキャナルシティ博多の中庭空間

よく指摘されるように、ディズニーランドには観覧車のような俯瞰装置がない。その代わりに慎重に囲い込まれた4つのランドがあり、それぞれに架空の物語世界が展開されている。そこには、新しい社会での人々の癒しに対応した究極の手法を見ることができる。



「夕焼けの下町」を再現した新横浜ラーメン博物館

この演出方法を商業空間に取り入れたものは、店舗デザインの世界で「レプリカ店舗」と呼ばれている。すでに80年代からさまざまなタイプのものが登場しているが、近年の最も代表的なものとして、1995年にオープンした新横浜ラーメン博物館がある。体育館のような建物の内部に、空まで仮構し、インスタント・ラーメンが初めて登場した昭和32年の架空な町を再現している。その町並みの一つひとつの店に全国から集まったラーメン屋が入っているのだが、再現された店舗や路地のつくり方が半端なものではない。「エージング」という古色を出す技術が存分に使われ、訪れた人々はつかの間の「昭和32年」を楽しむことができる。

❖

こうした架空な物語世界を囲われた空間に使うという手法は、いまやさまざまな「パブリック・スペース」に使われようとしている。単独な商業施設だけではない。例えば商店街の活性化事業などにも、さまざまな物語が使われるようになった。代表的なものとして1994年から始まった鳥取県・境港駅前商店街の「水木しげるロード」を挙げることができるだろう。漫画家の水木しげる氏が出身であることから、世界の妖怪を集めて人気を集めているのだ。

しかし、商業施設の新しい集客のためのノウハウからスタートしたこうした方法が、はたして新しい「パブリック・スペース」のつくり方に繋がるものなのだろうか。境港の「水木しげるロード」も、



境港の「水木しげるロード」に集められた妖怪



「水木しげるロード」のねずみ男



そっくりな「レプリカ建築」による改築が計画されている第一勧業銀行京都支店

確かに集客という点では成功しているが、それがそのまま地元密着型の商店街の成功になるものなのかは疑問である。つまり、ここでの商店街は地元の人々の日常の暮らしのためにあるもので、架空な物語世界を楽しみに来た人々のためにあるのではないはずだ。

ディズニーランドを頂点とするこうした商業空間の方法は、本質的に仮設的なものである。絵空事の物語を強引に持ってくる。だからこそ、つかのまの空間の共有を癒しとして人々は楽しむことができる。しかし、そのことが「パブリック」であることと矛盾することになるのだ。

そうした事態を象徴的に示す改築計画が京都で進んでいる。辰野金吾が設計した第一勧業銀行の京都支店が、老朽化を理由に建て替えを計画しているのだが、何と、現在の煉瓦造の建物は撤去して、新たにＲＣの煉瓦タイル張りでそっくりな建物を新築するのだという。同建物が、京都市が指定する「界わい景観整備地区」にあるため、京都市の計画局と歴史的景観の保全について話し合った結果だという。歴史的建造物の価値とは、その建物が刻んできた時間の中にこそある。この改築計画は、そうした価値ではなく、まさに「歴史的景観」という架空な物語世界をつくり出すために考え出されたものであると言えるだろう。つまり、これも「レプリカ店舗」の応用例なのだ。

❖

はたして「パブリック・スペース」は、社会の本質的な変化に対応して変貌しつつあるが、その変化は同時に「パブリック」の本質的な意味を失わせようとしているのである。そのことは、特に都市空間における歴史的環境の問題を考えると鮮明になる。

本来「パブリック」とは、人々の共通の経験に根ざすものであった。だから、建物や町並みの歴史が価値を持っていたのである。ところが商業施設を中心にした最近の「パブリック・スペース」の変貌は、閉ざされた空間に架空な意味を仮設的に与えるという方法を一般化しつつある。これでは、共通の経験も、架空で一時的なものでしかありえないことになり、「パブリック」の本来の意味が変容してしまうことを意味している。そこでは、少なくとも「パブリック」の本質であるはずの「日常性」や「永続性」というものが失われてしまうことは確実だ。今、都市空間における「パブリック」は正念場なのである。

（なかがわ　おさむ　京都工芸繊維大学助教授、工学博士）

アート
―環境をデザインする―

田中直人

「Public Art」という名称は、1960年代のアメリカで生まれたといわれている。当時のアメリカ各地では、都市の大規模再開発事業と公共機関による芸術支援政策（Percent for Art Program）が盛んになっていた。アメリカを代表する芸術家の彫刻が街角や広場を飾り、パブリックアートという言葉は普及していった。

わが国では「野外彫刻」「野外芸術」「環境芸術」という名で当時、自治体の「彫刻のあるまちづくり」の流れにのり、公園や広場、街路など都市のオープンスペースに彫刻やシンボルモニュメントを設置する形ですすめられてきた。そこにはいくつかの目的が確認できる。一つは一般市民に広く、それまで美術館など限られた空間でしかできなかった作品鑑賞の機会を増大させること。二つには作品を通じて文化・芸術の普及と振興を図ること。三つにはこれらの作品を設置・展示することにより、アーバンデザインとして公共空間や街の景観の質の向上と個性化を図ることなどである。街の中に点在するこれらの作品をめぐるコース設定やこれらに関する地図やガイドブックなども作成され、パブリックスペースに置かれた作品との出合いは、地域再発見の旅となり、文化・芸術との対話ともなった。

これまでのパブリックアートはパブリックか

これらの作品の多くは、いわゆるプライベートアートとして、展覧会での芸術（作品）を前提にしたものがほとんどである。これらをそのまま屋外の公共空間に置いたからパブリックアートであるかというと、そうではないと思う。公共の空間は芸術を展示するための空間ではなく、さまざまな都市機能の中で不特定多数の関係する場として存在する。アートの持つ価値や影響力を活用しながら、その空間の質に「何か」を与えることが必要で、場合によるとその都市や街のアイデンティティ、あるいは誇りや愛着までも表現することが求められる場合がある。すなわち本来、パブリックアートは退屈な都市空間へインパクトを与える飾りではなく、社会的な機能を担うアートであるべきなのかも知れない。

しかし、これまでの彫刻のある街づくりは、市民不在の「パブリックアート」を数多く生み出した。誰が置いたのか、なぜそこにあるのか誰も知らない「無縁仏」づくりだったのではないか。あとは誰が引き継ぐか、設置されてからごみや落書きになったりするのでは困る。アートはカタログ商品ではないはずだが、これまでの彫刻を置くという姿勢だけでは、商品としてのアートとそれを扱うブローカーが暗躍し、自治体等のイージーゴーイングなまちづくりにお墨付きを与える彫刻設置懇話会等の学識経験者の仕事が増える。市民にとって愛着の湧かないパブリックアートが増えていく。ここにおいてパブリック性が少ない環境づくりとなり、地域の人とのかかわりはほとんどなくなってしまう。置かれた彫刻が環境にうまく調和しているかどうかのレベルではなく、もっと積極的に、環境にインパクトを与えるアートとしての可能性を期待したいのだが……。

したがって、これまで各都市で展開してきた「彫刻のあるまちづくり」によるパブリックアートは、真の意味でのパブリックアートではなかったといえる。公共空間に彫刻を設置しさえすればパブリックアートになるのでなく、また文化都市づくりになるというわけでもない。今、あらためてパブリックアートの「パブリック」とは何かを問い直す必要がありそうだ。

アートが生み出す被災地での復興の絆

神戸市は、全国に先駆けて彫刻を設置することを活かしながら街づくりをすすめてきた。しかし、阪神大震災により街角の数多くの彫刻に大きな被害が出た。彫刻のことに心を配る余裕もなくなったのか、もともと無関心であったのか、復興に奔走する人々の姿を横目に、彫刻たちは街路や広場の公共空間に取り残されていた。これらの彫刻がどのようになっているのか、私たちは被災地で調査した。

忘れられた彫刻の話とは逆に、心が熱くなったのは、八木マリヨさんらによる住民の手で編み上げられた縄の火が冬空を焦がす神社でのイベントで、復興の街づくりの中でアートを心の絆にしようとした試みであった。彫刻という恒久的なものを機械的に設置することより、はるかにその時代や地域の状況を映し出し、人の心に響くアートであった。また、復興住宅のプロジェクトの中で、住民とともにアートを切り口に地域の環境デザインを試みる動きも特筆される事例である。

このように、およそアートを語る余裕などないように見えた被災地で、アートがパブリックなかかわりを生み出す仕掛けとして活躍した。震災のその年末、神戸の街でルミナリエが始まった。もともと南イタリアで行われていた祭事である。最初のルミナリエでは、犠牲者の鎮魂というイメージで透明感のある冬空に輝く光のアーチから厳かな気分を味わった。昨年末4回目を迎えたルミナリエは、市外からの観光客も多く、すっかりクリスマスシーズンのイベントの感が強い。光のアートが生み出す環境が、テンポラリーなものにせよ、人の心にどのように響くアートであるのか、これからの地域の受け止め方で大きく変容するであろう。

環境アートの可能性と課題―「パブリック」の視点から―

1998年5月、シアトルにおいて全米のパブリックアート関係者が一堂に会して、シンポジュウムが開催された。ここでは、わが国とは違ってアートを彫刻に限定せず、生活環境のさまざまな場面を形

づくる要素を対象とし、環境の中でどう考えるか、どのように維持管理するかなど、全米各地での取り組み事例の紹介を含めて幅広い議論や提案が展開されていた。自然や歴史、場合によっては社会的な面においてアートがどうかかわり、何ができ、どうあるべきか、環境アートの可能性と課題を考える上で示唆に富んだ内容であった。

この経験を踏まえて「パブリック」の視点から、これからの環境アートの可能性と課題について考えてみたい。

1）機能をもつアート

公共空間の中で、私たちはサインやファニチャー、照明、舗装など多くのデザイン要素を見出す。これらは一定の機能要求に基づき、あるものは規格化された標準的な内容を備える。しかし、トータルの環境要素としては、単に個々の機能を充足するだけでなく、環境の質を高め、自ら魅力的な環境の構成要素として積極的に働きかけるものが期待される。これまでのアートは身近に触れることの許されない高尚なものであったが、すべての人のかかわるパブリックな場面で、役に立つ何らかの機能を備えていることが前提となる。

2）自然とアート、原風景の再生

これまで私たちは、人の生活に都合がよいように、元の自然環境を改変してきた。しかし自然の力は人の技術力を上回り、時には厳しいしっぺ返しを見舞う。コンクリートの素材そのままで人工的な美や工法を追求するデザインもあるが、もともとの環境が備えていた風景やメカニズムを尊重する方法もある。アートはこのような場合に従来、壁画を画いたり、緑のイメージということで着色したり、自然や人工の草花を配したり、外観の部分的修復や覆い隠し的対応において展開されることが多かったように思える。

アートのもつ環境との調和性やテーマ性、シンボル性によって、自然をより豊かに感じさせ、原風景をみずみずしく描くことが期待される。自然というかけがえのないパブリックな空間を、個人的な趣味や主張だけで改変することは許されない。環境デザインの中でアートをどのように位置付け、展開するか、これまでの安直とも思えるようなアートの導入は慎まなければならない。

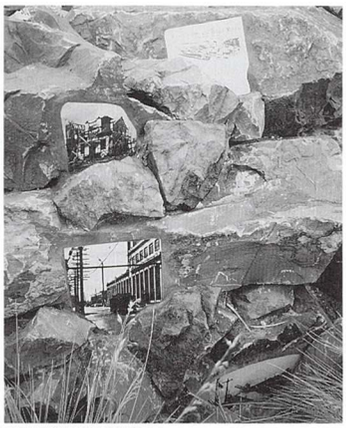
3）まちの活性剤としてのテンポラリー・パブリックアート

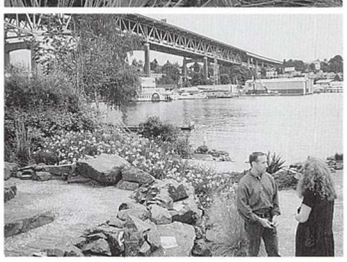
パブリックアートは、本設の場合だけでなく一時的な仮設の場合においても、都市環境において重要な役割を果たす。工事現場の周辺にアートを導入することも、たとえその期間は限定されていても、大切なことである。工事用の仮囲いに絵を画いたりすることは、最近では一般化している。またそれぞれの季節感を演出したり、イベントとしてのアート、パフォーマンスもよく行われている。年々派手になるクリスマスツリーのデコレーションは、歳末の風物詩としての光のアートであろう。



交差点の歩道上に設けられた通り名を示すサイン。地域の自然事物をアートとして表現している


カヌーをかたどったモニュメントシェルター。歩道上のサインとして、またコミュニティボードとしてデザインされている




古い街並みを写し込んだ石を配した水辺の記念広場

このようなテンポラリー・パブリックアートのもつ環境に対するインパクトは、公共の空間において繰り広げられるさまざまなまちづくり活動においても、重要な役割を果たす。パブリックな場面は三次元の空間に限定せず、時間のベクトルを含んだ生活環境の次元でデザインされなければならない。

4）すべての人をユーザにし、つくり手にするかかわり中で

プロに任せて自分たちの環境をデザインさせることも一つの方法ではあるが、プロの技とは一味違う素人の熱心さや愛着で取り組む方法もある。出来た結果のグレードは多少劣っていても、そのプロセスを通して培われたコミュニティは無視できない大きな力である。このかかわり方の工夫は、アートをよりみんなのものとして共有化していくための、パブリックな仕組みづくりの基本となる。いわゆるコミュニティアートだ。コラボレーションシステムによるアートは、よりパブリックな存在としての意義を見出すことになろう。

5）芸術工学に支えられた安全・安心

アートがパブリックな場面に存在し、多様な市民と接点をもつようになると、建築や土木施設と同様に構造や材料・工法などに関して、これまでのプライベートアートにはあまり考慮されなかったような一定の安全性が保証されなければならない。また、アートはモノとしての存在だけでなく、機能性を超えた精神性を醸し出す存在として、多くの人に安心や安らぎを与えるものであってほしい。このアートのヒーリング性に注目して、都市のパブリックな空間の心の通うやさしいまちづくりにもつながってほしいものである。これまでのまちづくりを支えてきた工学的な領域だけではなく、人間と環境の基本的なあるべき関係を実現するための橋渡しとしても、環境アートとしてのパブリックアートのこれからに期待される部分は大きい。

環境にアートを置くことでなく、環境がアートになる芸術工学の発展がパブリックな視点から望まれる。

（たなか　なおと　摂南大学教授、工学博士、パブリックアートフォーラム幹事）

表現

―演劇はコミュニケーション―

松原利巳

演劇は、観客がいてはじめて成立する表現行為である。生身の人間が、生身の人間の前で演じることによりつくりだされる時間と空間が「演劇」といえる。この「演劇」を包み込む「箱」が劇場である。そこには不特定多数の人々が集まってくる。そして、都市の日常の中で、時間と空間を限定することによって生まれた非日常の空間である劇場は、ハレの場となり祝祭的気分が立ち込める。

1970年代の前半、カウンターカルチャーの一つであったアングラ演劇が時代を表現していた。70年代半ばになると、アングラに続く新しい小劇場の活動が関西でも生まれてくる。こうした動きを支えたのが、大阪では、島之内小劇場とオレンジルームだった。いずれも劇場としてつくられた空間ではなく、一つは島之内教会を、もう一つはファッションビルの中にあった文化教室を、公演ごとに劇場空間としてつくり替えなければならない場であった。

1980年代に入ると、こうした小劇場の活動の中からオレンジ演劇祭が生まれた。関西の学生劇団の代表が結集したこの演劇祭は、やがて大きな演劇ムーブメントをまきおこしていく。まさに時代がつくった演劇祭だった。このムーブメントは、その後、関西での新しい劇場づくりへとつながっていく。

1985年、扇町ミュージアムスクウエアーや近鉄劇場・近鉄小劇場のオープンとともに、それは始まり、1990年代後半までの、この14年ほどの間に、関西の演劇環境は大きく変化してきた。

演劇環境の変化

まず、一番大きな変化は劇場が増えたことである。表現する場が増えると、当然のことながら演劇にかかわる人間も多くなった。かつては、東京に行かなければ演劇活動が続けられないと多くの才能が東京へ流出していったが、いまでは、関西を拠点に演劇活動をする人間たちが増えている。大阪にいても十分に演劇活動が行えるような環境になってきたからだ。当然のことながら、大阪と東京の相互交流も盛んになり、優れた才能が互いに切磋琢磨することで、次第に頭角を現す者もあらわれてきた。特に最近、関西の劇作家が演劇界の芥川賞といわれる岸田戯曲賞を連続して受賞するなど、注目を集めている。また、俳優や演出家、スタッフも東京と大阪をはじめ、国内で活躍するだけではなく、世界に活動の場を広げつつある。

いずれにしても、関西の演劇環境が、演劇を中心に、モノを創るつくり手と、それを支えるスタッフなどが、互いに連携し合い、一つの厚い層となってきた結果なのだ。

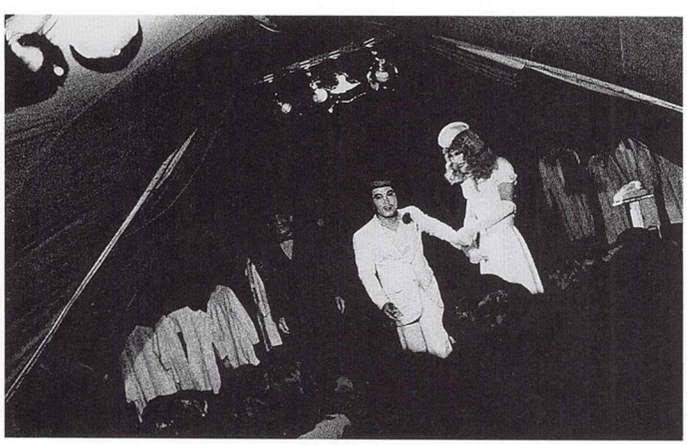
劇場の数が少なかったときは、都市の中の点でしかなかった劇場も、数が増えてくるとともに面的な広がりを持つようになり、その地域における新たな文化環境をつくりだすための重要な要素になりつつある。劇場のプロデューサーを続けてきて、いま、あらためてそのことを実感している。



「黒テント」の公演



コンテナヤード跡地に仮設した「赤テント」の公演に集まった観客



1970年代の「赤テント」の舞台

共感の場の設定

劇場は、人々のコミュニケーションの場である。時間と場所を共有し、演劇の重要な要素である人間の身体の動きと声を媒体にして、演じる者と観る者との間のコミュニケーションを成立させる。また、深い感動は演じる者と観る者だけではなく、観客と観客をも強くつないでいき、劇場全体を包み込む一体感をつくりだしていく。そこにはパブリック性が生まれているのではなかろうか。

「パブリック」には、コミュニケーションが内在している。例えば、日本の街頭のストリートパフォーマンスやストリート・ミュージシャンの中には、聞いていても聞かなくてもいい、観られていて



取り壊された天王寺野外音楽堂での上田正樹のコンサートの一シーン

も観られていなくてもいいといった、一方的な自己表現をしている者がいるが、それだけではパブリックなものとはいえないのではないか。相互のコミュニケーションが生まれることによって、はじめてその場がパブリック性を持つのである。

つまり、人々のコミュニケーションの場である劇場には、時間と空間を限定し、ある状況を共有することで生まれるパブリック性がある。人々は感動と共感の体験を求めて、わざわざ特定の場所へ足を運ぶ。ワールドカップも日本シリーズも演劇も同じだ。そこは、都市の中で浮遊する個人が、ひとときの出来事を介しコミュニケーションを共有化する場となる。よく、シナリオのないスポーツは、劇的要素があって、演劇よりも感動が大きいといわれるが、しかし、演劇も同じものは二度とはできない。人から発せられる声も体の動きも、一度だけのドラマを創りだしているのだ。

人はそれほど変わらない

お祭りや神社の境内で演じられるお神楽は、それぞれのコミュニティで共有化された意味があり、ハレの場としての感動がある。演劇は、こうした地縁的なコミュニティを前提とはしないが、人間にとっての普遍的なテーマや哲学のようなものが必要である。それが演劇のメッセージ性である。これがあることで、現代の私たちがギリシャ演劇を理解することができ、また感動することもできるのだ。

演劇がコミュニケーションを生みだせるか、あるいは、感動を生みだすことができるかどうかは、このメッセージ性によるところが大きい。現在の演劇では、メッセージ性は、明確なテーマとして打ちだされるか、または、感動を通して伝わるかのどちらかであるが、そこには必ず、ある種の哲学が必要である。

人間は原始時代からあまり変わっていないのではないかと思う。文明が発達して、いかにも洗練されているかのように見えたり、変化しているように見えても、それは表層的で、本質はそれほど変わっていないのではないだろうか。街が変わるのも表層の変化であり、変わったことが、良くなったと思うことも、錯覚の満足感かもしれない。もっと本質的なところで共有化されるものが感動につながっていくという点では、人間は変わらない。身体にとって栄養が必要なように、人間の精神にとっては芸術が必要なのだ。精神の栄養が感動で、そこに芸術の必要性がある。普遍的な哲学や理念にもとづいたテーマ性が、演劇における深い感動につながっていて、この感動がコミュニケーションを生みだす力となる。

コミュニケーションのパブリック性

宝塚北高校を訪ねたことがある。ここには普通科のほかに演劇科があるが、その目的は演劇人を養成するのではなく、人格形成の一環として演劇を教育に取り込んでいる。この演劇科では、山崎正和氏が提唱している「立体国語」という授業を実践している。例えば、演劇の実技演習で「大きな声を出し」「自分のことを伝え」「相手のことを理解する」といった行為を通して、意識の集中と自己解放の訓練を進めている。

これは、人は何を考えているのか、自分は何を考えているのかを相互に伝え合うコミュニケーションを、人格形成の基礎として教えているのだ。情報化が進んだ現代では、他者とのリアルな関係を結ばなくてもバーチャルな環境で生活できるようになり、みんな他者とのやりとりが下手になってきていることを考えると、これには、演劇科だけの授業にとどまらない、現在の学校教育にとっての、もっとも重要な課題が含まれているように思えてくる。実際、宝塚北高校では、普通科でも、この実技演習を始めたそうだ。演劇が生みだすコミュニケーションの可能性がここにも活かされている。

近年、まちづくりにおいて、古いまちの再生の仕掛けとして劇場を核にした再開発を相談されることがよくある。しかし「箱」だけつくっても、そこに住む人々が培ってきた文化や、そこに蓄積された歴史をつないでいかなければ、劇場は異質な侵入者として拒絶反応を引き起こしてしまう。こうした、まちに蓄積された文脈を知り、まちの中に自然に溶け込んでいくことで、はじめて劇場はまちを再生させるために必要な臓器となり、コミュニケーションを創りだす場になるのである。

この特集のアンケートに答えて、ベルギー総領事が「パブリックはコミュニティを前提とする」という指摘をされていると聞く。演劇のパブリック性もそれに近い。劇場という場と時間を設定し、あるテーマを持ったローカル・ルールをつくることでコミュニケーションを可能にするからだ。やはり演劇も、共有化される状況がコミュニケーションの前提となっているといえるのではないだろうか。

（談）

（まつばら　としみ　近鉄劇場・近鉄小劇場プロデューサー）
――聞き手／小浦久子・伊縫憲幸・田中直人

店

―商空間にみるコラボレーション―

角野幸博

商空間の階層性

商空間が不特定多数の人のための公共空間というのは、実は幻想かもしれない。経営者の本音は、そこでお金を落としてくれる人だけが店に入ってきて欲しいに違いない。産業革命以前のヨーロッパの店舗は、表構えが閉鎖的で、いったん入ると、何か買い物をしなければ店から出ることは難しかったという。

誰もが気ままに出入りできるようになったのは、パサージュや百貨店が発明されてからである。大量生産によって、鉄とガラスが安価に手に入るようになって、店のデザインが一変した。人々はウィンドウショッピングの楽しみを知り、自由に店の中をうろつくこともできるようになった。日本もさほど事情は変わらない。明治になって、勧工場と呼ばれる物産展示販売場ができたり、関東大震災以後に、百貨店が上下足制をやめるようになって、人々が自由に店内を闊歩できるようになった。洋の東西を問わず、経営者の側には、店の中に夢のような消費世界を演出し、それを垣間見せることで、市民の財布の紐を緩めさせる自信があった。

パブリックプレイスが「共通の経験、共通の意味を通して創造され、理解される場所」だとすれば、商空間におけるパブリックの意味とは、モノやサービスの交換を通じて、その行為を行える自分を、同質の集団の中で確認できることの幸福感と理解すべきだろう。その同質性は、商空間が閉鎖的な時代には、確かに維持できていた。特定の店には特定の客しか入ることができなかったのだから。

ところが大衆消費社会の成立後、誰もが気ままに商空間に出入りできるようになると、入店者の全員が共通の経験をすることは難しくなってきた。代わりに、同質化する生活者の間に微妙な差異を見つけ出して、中高生とか独身ＯＬなどの「客層」という階層性が意識され、それぞれに合わせた商空間がつくられるようになった。デパートなどの大型店舗は、店舗全体での共通経験と同時に、多様な客層別に、それぞれ共通の経験を提供するという難題を突き付けられた。不特定多数の入店者共通の経験とは何か。仮にそれを提供できたとしても、客層が区分され微細化すると、個々のマーケットは小さくなる。店舗空間の魅力が高まって多くの人が出入りしても、客層ごとの顧客数が少ないために、お金が落ちない。市民の階層性と同質性の変化が、パブリックプレイスとしての商空間の経営を難しくし始めた。

誰が対価を支払うのか

デパートなどの大型店舗は、多様な客層を抱え込み、毎日不特定多数の人が出入りする。普通のデパートでも、年間の入店者数は軽く1,500万人を超える。その数は大型テーマパークの入場者数をしのぐ。売り手は魅力的なモノとサービスを提供する空間を用意し、客を待ち受ける。当然、そのための設備投資や維持管理費用が発生する。だが、入店者のすべてが買い物をしてくれるわけではない。ひやかし客もいれば、トイレを借りるだけの人もいるだろう。彼らも同じように、店内の空間や設備を使う。そしてその管理費用は、つまるところ買い物客の財布からまかなわれる。

もちろん、買い物をしない入店者も、ないがしろにはできない。その時には買わなくとも、次の来店時は買ってくれるかもしれないし、衝動買いの可能性もある。とにかく足を運んでもらうことが先決だ。結局、空間の魅力を高めるほど、総来店者数は増えるのだが、その管理費用を誰が支払うのかという問題がつきまとう。

集客性を最大限意識した小売業態として、1980年代頃から世界各地で、フェスティバルマーケットプレイスと呼ばれる形態が普及していった。祝祭気分を演出して、来街者の消費意欲をかきたてる。主にウォーターフロントの再開発で次々と実現され、成功事例は数多い。19世紀に発明された百貨店に匹敵する、新しい業態といってよいかもしれない。国内でも、大阪の天保山やキャナルシティ博多、釧路フィッシャーマンズワーフなどが有名である。だが、開業当初は集客、売り上げとも好調でも、２年目以降になると、人が集まるわりには売り上げが伸びない、客単価が安いという悩みを聞く。売れるのは高級品ではなく、安物雑貨ばかり。物販よりも飲食が好調という共通点もある。消費者は、フェスティバルマーケットプレイスでは、モノの消費よりも快適な時間消費を選択するのである。ところが、時間消費の対価を確実に得るしくみは、飲食店かゲームセンターのような業態でしか、つくられてはいない。その結果、人は集まるが金が落ちないという悩みが生じる。

一流シティホテルのロビーもまた、利用者と費用負担者とのギャップが大きい空間である。ここを待ち合わせや、ちょっとした打ち合わせに使用する人は多い。待ち合わせ客の大半は、ただで利用する。高級と目されるホテルほど、維持管理の費用はかさむに違いない。仮に800円のコーヒーを注文したとしても、それでまかなえるとは思えない。結局費用を負担しているのは、宴会客や宿泊客、テナント料を支払う専門店などである。ホテルがごく一部の階層の人々の施設であった時代は、さほど問題にはならなかったろうが、普通の市民が自由にロビーに出入りする現代の日本の状況では、受益者と費用負担者とが異なってしまう。そのことは最終的には、宿泊客や宴会客の不利益と、ホテル経営の困難化につながる。かといって、ホテルの顔でありシンボル空間でもあるロビーから、人々を追い出すわけにはいかない。

公と私のコラボレーション

商空間に公共性が求められるにしたがって、誰がその維持管理費用を負担するのかという問題が、さらに大きくなる。空間の魅力を、そのまま価格に上乗せすることは困難である。逆に店舗空間への投資をできるだけ少なくして、小売価格を抑えようとする動きが起きるのは想像に難くない。その行き着く先が、通信販売やインターネットショッピングなど、無店舗化への動きだろうか。

しかし、だからといって、空間の魅力がまったく評価されないわけではない。生鮮食品のように毎日買うものや、電化製品のように品質が一定のものは、店舗の空間的魅力は売り上げにさほど影響しないが、飲食店や理美容院、テーマパークなどは、いかに快適な時間を過ごせるかが売り上げを左右する。今後の商空間は、無店舗化と時間消費型の両極の間をさ迷うことになるだろう。

だが時間消費型店舗だからといって、すべて入場料を徴収するわけにはいかない。公共的性格が強いのであれば、何らかの形で、空間の維持管理費用を公的セクターが受け持つことも考えるべきである。たとえば岩手県のある小都市のホテルでは、ロビーを市の特産品の展示・販売場として市が所有し、ホテル会社に管理を委託している。都市の顔としてのホテルの価値を認め、パブリックプレイスとしての機能を維持しながら、それをホテルの利用料金に上乗せしないための策である。

また公共スペースを提供する代わりに収益床を増やすという意味で、公開空地の設定による容積率緩和の方法もある。だが、現在のような消費低迷下では、容積率のボーナスが有効に機能しない。



複合商業施設のパブリックプレイス―この管理費用は誰が支払うのだろう―（あべのルシアス）

公的セクターと民間企業とが持ち味を出し合いながら、パブリックプレイスとしての商空間をつくり上げた事例として、地下街を挙げることができる。大阪や東京では第二次大戦前から、地下鉄の建設とともに地下通路が建設されていた。そこは薄暗くて空調もなく、決して快適な通路ではなかった。昭和30年代になると、交通渋滞の緩和や歩車分離のわかりやすい手段として、新しいイメージの地下通路が建設され始めた。地下街の誕生である。通路の両側に店舗を誘致することで、地下空間に明るさと楽しさが生まれた。テナントの敷金や賃料を地下通路の維持管理費用の一部に充当することもでき、大阪で始まったこの一石二鳥の事業手法は急速に各地に広まった。地下通路という公共空間に商業施設を導入することによって、アメニティを高めることができたのである。

最近の地下街は、地下通路の付加物というより、商業施設としての充実に力が向けられている。大きな吹き抜けや水、緑、彫刻など、快適な商空間をつくり出すための工夫が随所になされる。単なる公共地下通路という位置づけであれば、ここまでの投資は困難であったろう。また逆に、商店経営者だけでこうした環境整備のための投資を行うことも不可能である。公共事業と民活とを組み合わせることによって、快適な公共空間をつくり出すことができた。


進化する地下街（クリスタ長堀）

近年、地方都市の商店街の疲弊が深刻化している。衰退する商店街に活力を取り戻すことを目的に、中心市街地活性化法が制定され、まちづくりの視点からの取り組みが始まった。この法に基づいて活性化の基本計画を策定した後、計画の推進組織として、TMO（タウン・マネージメント・オーガニゼーション）が設立される。こうした一連の動きも、商店街の公共的性格を鑑みてのことにほかならない。地上の商店街と地下街という差はあるにせよ、その公的性格を理解できれば、費用負担や維持管理の方法に、新しい考え方が生まれるかもしれない。パブリックプレイスとしての機能と魅力を商空間に期待するのであれば、その管理運営については、今まで以上に多様なコラボレーションの手法を探る必要があるだろう。

（かどの　ゆきひろ　武庫川女子大学生活環境学部教授、工学博士）

コミュニティ
―日常のなかから自己生成する―

林　泰義

「パブリック」と「公共」

日本には「パブリック」にピッタリの言葉がない。「公共」という言葉は行政が独占している。注意して行政マンの話を聞いていると、「公共としましては……」というような台詞がよく出てくる。そのため、逆に「公共」というと平等、公平などの行政概念が腰巾着のようにブラサガリ、どうにも具合が悪い。行政と「公共」がペタリと引っ付いているところに混乱の原因がある。

「公共」を市民の手に取り戻しておかないと、ますますトンでもないことが起こる恐れがある。

たとえば、自分の目の前で困っているホームレスを仲間数人と一緒にサポートし始めたときに、なんでその人だけをサポートするのか、他のホームレスはどうするんだ、不公平じゃないかなどと言われたら誰でも当惑する。行政の場合は、“立派なホームレス対策”を立て、全員面倒を見ないと不公平になる。それが無理だと逆に面倒を見られません、となる。やれやれ！　それではこの寒空に死ぬ思いのホームレスは全員救われないことになる。一人でも二人でも助かる方がよいと言うのが市民・ボランティアの「パブリック」である。こうなるとホームレスからすれば、「公共」は頼りにならないが、「パブリック」は頼りがいがあることになる。

市民が二人以上で議論し始めればもう「パブリック」だ、というぐらいにアメリカでのパブリック概念は伸縮自在である。つまり行政概念から解放されているのである。それだけにコミュニティでは日常活動のなかからパブリックが生まれ続けているのである。

その一端を、私の住む地域の活動から探ってみよう。

お試しデイケアー

1998年の暮れの日曜日の午後、玉川まちづくりハウス分室、通称「玉川亭」には三々五々、ご近所の高齢者が集まって来た。老夫婦、元気な高齢の男性、二～三人で来た高齢者の仲間たち、なかには高齢の母親に息子夫婦が連れ添ったり、娘が面倒を見ている人たちもいる。

今日のゲストは、子どもの音楽教育にも携わる声楽家。日常の言葉の発音の仕方から「腹式呼吸」の練習、「きよしこの夜」の合唱まで、楽しさに加えて内容ゆたか。20人ほどの参加者を惹きつけ、元気にする名人だ。

1時間ほどのレッスンの後は、お茶の時間である。各種ドングリを料理して食べてみようと言うのが、今日のもう一つのプログラムである。近所の公園や住宅の庭で拾い集めたドングリを種類ごとに、炒って食べる、スリおろして水に晒してから、干して粉にして、「おやき」にして食べる。初めて食べる意外な“おやつ”のひとときに会話が賑わう。

「お試しデイケアー」と呼ぶこの集まりは、一昨年の暮れからスタートした。2000年に地区内に「高齢者在宅サービスセンター」が開設されるのを見越した、地区住民の活動の一つである。

パブリックは、この集いでは音楽と健康術と縄文食と緩やかな会話のなかでたゆたっている。

コミュニティガーデンに揺れる花

センター敷地には、もともと1989年に亡くなった岡本泉さんの家があった。岡本さんは自宅をユースセンター・サンと名付けて、子どもたちの自由な活動拠点に開放していたのである。故人の遺志が通じて世田谷区にセンター予定地として買い上げてもらったものの、区役所は財政難で当分建設着工はできないと言う。区有地になったまま、放置された空き地を見るのは寂しいと近隣の人たちは密かに胸を痛めていたのであった。

91年に、ハウスの言いだしっぺの一人、伊藤雅春さんはニューヨークでコミュニティガーデンの活動に出合った。これならあの空き地にピッタリと思って、帰国後直ちに近隣の人たちに提案した。この提案は住民の気持ちをヒットした。共感が力となって、コミュニティガーデンは実現することになる。区との協議を進めるには、町会長の渡辺三郎さんの力が大きかった。未利用の区有地を簡単なルールのもとで区民の活動に開放する仕組みは、すでに1970年代後半の冒険遊び場運動時代から活用され、定着している。

92年の春に利用可能になったこの土地に、ワイルドフラワーの種を蒔こうと提案したのは白勢見和子さんである。2年後の春に住民参加の設計で開園した「ねこじゃらし公園」の中心人物でもある。

6月28日のガーデン開きは、花の種蒔きに続き、岡本さんの家で「文庫活動」をしていた女性グループが登場し、子供たちに絵本を読んでくれた。岡本夫人も久しぶりに顔を見せ、なつかしくも心温まる一日となった。

夏も盛りを過ぎる8月末にはコスモス、マリーゴールド、ブルーサルビア、ナデシコなどが咲き始め、9月15日の敬老の日には満開となった。摘んでも摘みきれない花を惜しげもなく小さな花篭に仕立てて敬老会に届け、老人ホームに贈った。ガーデンではあの文庫のグループが花園のなかで子供たちに指人形芝居の「狂言・ぶす」を演じた。

花の噂に誘われた人々が集まり、新しいコミュニティの網の目模様が織りだされていった。パブリックとはいかめしく堅いものではなく、美しくも懐かしく、心優しいものである。



高齢者住宅サービスセンターへのアイデアを出しあう平成4年のワークショップ。開設が平成12年と聞いて“わしはもうおらんなー”…

高齢者在宅サービスセンターのパートナーシップ

ガーデンに集う人々は、この土地にやがては高齢者在宅サービスセンターが建設されることを知っている。そのことを忘れないでくださいね！と言わんばかりの区高齢対策室掲出の看板がフェンスに取り付けられている。

等々力デイホームを見学にいこう、地元に住む聖路加病院の日野原先生のお話を聞こう、みんなで地域ケアの計画づくりワークショップをしてみよう……などの活動が自然にわき上がってくる。まちづくりハウスの小西さんは、地域の人間関係の網の目を熟知して、そのなかのこれらの発意を具体の活動に結びつけるカタライザーの役目をしている。同時に、一つひとつの活動に区役所の高齢者福祉担当課の知恵や情報を提供してもらい、地元社会福祉法人のスタッフ辻川さんの協力を求め、着実な関係づくりを積み重ねていく。

共同体験による知恵の蓄積と関係の網の目を織り続ける地域のなかでの過程、つまりは「まちを耕す」時間を経て、パブリックは熟成していく。やがてセンターの企画・設計が役所の日程に上る頃には、センターを住民と行政の連携で考える過程のイメージが、当然のことのように住民の間に広がっていた。行政の一部に依然として住民参加に難色を示す者がいるにしても、ここまで行政を巻き込んで勉強してきた住民の希望を、もはや無碍に無視することはできない。住民のエゴと一蹴するには、行政が共に歩んできている。住民もまたパブリックを担う者と認めるほかはない。

住民による「設計ガイド」をまとめるワークショップの開催、参加のデザインに長けた設計者起用の要望提出、設計過程への住民参加の実施……。一連の住民・行政共同の作業が次々と進み出す。このスムーズな過程は、コミュニティガーデン活動が先行したことで可能になった。「連携によるパブリックの創造」が、柔らかな関係づくりから生まれたのである。

地域の福祉を支える会の発足

参加から、主人公への成長は、当然の流れである。ねこじゃらし公園では設計が決まり、運営の知恵を出し合うワークショップから運営組織をつくろうと言う人々が自然に登場してきた。

在宅サービスセンターの場合も、設計案がおおよそまとまる時期に「地域の福祉を支える会」が誕生した。中心になったのはコミュニティガーデンの頃から相談に乗ってくれていた辻川さんである。勉強会が生まれ、会に発展し、体験のために高齢者に食事を届ける活動が始まる。冒頭のお試しデイケアーもこの展開の一つである。緩やかに、しかし着実に「パブリックの自己組織化」が進む。

「たまぶり」の誕生

98年7月、世田谷区の呼びかけで「世田谷ブリッジ」と呼ぶ福祉、自然保護、まちづくりなど様々な分野の住民活動組織の交流イベントが1月間連続で開催された。住民に企画運営が委ねられ、行政は口を出さず住民の要請に応じて支援・便宜を図る。この方式は成功し、「官製イベント」の臭みを感じさせない交流の機会になった。

企画段階の活動にマルチメディアの若い達人たちが参加して立ち上がったのが、ホームページ「世田谷ブリッジ」である。慶應義塾大学湘南キャンパスのドクターコースの社会人学生片桐さん、札幌の柳田・石塚事務所の東京スタッフ千葉さん、世田谷にある企画会社のスタッフ小林さんの三人がその主人公である。

ハウスの学生スタッフでもある片桐さんのおかげで、私たちのハウスもホームページを開いている。彼は辻川さんと「福祉を支える会」にも参加し、玉川地域の福祉やまちづくりの活動組織を結ぶパソコンネット「たまがわぶりっじ」略称“たまぶり”をスタートさせる役も担った。すでに小林さんが開いていた「世田谷ネット」を含め、世田谷の住民活動のマルチメディアネットワークはお互いにリンクしあって、この1年でネットの網の目は急速に密度を増した。

このネットの特質はネット上の人間関係と、直接の人間関係・直接のコミュニケーションが平行し一体化しているところにある。ここでは人間・情報・メディア系のインターラクティブなパブリックが誕生している。

コミュニティのなかでのパブリックの自己形成過程

玉川まちづくりハウスは、NPOの認証を取るため定款の検討を深めている。これを知って地域の高齢者福祉活動組織“ハットの会”は「私たちの会をハウス組織の部門として活動できるようにした方がよいかもしれない」と考え出した。地域の自立した住民組織のアンブレラとしてのNPOのあり方が摸索されつつあると言えよう。

ここに紹介した事例は、コミュニティのなかでのパブリックの自己形成が、至極平穏な地域でも進みうることを示している。阪神淡路の壮烈な被災地で立ち上がった住民主体のパブリックとは、対極的状況にあるとも言えよう。対極的事例の存在は、コミュニティがパブリックを形成する普遍的可能性を示している。と同時に、このパブリックはボトムアップの持続的変革のエネルギーを秘めている。

一人ひとりの持つものを活かし合う仕組みと活動に、パブリックの本質がある。個人の可能性を開く力があるからこそ、パブリックなのである。

（はやし　やすよし　玉川まちづくりハウス・スタッフ）

緑

―交じり合う空間・滲み出す環境―

中瀬　勲

自然・緑はパブリックであった

(1) 伝統にみるパブリック

盛夏の早朝、玄関まわりや緑への打ち水と、その所作は、通り全体に涼しげな雰囲気を醸し出していたことを記憶の奥底にとどめている。まちの緑への、われわれ共通のパブリックな原風景の一つであろうか。伝統的な地縁・血縁社会にはパブリックな緑の庭や通り、そして雰囲気が根付いていた。

まちを取り囲む農地や山林の緑も、そのパブリックさ故に健全に維持・管理・経営されていたのであろう。農作業そのものが共同の作業であり、水の配分や水路などの維持・管理・補修も共同でなされていた。農業と林業との共生を語る言葉として「ワチ３～５間」という言葉を聞いたことがある。農地から山林側に３～５間の間で、農地の日照を確保するために枝葉を剪定してもよいという慣習である。

(2) 庭園にみるパブリック

芸術的な緑としての伝統的な日本庭園にも注目すべきパブリックの視点がある。いわゆる借景の技法である。回遊式庭園から緑や水をなくすると枯山水式庭園である。ここから石や砂をなくすると借景式庭園である。この庭園から緑、岩、砂、水などの諸要素を引き去ると、周りの風景を借りる、あるいは調和するという借景の技法が生まれるのであろう。まさに、借景は「引き算の美」であり、庭と周辺の風景とが一体化するというパブリックを象徴する敷地計画の伝統的技法である。

しかし、われわれが生活する現在のまちでは、借景すべき風景があまりにも貧困である。通りやまちのスケールでは猥雑な電柱、看板、標識、洗濯物などがあふれているし、自然地のスケールでも看板や自然破壊が至る所で見られる。借景を考えるのに無駄な要素が多すぎるといえよう。

五感で感じるパブリックを考えよう

(1) 公私の明確な区分

近代的な都市計画の成果の一つとして、公と私の土地が明確に区分され、まちや道路の整備、新しいまちづくりが促進されてきたことがある。経済の成長を支える都市を形成するとともに、現在のわれわれの生活や経済を支える基盤が確立されてきた。

この過程で、家や庭は自分のもの、近隣の家は他人のもの、道路、公園、河川などは公共のものいう意識が常識として根付いてきたのであろうか。家、庭と道路とを一つの景観として有機的に結び付ける住まい手側の意識が希薄化したのではないだろうか。この結果、



写真１　既成市街地での路地園芸のような通りの緑（兵庫県三田市）

庭の緑と道路とが一体化した街路景観や近隣景観が貧困になってきたのではないだろうか。

しかし、空間上の制約もあるが、私の緑が公の路地空間（**写真１**）へ滲み出し、公私の空間が有機化されたなつかしい街路景観を醸し出している風景は、まだまだ残っている。緑のパブリックを考える上での大切な手がかりである。

(2) 五感で感じるパブリック

かつて筆者らは有機感覚の考え方が、緑の景観を考える上で重要であるといった主旨のことを議論した。その中で、「…つまり景観は視覚だけではなく聴覚、嗅覚、味覚、触覚、想覚、その他の覚で意味的に感じ取られるあらゆるものの総体である。…」[1]と定義した。具体の例として、「いえ」にいて、庭の緑のざわめき、鳥の鳴き声、道行く人々の話し声など、視覚で感じられる要素以外に様々な要素が五感に働きかけて、全体的な景観、あるいは雰囲気を感じ取っているということである。

「かいわい」「しま」「なわばり」など様々なパブリックな領域の考え方があるように、緑のパブリックの範囲を、物理的な領域に精神的な領域を加えて考えてみる必要がある。生活の仕方と緑との関係を、「五感で感じるパブリック」の観点から考えることである。

生活の仕方からパブリックをみる

(1) 「にわ」って何

「いえ」と「にわ」についての議論がある。「学びのにわ」「戦いのにわ」のようにある集団にかかわる場を、「にわ」は本来的には意味していたとされている[2]。また、「いえ」には玄関、居間、寝室、台所などのように機能的に特化した空間があるが、「にわ」には、このように特化した空間はみられない。この意味で、「いえ」は機能的に高度に構造化された安定な空間であり、「にわ」は機能的に未分化で、変化するあるいは不安定な空間である。

しかし、昨今の庭の使われ方をみると、人々の生活の仕方の変化に伴って、庭の意味や使われ方が変質しつつあるように感じられる。私空間である庭のパブリック化が進展しつつあるように思われる。庭が「にわ」化しつつある。

(2) 私空間のパブリック化!

新市街地での、庭空間の使われ方などに関する研究[3]から、「草花を育てる」「野菜をつくる」「家事(洗濯物など)をする」などの行動に加えて、「バーベキューをする」「お茶や食事をする」などのコミュニケーションに関する行動が指摘されている。これは、人々の生活行動の変化や多様化に伴い、「いえ」の空間機能が庭へ滲み出しているのであろう。このような行動が、緑のコミュニティ形成へと展開する可能性も考えられる。

観賞や眺めなどの受動的な行動から、コミュニケーションなどの能動的な行動へと、庭での人々の行動の多様化と変化が生じている。庭空間の構造化、あるいは進化が生じているのではないだろうか。

同様のことが私的な空間である庭から、公共的な空間である道路へと、多様な滲み出しをしているといえる(**写真2、3**)。個人の利己的な緑から、公共の利他的な緑へと展開している。私空間である庭のパブリック化であると理解したい。

(3) ガーデニングはパブリックを構築し得るか!

私空間である庭のパブリック化に関して、今、話題になっているガーデニングに注目したい。ガーデニングは、自分のための緑や花づくり(利己的)であるが、道行く人々や近隣の人々を楽しませる緑づくり(利他的)にもなり、さらに環境形成に寄与する緑づくり(環境的)である。草花などの材料や肥料の入手、関連する知識や情報の入手といったガーデニングを媒介にした人々のコミュニケーションから、地域のコミュニティ形成にも貢献することが明らかになりつつある[3]。

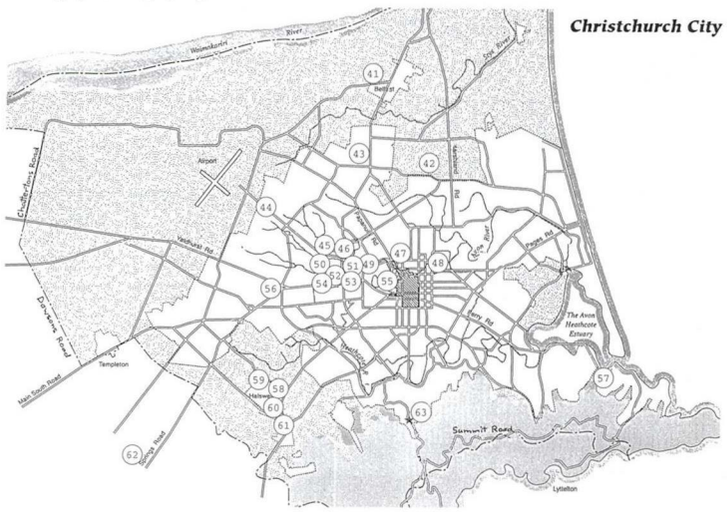


図1　ガーデン・ツー・ビジットの地図
(クライスト・チャーチ市内で図中の○印の番号が一般にオープンしている庭園)



写真2　通りまで滲み出した私の緑・花(三田市、フラワータウン)



写真3　ガレージ周りの緑・花(三田市、フラワータウン)



写真4　通りに開かれた色とりどりの花が咲いた個人の庭
(クライスト・チャーチ市)

図1は、ニュージーランド、クライストチャーチでのガーデンズ・ツー・ビジット（Gardens to visit…）の地図の一部[4]である。これには、一般に開放された個人の庭が地図上に記載されている。訪問に際しては、ガイドブックも用意され、各庭での犬、子ども、喫煙、車椅子、トイレ、喫茶、案内ガイドなどの可否に関する情報も提供されている。これらはガーデン・コンテストで入賞した庭などを中心に、一般に開放されているものである（**写真4**）。庭が交流や社交の場として日常的に機能し、庭から外部の公共空間に向かって緑が滲み出しているともいえる。

このように、ガーデニングを通じた友人や知人とのコミュニケーションから、コミュニティ形成、さらにはガーデン・ビジットのような人々とのふれあいは、緑からのパブリック再構築の可能性を示唆している。

地域の自然や緑はパブリックでは!

(1) 地域の自然や緑は

次に、広域での自然や緑に視点を転じて考えてみる。かつての高度経済成長と、昨今の経済や産業の構造変革に伴い、森林、里山、棚田などの地域の自然や緑は危機的な状況にある。生産林や薪炭林としての、かつての生産機能が経済的に成り立たなくなり、生産活動としての、人々の維持・管理の手が入らなくなったのである。その結果、微妙なバランスを保持していた自然や緑の生態系が崩壊する危機に瀕している、といえば過言になろうか。

しかし、われわれは日常的に自然や緑を眺め、週末などにはハイキングやピクニックに自然地へ出かけることがある。誰かが維持・管理している自然や緑を間接的、直接的に享受しているのである。地域の自然や緑は、公～私といった所有や管理の形態にかかわらずパブリックなのである。

このような自然や緑を健全に維持・管理するための知恵が要求されている。都市と自然との「交流」、都市の人々の参加を通じた「里山管理」や「森林ボランティア」のような様々な試みがはじまっている。

(2) 生きもののパブリックは

さらに、自然や緑の地域に生息している「生きもの」を考えることも必要である。生きものは、季節の変化や土地の利用状況などの自然の摂理に順応して生きている。人間側からの都合だけで生きものの生息環境を破壊してよいという理屈はあり得ない。生きものパブリックを考えるために、地域全体が生きものの生息空間であることを前提にした「ビオトープ」（Biotope）計画なども進みつつある[5]。これらを象徴するトンネルを**写真5**に示した。



写真5　カエルのトンネル（ドイツ、カエルの通り道を確保するための通路）

おわりに

都市の公園・緑地や広場、地域の自然や緑、さらには農地や水面までを緑地、オープン・スペースと定義して、ランドスケープの分野では研究や実践がなされてきた。実に便利な用語である。オープン・スペースと、そこでの人々の日常から非日常にわたる生活行動、そこに生息する様々な生きもの、これらを統合することが自然・緑・共生の視点からのパブリックではないだろうか。

参考・引用文献

1）久保貞、造園学の新しい研究方法の開発とその課題、1982.10.、造園雑誌　第46巻第2号
2）中村一ほか、造園技術、養賢堂
3）水野優子ほか、ガーデニングの現状とコミュニティ形成の可能性について、ランドスケープ研究62(5)、投稿中
4）Gardens to visit in MID and CHRISTCHURCH CITY, CANTERBURY HORTICULTURAL SOCIETY, 1998
5）例えば、一兵庫ビオトープ・プラン—西播磨西部地域ビオトープ地図・プラン、1998などが順次策定されている。

（なかせ　いさお　兵庫県立姫路工業大学自然・環境科学研究所教授、農学博士
兵庫県立人と自然の博物館環境計画研究部長）

都市のパブリックとは…

―アンケートにみる―

都市の「パブリック」とは何だろう。「パブリック」は、日本語としてなじみのうすい言葉である。「公共」と同意語に使われていることが多いようである。言い換えれば、公共のもの、役所がつくる公共施設や公共事業が、イメージされることが多い。しかし、パブリックスペースやパブリックアートなどというときには、少しニュアンスが違う。私有地であっても、誰もが自由に出入りできる、いつでも使える場所については、パブリックと言っているのである。

また、地域の景観や歴史的町並みについては、公共性があると考えられている。一つひとつの建物は個人のものでも、それが集まって町並みが形成され、周りの自然と一体となった風景が出来るとき、それは何か地域に共有化されるものとしてとらえられている。パブリックにしろ、公共にしろ、ふつうあまり気にせず使っている言葉ではあるが、多くの人が集まって住むとき、どのような建物をどのようにつくるのか、また、それが集積されて都市環境が出来ていくとき、その意味が気になってくる。

そこで「パブリック」という概念は、どのように理解されているのだろうかを確認してみようと、アンケートを行った。「〈パブリック〉という言葉から何をイメージしますか？　またその具体例―状況・場所・できごとなど―があれば教えて下さい」という設問に対して、はがき大のスペースに自由に書いていただくことにした。その結果、建築関係の学生125名、一般15名、建築関係者27名から回答をいただいた。

「パブリック」の場所：公園・道路・学校

まず、学生の回答を見てみよう。いろいろな表現があったが、他のグループと比べ、ほとんどの人が、場所や状況の事例をあげて説明している。複数の事例をあげている人もいるが、集計してみると、ベスト5は、公園(53)、道路(17)、学校(16)、駅(13)、広場(13)であった。

公園については、説明のあるものがあり、それをみると、少し大きい地区公園レベルをイメージしているようだ。いずれにしても、「パブリック」をイメージする場所として、4割以上が「公園」を指摘し、他と比べて飛び抜けて多い。学生にとって公園がこれほどに生活のなかで身近なものであったのかと、少し意外な気がする。

このほかにあげられている事例には、図書館(9)、役所(7)、公開空地、集会所、公民館・ホール、お祭り・地域活動(6)、スポーツ施設、病院、パブリックアート(5)があった。施設や場所が多く事例としてあげられているなかで、お祭りや自治会の掃除などの地域活動をイメージしているものがあるのは注目される。

いずれにしても、多くの人が「パブリック」をイメージする場所として、「公共」施設をあげているのがわかる。公園・広場・道路などの空間系と学校・図書館・役所・集会所などの施設系があるが、



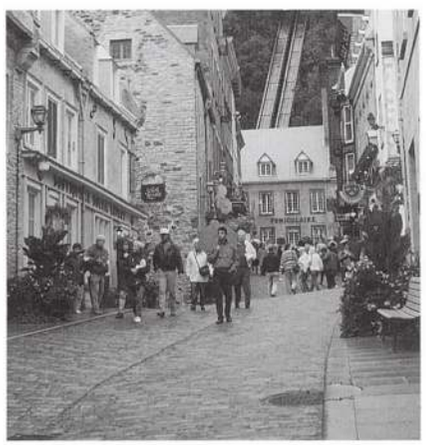
富山市役所

Public
公共施設
公共空間





地域にオープンな小学校と塀に囲まれた小学校



カナダ・ケベック州の道



緑のなかのひととき



車・歩行者・憩いか同居するコモの街角



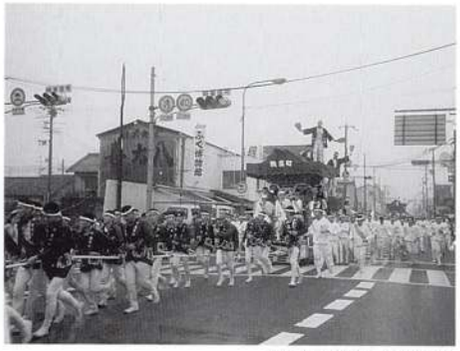
鎮守の森



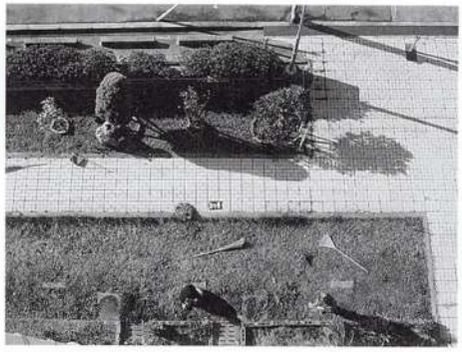
児童公園とお地蔵さん



みんなでつくった地域のスポット



岸和田のだんじり祭り



今日は掃除日和



ニュータウンの盆踊り

Public 地域社会 コミュニティの場

上位にあげられている場所のなかで、公共が建設・管理していない場所は、駅と公開空地しかない。ほかに民間の施設では、商店街や商業施設、遊ぶ場所が、少数ではあるがイメージされていた。

学生以外の方の回答には、具体的な事例があげられているものは比較的少ないが、その多くは、学生が指摘しているものと重なる。学生の回答にあまり見られなかった事例に、景観・市・鎮守の森があった。景観については、学生のなかでも少数ながらその公共性を指摘するものがあった。例えば今井の町は、その歴史を残す町そのものに公共性があると言っている。また、学生以外の人では、生活のルールをあげている例はあったが、祭りや地域活動をあげているものはなかった。

学生の回答で興味深いものとして、フリーマーケット、コンビニ、銭湯、インターネット上の仮想空間、住宅の居間などがある。

「パブリック」のイメージ

自由表記されている「パブリック」のイメージも、多様ではあるが、いくつかのキーワードがありそうである。これは、学生・一般・建築関係者で、少しずつイメージの傾向が異なる。

〈地域社会の共通認識の喪失〉

一般の方の回答では、「自分の家から一歩出ればパブリック」や「私個人の空間以外のすべて」など、「私」「自分」「私権」以外の領域をパブリックとしているものと、共有性・公共性・社会性や市民のかかわる概念としてイメージされているものが多い。後者の概念では、場所の意味としてとらえているだけでなく、マナーや社会生活のルール、場所の使い方についても語られている。また「日本人はパブリック感に劣っている」という指摘もあった。

建築関係者でも、一般の方と同じように「個」「私」以外の領域や公共性という概念に「パブリック」をイメージしているものが見られ、そこには不特定多数の人がかかわるという意識が強い。例えば「不特定多数の人の目にふれる」「不特定多数に共用される」「不特定多数の人が自由に立ち入れる」などと表現されている。誰でも、みんなが、大勢が利用できる、集まっているという状況であるが、そこに集まってくる人々の間の相互の関係性は希薄である。

また、日本には存在しない概念という指摘が多い。参加や共同体意識のある場所においてパブリックが発生すると考えている。つまり「共同体意識のはたらく場でパブリックは存在する」「秋祭りのための村の所有地や神社など、できごとに対する参加や管理への義務などがパブリック意識をもたらす」というものであり、「誰もが管理者であり、利用者である地域環境」「鎮守の森」がパブリックのイメージである。そしてこのような状況が消えゆく現在の日本に、果たして「パブリック」は成立するのかという指摘につながっている。

このほかに、地域社会にかかわるものとしては、「そこに住む人の外に対する印象・質の評価になるところ」「歴史への尊敬や都市の文化など、都市の誇りや市民が守るべきものと認識されているもの」


ジョグジャカルタ郊外の村の「市」

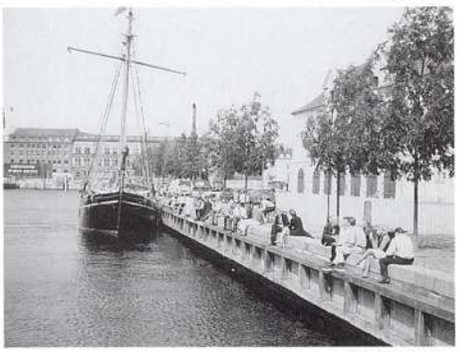

商業施設は地域の広場になり得るか

Public 人が集まる 出会い コミュニケーション


モールの昼下がり


人の行き交うコンコース


戎橋―無関係の集まり―


水辺の語らい

「物語の共有」という指摘があった。いずれの場合も何か地域に共有化されているという認識が基本にあると言える。しかしこのような認識も、現在の日本にはないのではないかという指摘が見られた。

一般の方では、市民がかかわるというイメージはあったが、地域社会・共同体意識については、ほとんど触れられていない。しかもこの地域社会や共同性の存在について、多くの意見が否定的で、現在の日本でパブリックという概念はないのではないかという認識が見られる。現在の日本社会には、「みんな」や「誰でも」といった不特定多数はあっても、地域社会を前提にした個人の存在の相互性はないのだろうか。

〈公共・集まる・開放〉

学生の「パブリック」のイメージにおいては、「公共・公」「人が集まる」「開かれている・誰でも、みんなが使える」が三大キーワードであった。いずれについても、2割以上の人がパブリックのイメージとしてあげている。

その次に多いイメージには、「他者との共有性」「出会い・交流・かかわり」など何らかのコミュニケーションがあること、一つの場所を「いろいろな人がいろいろに使えること」「みんなのもの」という意識であった。

必ずしも、事例とイメージの両方を書いているとは限らないので、その対応をとることはできないが、特に場所と連動しているわけでもないようである。それでも、広場は「開かれている・誰でも使える」というイメージが強く、駅は「人が集まる場所」としてのパブリック性が強い。

また、少ないながらも地域社会や共同性をイメージするものもあった。例えば、「公園の掃除や行事があって、普段使っていない人もそのときは集まってくるような場所」「地域の人が集まる」「共有・共同意識のある場や関係」「みんなで頑張ること」「地域の人々が何らかのかたちでお世話になっているところ」といった表現が見られる。

「縁側のようにそこに人が集まったり、ゲームをしたり、井戸端会議をするような、人がかかわりをもつところ」「近所の人がコミュニケーションをとるところ」というのもあった。これらは場所の使い方において、不特定多数を前提とはしていない。むしろコミュニティや地域のメンバーである個人が前提になっている。

「パブリック」の場所については、憩いの場や休息の場といったイメージが比較的多い。多くの人が集まっていながら、安全・安心感があるところだという。

「パブリック」のイメージはプラス評価が多いが、「禁止や厳しい規則」「人工的で冷たい」などのマイナス評価もわずかながら見られた。

地域から情報空間まで

このような自由表記のアンケートでは、量的な多さに意味があるとは言えないが、イメージの傾向はとらえられる。アンケートから

は、「パブリック」とはみんなに開放され、不特定多数の人が集まる、公共性がある交流空間というイメージが見えてくる。

「パブリック」を考えるときには、「私以外」「不特定多数」「みんな」「誰でも」「地域の人」「共同体」といった場所を使う主体、「公共性」「社会性」「共同性」「共有性」など、人々が属する社会の状況に基づく場所の意味と主体との関係性、「集まる」「交流」「開放」「コミュニケーション」など場の状況や機能の特性から、その意味が問われていることがわかる。

このような全体像とは少しはずれるが、「パブリック」の意味は社会状況と無縁ではないことを考えると、回答に現れている少数の視点にも注目したいものがある。

一つは仮想空間についてである。「開かれている状態・万人のものである」という理由からインターネット上の仮想空間をあげるものがあった。情報社会において、実態のある空間だけでなく、情報空間もまた、新たな社会環境となってきている。これは地域社会とその共同体意識の極にあるネットワーク上のコミュニティの存在の可能性を示している。今や、都市空間のなかに居ても、携帯電話でつながっている情報ネットワーク上の関係のほうが、身近なコミュニティとなっている時代である。ネットワークが支える情報環境の共同性や公共性が問題になりそうだ。

コミュニケーションの発生する場所は、銭湯や路地などの地域施設から、ネットワーク上の情報空間へと移行しつつある。そのとき、パブリックの前提となる主体と場所の意味が変わっていく可能性がある。

情報にかかわる意見はほかにはなかったが、例えば情報公開の意味も、パブリックという視点から問われてもいいものであろう。

もう一つ気になったのは、コンビニである。モノを売る施設というのではなく、宅配の受け付け、公共料金などの支払いサービスなど、様々なサービスを24時間提供している。しかも都市部であれば、歩いて行ける範囲に結構立地している。塾帰りの子供たちが集まり、高齢者がお弁当を買い、夜の街の灯となっている。誰でも使えて、人が集まる、共用性のある地域施設。コンビニエンス・ストアは、一つひとつの店は機能効率と経済的合理性に基づく全国ネットワークにつながれている端末の一つであるが、それぞれの場所で地域ニーズに応じた展開が行われている。ネットワーク型社会の地域性を問いかけている。

ネットワーク型社会のなかで、場所や地域と人の関係が再編されつつある。

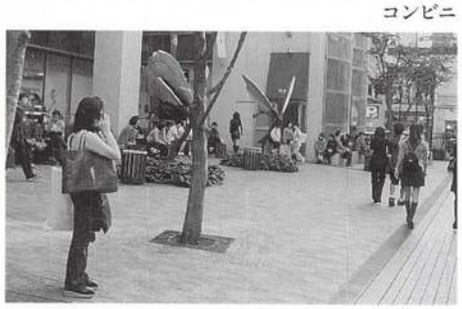
関係性の変化

「パブリックとは？」という問いかけに対して、自由に書いていただいた内容を読んでいると、人と地域や都市とのかかわりをどのようにとらえるかということによって、そのイメージや意味に違いがあるように思われる。

私たちは、たまたまその場所に居るあるいは生活している不特定多数の一人なのか、それとも、地域やコミュニティに属する「ある人」なのか。また、パブリックという意味をもつ場所や状況は、与えられたものなのか、それとも、その場所や状況にかかわりながらつくっていくものなのか。そして、そのような場所での他との交流や出会い・コミュニケーションは偶発的なものなのか、それともそこでのふるまいについてのルールや日常的な期待が共有化されているのか、といったことにかかわる。



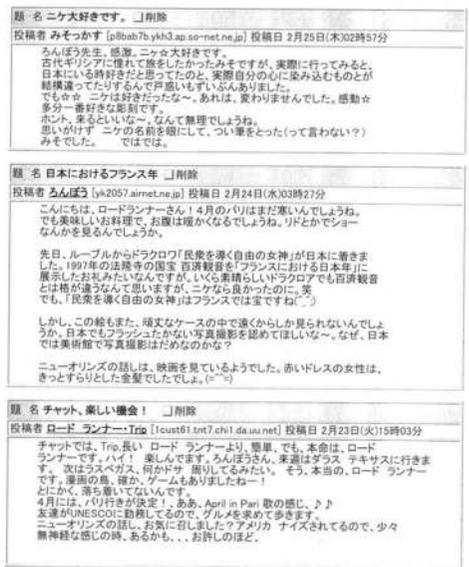
コンビニ


携帯電話

Public ネットワーク コミュニティ



ヴァーチャル広場


題 名 ニケ大好きです。 」削除
投稿者 みそっかす [p8bab7b.ykh3.ap.so-net.ne.jp] 投稿日 2月25日(木)02時57分
ろんぼう先生、感激。ニケ☆大好きです。
古代ギリシアに憧れて旅をしたかったみそですが、実際に行ってみると、日本にいる時好きだと思ってたのと、実際自分の心に染み込むものとが結構違ってたりするんで戸惑いもずいぶんありました。
でも☆☆ ニケは好きだったな～。あれは、変わりませんでした。感動☆
多分一番好きな彫刻です。
ホント、来るといいな～。なんて無理でしょうね。
思いがけず ニケの名前を頭にして、つい筆をとった(って言わない？)
みそでした。 ではでは。

題 名 日本におけるフランス年 」削除
投稿者 ろんぼう [yk2057.airnet.ne.jp] 投稿日 2月24日(水)03時27分
こんにちは、ロードランナーさん！4月のパリはまだ寒いんでしょうね。
でも美味しいお料理で、お腹は暖かくなるでしょうね。リドとかでショーなんかを見るんでしょうか。

先日、ルーブルからドラクロワ「民衆を導く自由の女神」が日本に着きました。1997年の法隆寺の国宝 百済観音を「フランスにおける日本年」に展示したお礼みたいなんですが、いくら素晴らしいドラクロアでも百済観音とは格が違うなんて思いますが、ニケなら良かったのに。笑
でも、「民衆を導く自由の女神」はフランスでは宝ですね(^^)

しかし、この絵もまた、頑丈なケースの中で遠くからしか見られないんでしょうか。日本でもフラッシュたかない写真撮影を認めてほしいな～。なぜ、日本では美術館で写真撮影はだめなのかな？

ニューオリンズの話しは、映画を見ているようでした。赤いドレスの女性は、きっとすらりとした金髪でしたでしょ。(^^)

題 名 チャット、楽しい機会！ 」削除
投稿者 ロード ランナー・Trip [1cust61.tnt7.chi1.da.uu.net] 投稿日 2月23日(火)15時03分
チャットでは、Trip.長い ロード ランナーより、簡単、でも、本命は、ロード ランナーです。ハイ！ 楽しんでます。ろんぼうさん、来週はダラス テキサスに行きます。 次はラスベガス、何かドサ 周りしてみたい。 そう、本当の、ロード ランナーです。漫画の鳥、確か、ゲームもありましたねー！
とにかく、落ち着いてないんです。
4月には、パリ行きが決定！、ああ、April in Pari 歌の感じ、♪♪
友達がUNESCOに勤務してるので、グルメを求めて歩きます。
ニューオリンズの話し、お気に召しました？アメリカ ナイズされてるので、少々無神経な感じの時、あるかも、、、お許しのほど。

ネットの会話



アメリカ村

〈都心空間の寛容性〉

天気のよい土曜日や休みの日に、大阪のミナミにあるアメリカ村を歩いていると、道端の壁際のスペースや歩道の車止めのバー、段差のあるところなどに、多くの若者が、一人で、また友達と座り込んだり、なんとなくたたずんでいる。彼らはどこからかやってきて、休みの一日をここで、おしゃべりしたり、人を眺めたり、雑誌を読んだりして過ごしている。そして「村」のなかの誰もが出入り可能なスペースを、自由に使っている。

これはパブリックなのだろうか。路地や道端、団地の空き地で、近所の子供たちが遊んでいるというのとは少し状況が異なる。コミュニティや地域が、その場所にかかわる人を前提として成り立ち、パブリックはそのような場所と人の関係性を前提とするならば、不特定多数の集まる都心にパブリックは成立しないのだろうか。

御堂筋や船場、アメリカ村や心斎橋など、名前をもっている地域は、その場所の歴史や、そこに集積されている建物やそのなかで行われる様々な商売や事業により、それぞれのステイタスをつくっている。それは、街並みや沿道の店の構成などとして表現されている。そして都心の商業地や業務地をつくっているのは、ビルのオーナーやそこで事業をしている人たちであり、彼らは本来、地域の環境に無関心ではないはずである。

しかし都心には、このような地域をつくっている人だけでなく、多様な人がやってくる。そこでは、そのまちを使う人が、使っていくなかで使い方を了解していく。それがどれだけ柔軟で、また社会的・文化的背景が違っても了解できる空間が出来ているかが、都市の寛容性であり、そこに都市のパブリック性があるのではないだろうか。

アメリカ村の状況はその一つの現れである。それに比べて、空いているけれど入りにくいデザインの公開空地や緑に囲まれた自閉的な建物のつくり方は、結局、移動を担う機能空間としての道のなかに人々を閉じこめるだけでなく、まち行く人と建物の関係も希薄にしている。人と場所とのかかわりの手がかりがない。

〈生活の場所の相互性の喪失〉

居住地は都心とはまた違うはずである。しかし、アンケートでもかなりの人が指摘していたように、地域の共同性やコミュニティが見えなくなっており、人と地域の関係性が希薄になり、住んでいる人の匿名性が高まっている。引っ越しても、だれも生活のルールを教えてくれることもなく、地域のことを何も知らずに暮らすことになる。それぞれの家やマンションの一室を出れば、どこも同じ「私」以外の環境になってしまうのだろう。

家は敷地内ですべてを満足させるようになり、技術的に内部環境を制御すれば風土や地域性を考える必要もなく、そして、家と通りの関係や地域との関係は意識されなくなっていく。

ニュータウンのように全体像をもって整備されるのとは異なり、既成市街地の更新は少しずつ進む。今、更新が進む市街地に見られる街並みや生活環境の混乱は、個々の住宅が通りや地域との関係性を考えることもなく、またその手がかりも見いだせず、自閉的に建てられていることによるのではないだろうか。

都心以上に居住地でのパブリックは、手がかりを失っている。その結果残ったのが、「公」と「私」の区分である。

その一方で、住んでいる人が主体となるまちづくりの動きがある。景観を手がかりにまちづくりのルールをつくったり、小さな公園を住民参加でつくったり、身近な環境形成にかかわり始めている。また、標準化された公共サービスでは対応できない福祉や生活サービスの分野でのボランティアやNPOの活動も始まっている。これらには、かつての地縁型コミュニティとは少し違う地域の共同性や相互支援のかたちが見える。

〈ネットワーク型社会の関係性と場所のリアリティ〉

生まれたときから、このような環境で育ってきた学生たちにとって、パブリックは、家に代表される「私」に対する「公」共の施設としか認識できないのも無理のないことである。公園も学校も道路も、機能が明快で、公共が管理していくために領域をはっきりさせている。コミュニティの共用性に基づくパブリックは、家の前の道は掃除するけれど、勝手に遊び場にもなるといった、その領域や使い方を曖昧にするところにあった。しかし今は、住むところにも、場所のリアリティがないのかもしれない。

住む場所とは別に、学校があり、働く場所があり、遊ぶ場所がある。いくつもの場所を使い分けながら暮らしている。小さいときから電話によって、今では携帯電話やメールによって、場所を問わないコミュニケーションがある。場所を離れた人間関係があり、家も学校も遊ぶところも、どこも一時的な居場所でしかないならば、アンケートに答えて「私の身体以外はすべて他者である」と書かれていたのも、納得できる。

このような状況において、パブリックを考えることは、空間のデザインだけでなく、環境のつくり方や環境との関係性のデザインについても、つくり手に問われていることではないだろうか。

（文と写真 **小浦久子** 写真 **松本壮一郎／伊縫憲幸／田中直人／上田セキ子**）

場所の再生と新しいパブリック

—編集後記にかえて

震災のあと、芦屋では一軒の洋館の保存運動がおこった。それは文化財に指定されているわけではないが、人々の生活の場のランドマークであり、まちの歴史的時間をつないでいたものであった。しかし、所有者の力だけではとても修復保存はできない。かといって、文化財でなければ、全く公的助成もない。このような事情で、阪神間のモダニズムを伝えてきた多くの洋館・和館は姿を消すことになった。まちの街区構成や大きな空間構造は変わらないものの、個々の住宅は、時代の技術と経済的・個人的事情を反映しながら、再建が進み、街並みは大きく変化した。その場所に蓄積され共有化されてきた記憶も環境も、「私」の住宅のことになると何の意味も力も持ち得ないのだろうか。これは被災地だけでなく、また、住宅だけでなく、日本のあらゆるところで、あらゆる建物でおこり続けていることである。

住宅地の道や公園は、「私」の家の外であり、公共が管理するものでしかないときには誰でもが使えるけれど、見知らぬ人が入ってきても気づかれなくなり、逆に子供たちにとって危険なところになる地域が出てきている。住んでいるところでも、場所の意識は希薄である。地域には、仕事や遊び、地域活動やボランティアなど、ある目的でつながるアソシエーションが多層にある。しかし、それらはその場所にあることよりも、むしろそれぞれの活動を通して地域とつながる。

移動の自由が高まり、情報ネットワークが仕事の仕方やコミュニケーションのあり方を変えていきつつあるなかで、場所の感覚が薄れてきている。住んでいる場所ですら、かかわりが希薄になっている。そのようななかで、都市のパブリックとは何なのだろうか。

その手がかりをいろいろな視点から考えてみた。いくつかの地域で、緑や福祉・生活にかかわる自立的な活動などに、新しいパブリックの芽があった。しかし一方で、地域性や歴史的環境の表現が表層化・コード化しているとの指摘や、「公」と「私」に領域が二分されつつあるという指摘にみられるように、都市環境におけるパブリック性は、かなり危機的状況にもあるようだ。

随分前のことである。日本の広場について話をしていたときに、「ミナミの戎橋には、いろいろな人が居合わせているけれど、異なるグループの間にはコミュニケーションは成立していない。匿名的な多様なできごととディスコミュニケーションを許容する空間が都市の日常である」という話になった。社会生活の領域が、業務施設や公共施設、商業空間や劇場などの施設のなかに入り、プライベートの領域がまちなかへ出ていくとき、新しいパブリックスペースのあり方、つくり方を考える必要がある。コラボレーションのあり方や表現活動と都市との関係の指摘のなかに、何らかの示唆があるのではないだろうか。

パブリックという概念には、文化的、社会的、歴史的経験が反映される。つくり手は、何でもどこでもつくれる技術をもったけれど、もう一度、それぞれの場所でどのような人がかかわり、どのようにつくるべきか、またつくらないべきかを考えることも必要ではないだろうか。(H.K)



特集　都市のパブリック

「ペット飼育可能住宅」の住まい方のルール

高木左京
神戸市住宅局住宅部管理課管理係長

大震災とペットとの共生の可能性

神戸市営住宅においては他の公的住宅と同様、共同生活を円滑に営むための遵守事項のひとつとして、従来、ペットの飼育は全面的に禁止している。一方、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災により被災された方の中には、高齢の一人暮らしの方をはじめとして、震災を共に乗り越えてきたペットが唯一の心の支えになっている方々もいる。ペットがそういった被災者の心のケアに大きな役割を果たしているという実情も見過ごすことができない。

このような状況をふまえ、災害公営住宅において、被災者の動物飼育に対する配慮を具体化し、動物飼育を容認する可能性を探る必要があり、各方面の関係者による「ペット問題研究会」を開催した。

ペット問題研究会の提言要旨

モデル住宅を設け、試験的な取り組みを実施する。モデル住宅の成否、発展については、飼育者の適正な飼育にかかるところが大きいので、今後の推移を見極めていく必要がある。

以下に、モデル住宅のあり方の主な提言内容を抜粋する。

⑴ 設備――住宅の汎用性、負担の公平性を考慮し、ハード面での特別な対応は見合わせる。

⑵ 立地、空間の区分――住宅が密集する市街地部より、近隣との緩衝空間が十分確保され、自然環境に恵まれた郊外地が望ましい。また、動物の毛などによるアレルギーの問題からも、複数棟で構成される団地では、特定の棟をモデル住宅に充てることが望ましい。

⑶ ルールづくり――動物と共に生きるコミュニティの環境をより良くしていくため、入居者みんなが迷惑行為をどう防ぐかを考え、ルールづくりのプロセスに参加することが望ましい（飼い主の会の結成）。また、入居者のみならず専門家・行政の助言・指導も必要であり、協働のルールづくりが望まれる。

⑷ モデル会則――モデル住宅で結成される飼い主の会による上記のルールづくりを行うためのたたき台としての標準的な会則を示す。ただし、当該住宅の諸条件に応じて、近隣住民や他の住棟の入居者への配慮から独自の規定が必要な場合がある。

災害復興住宅における募集

震災後、兵庫県下の被災した各事業主体で一元的に、住居を失った方々のための災害復興住宅募集を、順次行ってきた。ペット飼育可能住宅としては平成９年９月の第４次一元募集において、神戸市営住宅としてははじめて郊外地で２団地（69戸）の募集を行った結果、以下の応募があった。

《第４次一元募集における募集結果》

①鹿の子台南住宅（神戸市北区）

●全体６棟（230戸）のうち、１棟（35戸）2DK15戸（51㎡～60㎡）、３ＤＫ20戸（61㎡～62㎡）

●募集35戸／応募者38名／倍率1.1倍（一般棟倍率0.8倍）

②ベルデ玉津住宅（神戸市西区）

●全体２棟（133戸）のうち、１棟（34戸）２ＤＫ34戸（50㎡）

●募集34戸／応募者25名／倍率0.7倍（一般棟倍率0.8倍）

その後の復興住宅募集の結果、平成11年２月現在の空家戸数は３戸（鹿の子台南住宅）で、10年10月募集で募集を行い仮当選者４世帯（補欠１世帯含む）が決まっており、10年度中には全戸入居が完了する予定である。



ペット飼育可能住宅の現状と課題

平成10年３月29日には鹿の子台南住宅１号棟入居者に、５月10日にはベルデ玉津住宅２号棟入居者に対して、ペット問題研究会の委員を招いて「市営住宅におけるペット飼育について」と題して研修会を開催し、入居者ほぼ全員の参加があった。

その後、鹿の子台南住宅１号棟入居者で協議した結果、６月28日に「ペット友交会」が結成され、役員を選出するとともに会則を規定し、自主的な活動を行っている。また、ベルデ玉津住宅２号棟入居者に対しては平成11年２月19日に研究会委員を招いて研修会を開催するとともに、「飼い主の会」の設立を側面より支援した。

飼い方のマナー違反による飼育棟以外の入居者とのトラブルや飼育者同士のトラブル発生はある程度覚悟していたが、現在のところ苦情は聞いていない。また入居後１年を経過しての状況や今後のあり方の参考とするため、３月末を目途に実態調査を行っていく。

《入居当初の飼育実態調査結果》

●ペットの飼育種類

①鹿の子台南住宅／犬16世帯・猫４世帯・その他２世帯

②ベルデ玉津住宅／犬10世帯・猫６世帯・その他１世帯

●入居後の実態調査（11月12日アンケート調査結果）

①鹿の子台南住宅（30世帯中25世帯回収）

犬18世帯（22匹）・猫４世帯（９匹）・鳥４世帯（８羽）

②ベルデ玉津住宅（30世帯中17世帯回収）

犬11世帯（13匹）・猫５世帯（９匹）・鳥１世帯（１羽）

（たかぎ　さきょう）

45 木下直之

being

東京大学総合研究博物館助教授



日田彦山線田川後藤寺駅前にて

きのしたなおゆき
木下直之

1954年、浜松生まれ。東京芸術大学大学院中退。
兵庫県立近代美術館学芸員を経て、1997年より東京大学総合研究博物館助教授。
黎明期の日本近代美術とその周辺を研究対象としている。
著書に『美術という見世物』(平凡社、1993年)、『ハリボテの町』(朝日新聞社、1996年)、『写真画論』(岩波書店、1996年)

(注1) being16リカちゃんが見続けた日本人のマイホーム・ドリーム
(建築と社会／1989年11月)
平成元年度会員企画小委員会 being 幹事会企画委員担当
(注2) 昭和60年
(注3) 昭和63年

駅も公園もゴミ箱も歩道橋も、それぞれに異なる過去を有し、現代の町に組み込まれている。木下は今日もぶらり、駅前に降り立ち、それら「つくりもの」のつぶやきに耳を傾ける。

◆

ある日突然電話が鳴って、beingからお呼びがかかった。今度は誰にインタビューするのかと思ったら、相手はお前だという。自問自答せよというのだ。ずいぶんと昔のことだが、前回の相手はリカちゃんだった。いつまでも若い(というよりも年齢不詳の)リカちゃんに、誕生以来22年にわたる暮らしぶりを、主にどんな家に暮らしてきたかをインタビューしたのだった。(注1)

編集部から送られてきたbeingのバックナンバーを見たら、インタビューに応じた人物の中で、ただひとりリカちゃんが実在の人物ではなかった。そんな取材をよくぞ許してくれたと、あらためて当時の編集者に感謝したくなったが、たぶんそのころから現在にいたるまで、実在と不在を区別する私の基準はゆるみっぱなしなのである。

いや、ゆるんでいるのは生活のすべてにわたっており、仕事と遊びの区別もなければ、通勤と散歩の区別もあんまりない。生と死とか、男と女とか、戦争と平和といったいわゆる二項対立の図式は、分かりやすくてすっきりとするのだが、境界線上のグレーゾーンに目が届かなくなりがちだ。脳死を考えれば生死の境界線はそう簡単には引けないし、男女の境界線もセックスとジェンダーでは異なっている。そして、戦争はしばしば平和のために起こる。

したがって、本誌のタイトルでもある「建築と社会」も、実は明解なようでいてよくわからない。いったい建築と社会はどういう関係にあるのか。建築は社会の一部なのか、それとも外側にあるのか。

私見によれば、1917年の創刊時から使われてきたこのタイトルは、建築が社会を変え得ると考えられていた時代の産物である。おそらく、当時は、都市を建設し社会を改造するための最善の方法が、よい建物を建てることだった。そのためのお手本は欧米の先進国にいくらでもあった。官庁や銀行やデパートが、そしてオーナー社長が、負けじと競い合うように洋風のビルディングを建て、竣工の暁には、豪華な建築写真集が関係者に配られたものだ。

そうした写真集の中で、建物は光輝いて見える。建築と建築家の役割が誰の目にもはっきりと見えていた時代だった。社会の内側外側という初めの疑問に戻れば、建築家は社会の外側にいて、社会の中に、まるで将棋の駒を指すように建物を置くという感じだった。

ところが、それから始まった戦争で多くの都市が破壊され、戦後の復興の行き着いた先のいわゆる高度経済成長期を経た今となっては、よい建物がよい都市生活を実現させるなどという牧歌的な考え方は通用しない。交通、環境、住宅、防災、防犯、情報、福祉などの問題を抱えて、社会はもっと複雑である。

いやそれならば、『建築と社会』は、むしろいち早く、社会は複雑であると警告を発した雑誌だったかもしれない。しかし、一方で、のどかな時代の名残りも感じるのは、雑誌の柱が建築作品の紹介である点だ。いつから続いているのか知らないが、「作品作風」という欄は、輝ける竣工写真のオンパレードである。

読者は建築雑誌が建築作品の紹介に努めるのは当然の義務と思わ



Ⓒ


Ⓑ



Ⓐ


Ⓓ


Ⓔ

〈写真解説〉 Ⓐ 時間があったら知らない町を歩く。金沢からの帰りに、高岡で降りると、「祝端龍寺国宝指定」の横幕に迎えられた。まずは駅前をうろつき回る。Ⓑ 駅前広場の大伴家持像にびっくり仰天。台座に、「家持越中赴任1250年記念」とあったからだ。近年流行の町起こしは、とうとうこんな昔の人まで引っぱり出すに至った。Ⓒ 高岡下車の目的は、高岡大仏を見ること。民家の屋根越しに仰ぎ見る大仏は現実離れをしている。Ⓔ しかし、途中にあったメルヘン広場の現実離れも負けてはいない。桃太郎がいて犬がいる。Ⓓ 富山県がこの広場に「うるおい環境とやま賞」を与えている。その意図はよし、しかし、町づくりのすべてがバラバラに進行しているという気がしてならない。

れるに違いないが、誰もが疑わないこの「作品」という呼び名も、一度は疑って見る価値がある。作品と非作品の境界線上にもまた、グレーゾーンはあるからだ。

私がそんなことを考えるようになったのは、美術館で美術作品を長い間相手にしてきたからだった。「作品」が一番幅をきかせているのが、美術の世界である。たとえゴミであっても、誰かが、作者や美術館学芸員が、それを「作品」と呼べば作品になってしまう世界だ。そして、美術館は非作品を扱わない。

実は10年ほど前に、本誌の発行元である日本建築協会に私が初めて接触したのも、美術展に建築を組み入れたいと考えたからで、そのころ私は建築家を作者と扱い、建築を作品と扱って疑わなかった。建築展がまだそれほど開かれていない頃だから、展覧会はおおむね好意的に迎えられたものの（「大阪神戸のモダニズム展」（注2）、「1920年代日本展」（注3）、いずれも兵庫県立近代美術館で開催）、今から振り返れば、建築を美術の世界へと引き寄せただけだったような気がする。近代の大阪でいえば、渡辺節、安井武雄、村野藤吾といったビッグネームばかりを引き寄せようとし、ドローイングを額装して展示すれば、彼らの仕事を見せたことになると考えた、私の基準は、どうやらガチガチに硬直していた。

その後、美術館で金科玉条のごとく使われる「作品」が（いうまでもなく美術館建築もこの「作品」を守るためにある）、実はまだ百年ぐらいしか使われていない新しい言葉であることに気がつき、それから私の判断基準は緩んだままなのだ。

では「作品」以前には何があったのか。「作物」である。今では農作物ぐらいにしか使われないが、ちょっと前の辞書には、文学や造形物の意味も載っている。「さくもつ」ばかりでなく「作り物」ともいい、「造物」「造り物」とも書く。そして、これらの言葉の背後には「造化」（万物を造り育てた神、あるいは万物の通行を司る法則）があった。ここでは、作者とは、造化と作物の間をつなぐコーディネーターのようなものであった。作者は不特定複数の場合もあり、作物はそれを未来永劫に残そうなどと考えない場合も多い。

近代における作物から作品への交代劇とは、作者が造化の席に居座ってしまったことにほかならない。その証拠に、美術の世界でも建築の世界でも、展覧会でも雑誌でも、作者と作品の情報さえ提供されるなら、もうそれで十分だ。「作品作風」の写真群に私が感じる寒々しさは、環境や使い手を排除し作者と作品だけで自己完結した世界から、あるいは建築のそうした見せ方を当然のごとく享受する世界からやってくるような気がする。

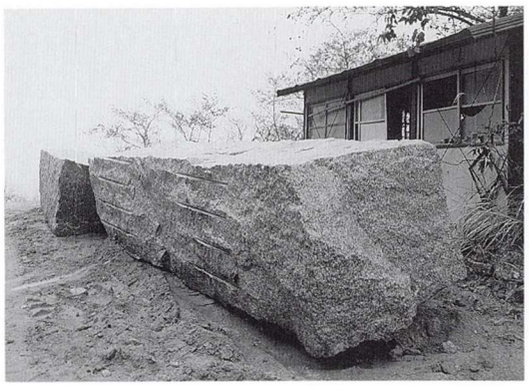
建築雑誌には決して載らない非建築作品、建物から少しずれて存在するものにも目を向けることをおすすめする。私は、駅前広場にある彫刻やモニュメントを「駅前彫刻」と総称して、ここしばらく追いかけてきたが、今はさらに古い記念碑を面白いと思う。いずれもそれぞれの時代、それぞれの社会の産物であり、ひるがえって、現代のわれわれが自信満々で作り出すものの行く末についても教えてくれるように思うからだ。

（編集担当　加藤俊明）

石

石刻から

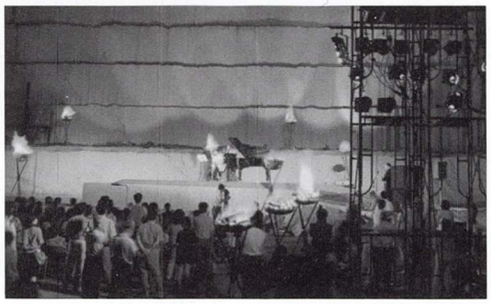
奥田　英雄　大林組
Okuda　Hideo



素材の源流をたどり、建築の新たなる創造性を探るシリーズ　今回は「石」をとりあげる。石は耐久性ゆえ古来より石垣や石橋などの構造材として多用されてきた。やがてその特性をしのぐ新素材の台頭により、石の利用は空間を装う化粧材に移る。冷たく堅い印象の石だが、時折穏やかで優しい素顔をかいま見せる。石の素顔にいつ会えるのか、石刻という行為を通して探してみたい。

（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）





切出す

石の単位を“砕”という。一尺立方を一砕と呼び大理石で90kg、御影石で100kg程の重量がある。切り出す手順は岩塊の頂から麓に向かい一層ずつそいでいく。クオリードリルで深く穴をうがち、連ねることで裂目をつくる。底部を横から黒色火薬で爆破し、身の丈以上の巨石を切り出す。大地から引き出された量塊は凄まじい質量であたりを震撼させる。

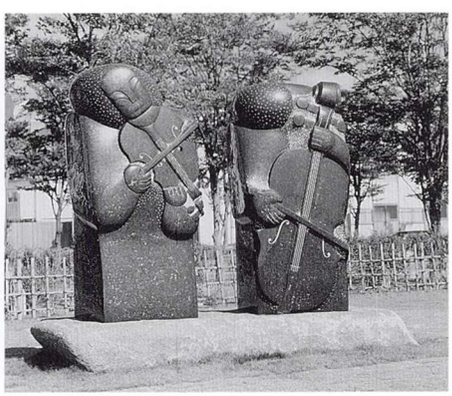
圧倒的断崖が残る。高さはゆうに50mを超える。ひとつの岩盤で構成された山を20年かけて切り出した露天掘の跡である。空間的価値が充満している。石の素材としての荘厳さが極まる。かつてここでセラミックのフルートによるコンサートが開かれた。篝火の中、大地の量感が人々を深く魅了したにちがいない。

彫る

石彫は野天で刻む。陽の光で表情をとらえるためである。微かな陰影が素顔を追い、一鎚に想いを込める。炎暑が作意をあぶり、寒烈が技を引き締める。ほとばしる想いが季節を駆け抜け、イメージを作品に昇華させていく。

石を表現の手段とする彫刻家の多くは採石場をアトリエとする。採石場はイメージに適した石材を探す場としてだけでなく、むしろ散在する石材の形状や素性に触発される場としても重要となる。料理人が食材の出来により献立を見極めるように、彫刻家は石材に触れ、対話することで主題そのものを発見する。本来、素材を生かすというのはこうした経緯をたどるべきかと思う。







敷く

石畳を行く。こつこつと心地よい響が町並にこだまする。据えた時は荒かったであろう表面も、多年人に踏まれるうちに滑らかに仕上げられた。歩くと不思議と柔らかい。脚が道を覚え、耳が郷愁を掻き立てる。

石は無垢材である。表面が削られても芯材が新たに現われる。石畳が年とともに豊かな味わいを深めていった理由といえる。表面だけでその特性を語り尽くそうとする偽物の素材はやがて本質を露呈し使い手の信頼を裏切っていく。工業製品でありながら、コンクリートやソリッドな樹脂に意外にも抵抗をもたないのはそれらが無垢材であるからではないだろうか。



経る

山路に石仏が佇む。風化した肌合いは僅かに苔むし、経てきた時間を静かに語る。誰が据えたかは忘却の彼方に虚ろにかすむ。ただ、時代を超えた想いだけが風雪に耐えていく。不変を願い刻まれた祈りが行く人を優しく見守る。

石はしばしば信仰の拠所となる。堅固にして不朽という石の特質が恒久の願いを形に現わす。量塊が人の精神に働きかけ神格化する作用があるというが定かではない。むしろ生命の源である大地の礎に魂の息づきを感じるからかもしれない。

石の記憶

膨大なデータを一握りのディスクが読み込む。小さな端末が地球規模のネットワークを共有する。「小さく・軽い」という時代の要請は高度な先端技術により達成される。これは同時に環境への負荷を減らす効果も期待できる。「小さい」は省資源を意味し、「軽い」は移動のエネルギーや構造的負担を軽減させる。さらに我々の意識さえ改める。欲の赴くまま無秩序に肥大していく所有という行為はすでに限界に達している。大切なものだけを厳選し小さくまとめていくには、自らを強く律する姿勢がいる・・・・時代は「小さく・軽い」を求めている。

山を削り海を埋める。平野の乏しい地域が大地を獲得するためである。歴史をもたない街　ニュータウンが忽然と現れる。美しい町並、広い公園、機能的な地区センター。なにもかもに不足がない、絵に描いた箱庭のような暮らし。だがなにかが欠けている。幼い頃畏怖した逢魔ヶ時の神社の裏山、溜息を掃きだす横丁の赤ちょうちん。都市の闇と影がそこにはなかった。あまりに明るい光が闇を追い影を奪い、奥行をもたない平坦な街を創る。

自然発生的な街のもつ、時間が醸成した原風景が失われつつあると思えてならない。風土や風習を軽んじることは過去との決別を意味する。そしてやがては現在が未来に見捨てられていくことにつながるのではないだろうか。

石は量塊のときその特性が際立つ。だが重さゆえに時代の速度に馴染むことができない。石には時が刻まれている。太古、地球の胎動が石を生み出した。素材としては最も古い。刻むと累々と蓄積した時間を読み取ることができる。石に託し、想いは後世に伝わる。石は時を伝承する。



旧道で思いがけなく道標に出逢う。今なお立派に用をなす。遥かな時を隔て、過去が現在に語りかける。今に生きる我々も確かに刻まねばならない。やがて訪れる未来が道に迷わないことを願うばかりである。

協力　彫刻家 吉本豊　関ケ原石材株式会社　倉橋石材株式会社

BOOK STATION
ブックステーション

シリーズ建築人類学≪世界の住まいを読む≫③
住まいはかたる
佐藤浩司 編著

学芸出版社
1999.1.25刊
A5変判　239頁　本体2800円



既に本誌で紹介済みのものも含め、当シリーズの50に及ぶ論考は、地球上の様々な住まいを、単に伝統的住居として賞賛するのではなく、文化としての住まいと文化を担う社会や人間との関係において、歴史でも民族でも国家でもない人類という視点から論じられている。
住まいをつくるという人類誕生以来脈々と営まれてきた行為は、たとえ時間と共に表現形態、表現手法が変化しようと、高度情報化社会に突入しようと、そこに住まう営みに何らかわりはなく、住まいは人と人、人と社会を繋ぐ媒体であり続けている。
住まいを通してかたられる人間・社会の存在を垣間見ながら、住まいという器に自己の存在を刻み込んできた先人達の何ともいとおしいことか。読み進めるうちにそんな気分になるのである。
また、当シリーズ①～④は地球上の住まいに関する資料として手許に置いて、時々眺めたくなる本でもある。　（Y．O）

タウンモビリティと賑わいまちづくり
高齢社会のバリアフリー・ショッピング
タウンモビリティ推進研究会 編著
建設大臣官房政策課兼福祉環境推進室 協力

学芸出版社
1999.2.10刊
A5変判　205頁　本体2300円



我が国では短期間に高齢者が急増するという世界に類例のない問題を抱えている。
加齢と共に身体的機能は低下し、社会的なつながりが減少する。モビリティを確保できれば生活圏は拡大でき、社会とのつながりを豊かにする。社会から孤立せず健康的に年を重ねることができる。タウンモビリティとは、歩くことに不自由を感じる人などに街なかにでる楽しさや利便性をサービスするために電動スクーター等を貸し出しする。行政、企業、市民が協調して行うボランティア事業である。タウンモビリティは高齢者等への支援に止まらず、あらたな街づくりを推進し、回遊する街を実現することで、人々の意識が変わり人にやさしい街づくり、バリアフリーの街、さらに一歩進んだユニバーサルデザインの街の実現を期待させる。この本にはタウンモビリティの日本での実現に向けた提案が盛り込まれています。
（R．T）

今こそ日本に夢を
「未来首都・畿央」
㈳日本青年会議所近畿地区協議会 編

オール関西
1999.2.10刊
A5判　231頁　本体1429円



現在の閉塞した日本を生まれ変わらせるためには、東京一極集中を排除し、地方分権・多極分散型の国土を建設しなければならないとして始まった首都機能移転問題の議論は、1992年の「国会等の移転に関する法律」の成立および1995年の「国会等移転調査会」報告書の提出にいたって、にわかに現実味を帯び、目下「三重・畿央」「東海」「北東」の三地域に絞られた具体的な候補地の調査・検討が行われていると聞く。この本では、「畿央高原」を推薦する官・財・学のいろいろな立場の人からなる「首都機能移転構想研究会」が中心となり、畿央高原の持つ首都機能イメージについて考察を重ね、未来首都のあるべき姿を提案している。また、堺屋太一氏の「首都機能の移転。今こそこの問題が重要である。『この国の“かたちと気持ち”を改めること』を現実的なテーマとして進めるべきだ。」として「今こそ日本に夢を」と題した巻頭言をはじめ、本書を構成している各界の実に多くの人たちの対談・罷談、メッセージ、関連論文は新しい首都づくりの論議に大きな一石を投じ、計画を推進させる機動力になると思われる。　（I．I）

安全と再生の都市づくり
―阪神・淡路大震災を超えて―
㈳日本都市計画学会
防災・復興問題研究特別委員会 編著

学芸出版社
1992.2.10刊
B5判　350頁　本体3800円



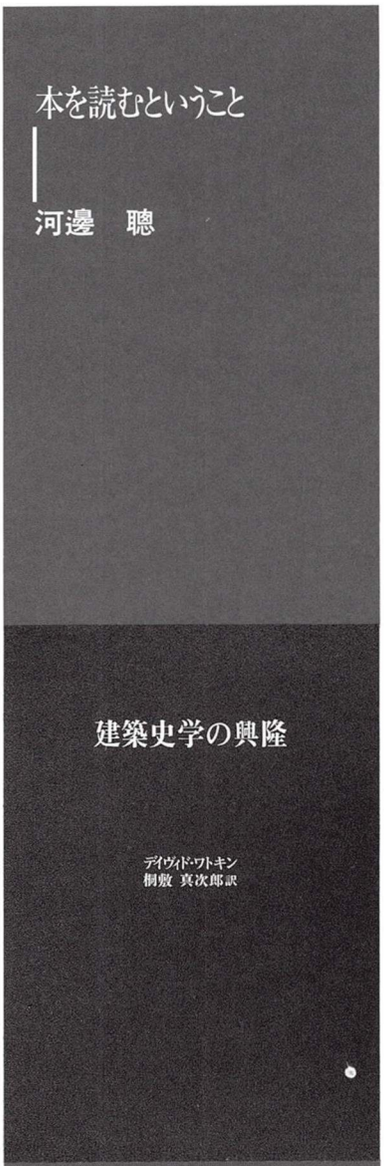
阪神・淡路大震災後の4年間に都市計画学会の小委員会で発表された論文を総括し、そこから導かれる都市の在り方への提言をまとめている。今回の震災を対象にした調査や研究に限らず、震災を契機に都市計画の専門家たち62人がそれぞれの分野の視点から、それぞれの地域を題材に書き下ろしたものである。
論文のボリュームと広範で専門的な対象のため、取り付きにくくなりがちな内容だが、論文の体系的な分類と項目ごと添えられているサマリーによって、誰にでも読みやすい構成となっている。
テーマは大きく都市防災、まちづくりの二つに分かれている。都市防災の項では従来どおりの危険度評価や安全な都市構造が題材となるが、「地域の自発的な力を高める日常のまちづくりこそ災害に強いまちをつくる」とあるように、結論としての25の提言では、「まちづくりを支援するこれからの都市計画」という立場が強調されている。
（A．K）

担当：会員企画小委員会／伊藤郁郎・大谷由紀子・河﨑敦子・高橋麗子

書評

本を読むということ

河邊　聰



建築史学の興隆

デイヴィド・ワトキン著、桐敷真次郎訳

中央公論美術出版
1993年5月10日刊
A5判　502頁　本体15,534円

この本は、大変な本である。

最初に手にしたときにどう読もうかと考えてしまった。読むというより調べる類の本であるとの思いも持った。一行二行と読んでいくと、ここに書かれている事柄は何であったかと他の書物をひも解き辞書を引いて調べてみたりもした。読んでもよし、調べてもよしという書物らしいと思えてきた。こうなると一冊の書物から幾つもの引出しをのぞくがごとくに、新しい内容を見つけることが出来てうれしくなったりもする。併せて一頁二頁がなかなか終わらないもどかしさも感じることになる。この本を読もうとするとき、本の方から、君はこの本をどういう態度で読むつもりですか、と尋ねてくると感じた。では、読者が本を読む態度とはどんなものなのかを幾つかに整理してみよう。要は正座して読むか、何かのついでに読むか、はたまた寝ころがって読むかということである。

一つには、文献学に属する書物として読む態度がある。この書の索引の書き出しがまさにこうなっている。この種の書物として他に有名なものに、ヒッチコックのものとパークの研究書がある。これらは、過去の研究の蓄積がまさに系図のように示されているものである。誰が誰のどの論文を参照してこれを書いていて、またそれを誰が読んだという類の内容を追っていくのである。特定の個人の業績を知る読みかたがこれに属する。

逆に壮大な学問全体の体系を身にしみて感じる読み方がある。二つ目のこれが本書の根幹をなす神髄を知る読み方であると思う。本書には歴史学、美術史学そして建築史学の全領域が展開している。本書に収録されている書名を見ているだけでも、多くを読み重ねると歴史の流れが分かるような気になってくる。本書が建築史学の分野を対象としていることは本文中にも明記されている。このことから建築理論は主要な関心事ではないとも記されている。建築理論の分野をも加えると、もっともっと書かねばならないことがあると言っていることにもなる。

本は読者によって様々に読まれるにせよ、少しばかり著者の方から読者へ読み方のメッセージがこのように添えられることがある。

読み方の三つ目として考えるのは、著者の何らかの意図によって“読まされる”のとは逆に、読み手が“勝手に読む”というものである。それは、読み手が読み方の作戦をたてて読む方法である。例えば、本書は“大きい領域”と“小さい領域”を両方ともに詳しく書いている。大きい領域とは、時代や国家の背景、政治・社会思想の事情などである。小さい領域とは、一冊の本一つ一つのことであり、一人の人物のこと、また一種類の定期刊行物のことである。この二つの領域を分割して、大きいものばかりを、または小さいものだけを読む方法がある。いうまでもなく大切なことは、小さい領域を読んでいるときには大きい領域の誘惑に負けてはいけないということである。魅力ある内容で読者に迫り、見過ごすことに抵抗してくるのは、十分に心得ておかねばならない。内容が極めて豊かという書物を読み破る方法としては、実はこの方法が有効であることを多くの人は経験的に知っているだろう。

○

書物をどのような態度で読むかは、読み手に任された都合によるのが一般だが、この書に関しては個人的事情によってこうしか利用出来ないということが出そうである。文化的背景の差をこの書物を手にすることで改めて思い起こさせられた。この意味で、本書が書物を超えた書物であると言っておきたい。

○

本書には訳者による研究論文が付いている。それ自体が非常に貴重である。そこでは、この書物の位置づけがされ、補足も加えられ更に詳しい説明がなされている。この訳者による論文こそ本書の十分なる書評の役割を示していると思った。

○

自分がもし、この類の本を書くとすると、どういう手だてでこれほどの資料を得ることが出来るのか、何処からアプローチが出来るのかを考えたとき、手の届かないオソロシさを感じるし、その意味で不明さがあり不気味な思いを抱いてしまう。しかし、いずれにしても偉大な書であることには間違いない。身近に常備して、一生つきあう書物として購入されることをお勧めしたい。

（かわべ　さとし／京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科教授）

大阪国際会議場(仮称)の構造設計

彦根　茂　金山　功
Ove Arup & Partners Japan Limited 代表、同所員

大阪国際会議場（仮称）は、都市型の立地と最新設備を備えた大会議場(2754席)、特別会議場、中小会議室、イベントホールの４つの主要機能からなる複合施設であり、地上13階・塔屋２階（S造)、地下３階(SRC、RC造)、高さ104.51m、延べ床面積67031.17㎡の高層建物である。

設計者は黒川・イプスタイン・アラップ共同企業体であり、設計プロポーザル時の基本構想“スーパーフレーム形式による大空間の積層化”を実現している（図1、2)。

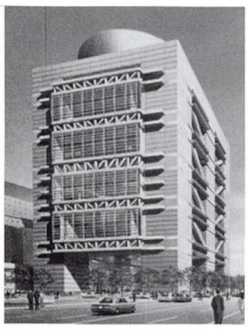


図１　建物パース

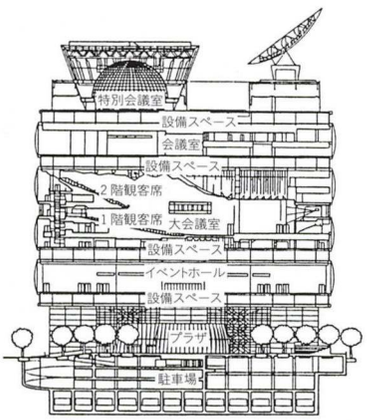


図２　断面図

構造設計方針

実施設計期間中に兵庫県南部地震（1995年）が発生したため、地震特性および、鉄骨構造物の被害状況やスーパーフレーム構造（図3）に使用された極厚鉄骨部材の脆性破壊を考慮し、それまで設定されていた関西地方の超高層建物に対する設計方針を見直すとともに、Arup社の海外での経験に基づく設計手法も取り入れている。

■耐震設計

・制震構造（アンボンドブレース）と損傷制御設計の採用
・用途・性能に応じた耐震性の設定と靱性能の確保（表１）
・スーパーフレームの構造安全性の確保（非線形時刻歴応答解析)
・高い入力地震動レベルの設定（入力地動速度60kineを追加)
・直下型地震（活断層の影響、鉛直地震動の影響）を考慮

■鉄骨構造

・鋼材、溶接部の脆性破壊の防止、靱性の確保
・高性能60キロ鋼SA440CとSM520Bの採用
・スカラップ、裏当金等の応力集中源を起こしやすいものの改良
・高い靱性（Ductility、Toughness）溶接材料の使用
・鉄骨実大試験（加力試験）による柱梁仕口部応力集中度の検証

■基礎構造

・場所打ちコンクリート杭の超音波を用いた健全性試験
・耐圧版下部の空洞により、リバウンド現象による地盤変形を吸収

■大会議場

・スーパーフレームの地震時挙動に及ぼす大会議場の影響を低減
・客席の地震時変位をスライド支承およびヒューズシステムで吸収
・客席のコンサート時の鉛直振動性状をTMD制振装置により改善

表１　耐震設計クライテリア

レベルⅠ地震時（入力地動速度20kine）—Fully Operational ・アンボンドブレース材は塑性化する ・スーパーフレームは損傷を生じない ・非構造部材に損傷を生じない ・最大層間変形角は、1/200以下
レベルⅡ地震時（入力地動速度40kine）—Operational ・アンボンドブレース材、大梁端部は塑性化 ・スーパートラス、柱材は弾性範囲 ・損傷を生じた構造体は地震後、補修により再使用可能 ・最大層間変形角は、1/100以下 ・層の塑性率は、2.0以下
レベルⅢ地震時（入力地動速度60kine）—Life Safety ・アンボンドブレース材は大きく塑性化、大梁端部は塑性化 ・スーパートラス、柱材も一部塑性化 ・建物の損傷は、中程度であり、地震後補修工事が必要 ・最大層間変形角は、1/67以下
直下型地震（入力地動速度80kine）—Near Collapse ・活断層の影響を考慮 ・スーパーフレームの多くの個所が塑性化を生じるが崩壊しない ・非構造体は大きい損傷を受ける（1/600の残留変形）

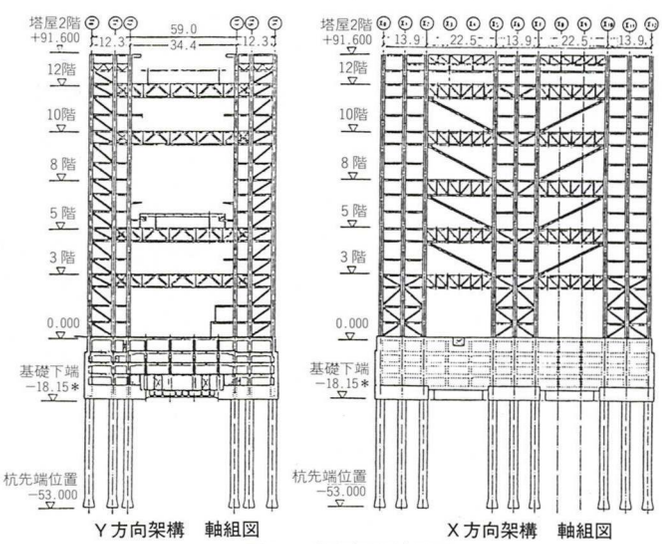


図３　代表架構軸組図

非線形有限要素時刻歴応答解析と静的弾性有限要素解析

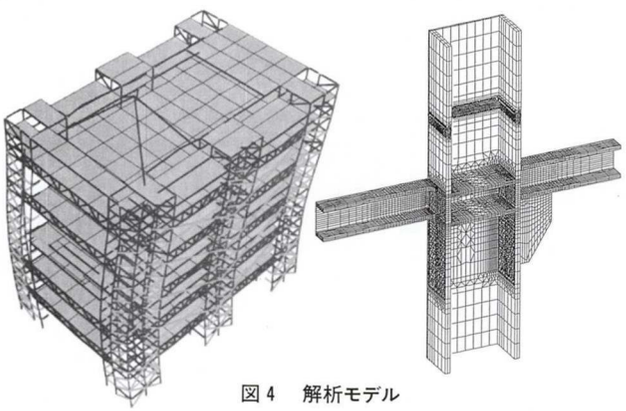


図４　解析モデル

時刻歴３次元非線形有限要素解析プログラムを用い、スーパーコンピューターを使用して入力地動速度20、40、60kineに基準化された地震波による水平および鉛直地震動を考慮した解析（図4）や、上町断層の影響を考慮した地震波（入力地動速度80kineのパルス波）についての解析を行っている。

また、柱梁接合部の応力集中係数を、静的弾性有限要素解析により検証している。

制震構造と損傷制御設計

地震エネルギーを中小地震から大地震まで広範囲に吸収するパッシブ型制震装置（アンボンドブレース：新日鉄）を採用し、損傷を制御している。アンボンドブレースは、芯鉄骨プレートを鋼管とコンクリートで座屈拘束し、引張・圧縮加力時ともに安定した履歴特性をもつ。今回は、部材長20mを超えるものも使用している。

大地震時に、アンボンドブレースは、地震エネルギーの40～75%を吸収し、スーパーフレームの地震力負担を軽減している（**図5**）。

脆性破壊の防止

建物の変形性能を保証するため、地震時スーパーフレームの溶接部に想定される応力歪度、歪速度、応力歪集中度、溶接欠陥に対し、WES2805に基づき、脆性破壊を生じないための破壊靱性値を求め、鋼材や溶接部の要求破壊靱性値（CTOD値）として規定し、また、応力集中を低減する溶接ディテールを採用している（**表2**）。

基礎構造

基礎は、GL-53m以深の洪積砂礫層を支持層とした場所打ちコンクリート拡底杭（アースドリル工法）である（**図6**）。杭体品質確保のために、超音波を用いた健全性試験を実施している。概念を**図7**に示す。

また、地下掘削に伴う地盤のリバウンド現象により基礎底版下部に生じる土圧を低減するため、海外で実績のあるポリスチレン製コラプシブルボードを使用し、地下耐圧版下部に空洞を設け、地盤変形を吸収させている（**図8**）。

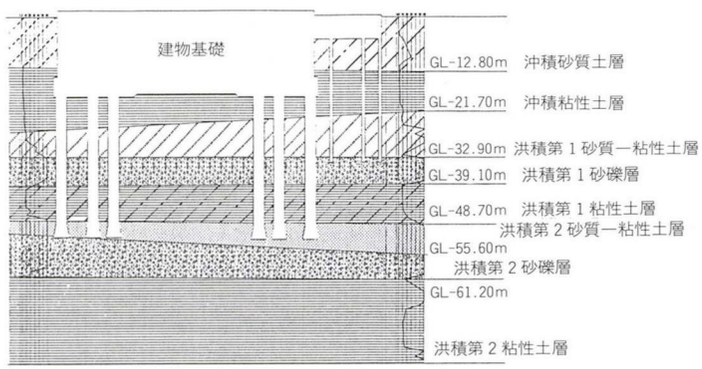


図6　地盤断面図

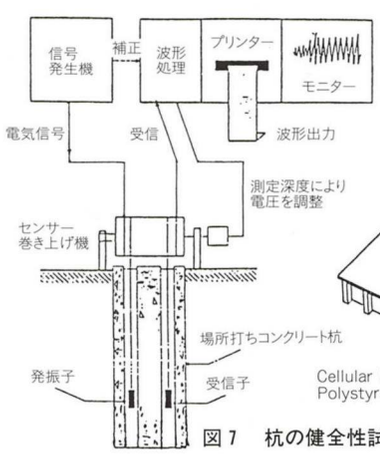


図7　杭の健全性試験

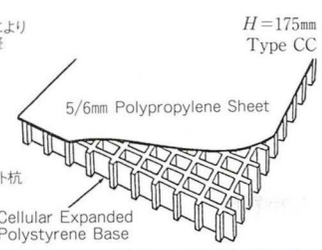


図8　コラプシブルボード

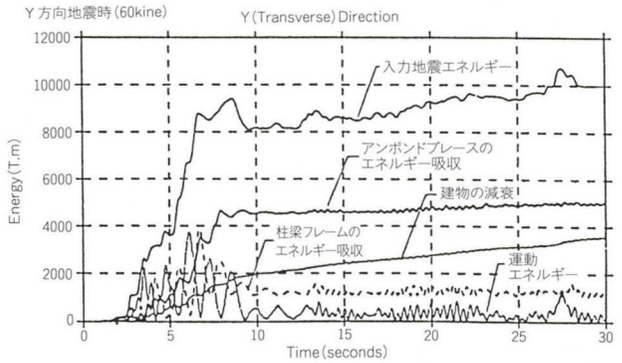


図5　地震時時刻歴累積エネルギー（60kine 地震時）

表2　脆性破壊の防止

スーパーフレームに使用する鋼材、溶接部の要求性能
・鋼材 SA440C、SM520B のシャルピー値（0℃）は、55J 以上
・鋼材 SA440C、SM520B の CTOD 値（0℃）は、0.6、0.4mm以上
・溶接部のシャルピー値（0℃）は、55J 以上
・溶接部の CTOD 値（0℃）は、0.1mm以上
・鋼材、溶接部のビッカース値は、350HV 以下
応力集中を低減する溶接接合ディテール
・柱梁溶接接合部（工場溶接）は、ノンスカラップ工法
・溶接部の鋼製エンドタブを切断
・梁フランジ端部、斜材ガセットプレートに円弧ハンチを設ける
・梁部材以外の2次鉄骨部材を柱に現場溶接しない
・建方用仮設ピースを柱材に現場溶接しない

大会議場の設計

大会議場の1層分をつなぐ客席床は、地震時、スーパーフレームの層間変形により大きな力を発生するため、2階客席床先端はオイルダンパー付スライド支承とし、地震センサーの信号を受けるとリリースするヒューズシステムを採用している。1階の客席床は長手方向に9カ所のスリットを入れ、床面剛性を低下させている。

一方、通常時に揺れを抑えて居住性を向上させるために、1、2階の客席下部にTMD制振装置を配置している（**図9**、**10**）。

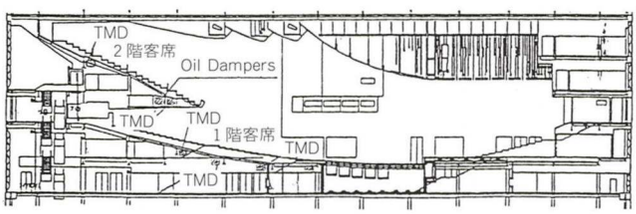


図9　大会議場

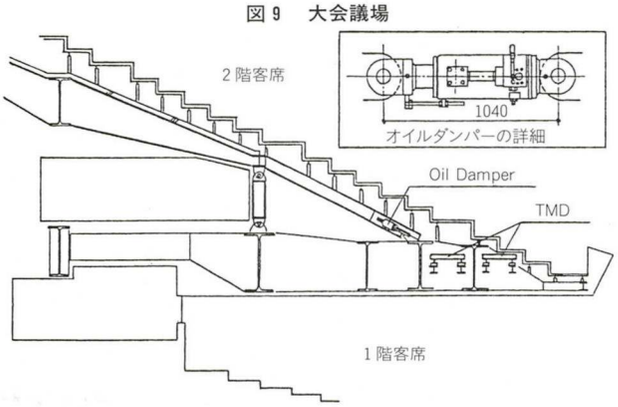


図10　2階客席詳細

（ひこね　しげる／かなやま　いさお）

ガス吸収式大温度差システム対応

吸収冷温水機

畠山幹雄
㈱日立製作所空調システム事業部主任技師

地球温暖化、砂漠化の要因となっているエネルギー問題。昨年10月、国連気候変動枠組条約第4回締約国会議(COP4)では、一昨年の京都会議(COP3)後の国際的取り組みについてのタイムフレームを伴う共通目標を設定し、今後実施すべき作業が具体化された。より高い省エネターゲットへの取り組み、特に民生分野エネルギー消費の伸びを抑えるためには、ビルにおける空調エネルギーの削減が重要である。オフィスビルで消費されるエネルギーの約1/2から1/3を占める空調エネルギーは、ＯＡ化の進展など冷房負荷の増大で、空調面積当たりの必要送風量や送水量がさらに増加。空調用搬送動力の削減は、省エネルギー化を図る上で重要な課題であり、これに対応するガス吸収式大温度差システムは、省エネルギー・低コストを実現するものである。

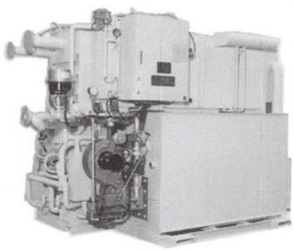


図1　吸収冷温水機Ｖ型

日立製作所は、これに対応する吸収冷温水機として、平成9年6月に120～320RTの7機種、平成10年9月に360～1000RTの10機種を発売した。外観を**図1**に示す。

システムの概要

図2は、大温度差システムの冷房時の概念を示す。従来システムに対し大温度差システムは各流体の小流量化を図るために、送風空気については吹出し温度を14℃に下げ、冷水については冷温水機入口温度を15℃に上げ、送風量、循環水量を小さくすることにより、空調機ファンや循環ポンプの搬送動力を低減するシステムである。

加えて日立はオリジナルとして、標準サイズのまま、吸収冷温水機冷却水出口温度を39.4℃まで上げて冷却水循環量を小さくすることにより、冷却水ポンプやクーリングタワーファン搬送動力の低減を実現した。これによって、ダクト、配管のサイズダウンや空調機ファン、ポンプ並びに冷却塔の小容量化に伴うイニシャルコストの低減も実現する。

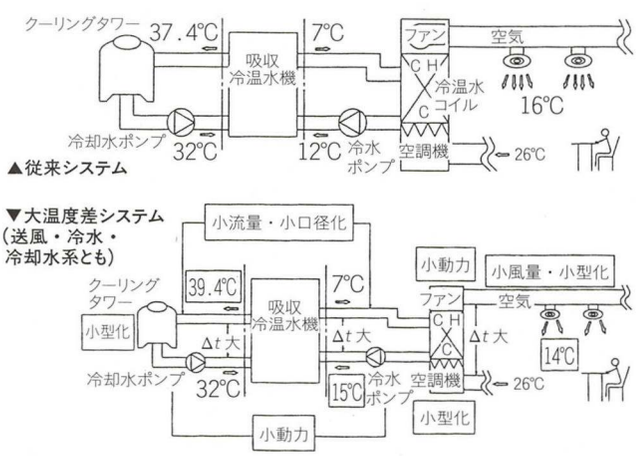


図2　従来空調システムと大温度差空調システム

表1　温度設定と流量比(冷房時)

熱媒体	従来システム	大温度差システム	熱媒体流量低減比率	効果
冷水	12-7℃ (Δt=5℃)	15-7℃ (Δt=8℃)	従来比62.5%	搬送動力の低減、水配管の小口径化
冷却水	32-37.5℃ (Δt=5.5℃)	32-39.4℃ (Δt=7.4℃)	従来比75%	搬送動力の低減、水配管の小口径化、冷却塔の小型化
空気	26-16℃ (Δt=10℃)	26-14℃ (Δt=12℃)	従来比83%	搬送動力の低減、ダクトの小口径化

従来システムと大温度差システムの温度設定と流量比(冷房時)比較を**表1**に示す。

冷温水・冷却水大温度差吸収冷温水機

従来、冷却水大温度差を実現するためには吸収冷温水機の伝熱面積の拡大が不可欠で、必要容量より大容量の冷温水機を使用するのが一般的であった。それゆえ熱源機の価格がアップし、普及の障害となっていた。日立製作所はこの問題に取り組み、冷却水大温度差利用に対応する吸収冷温水機Ｖシリーズ(120～1000RT)を開発した。

日立吸収冷温水機Ｖシリーズは従来技術である溶液パラレルフローに加え、新技術として「日立特許」冷却水ACAフロー(吸収器→凝縮器→吸収器)の採用により、吸収冷温水機のフレームサイズをそのままに、冷却水大温度差利用(冷却水入口32℃、出口39.4℃、冷却水量0.75m³/hRTで、ターボ冷凍機と同じ流量原単位)を実現した。

経済効果試算

延べ床面積が15,000m²、基準階×10階、冷房ピーク負荷が535USRT(1881kW)、暖房負荷が900Mcal/hの一般事務所ビルで、ガス吸収冷温水機セントラル方式の従来システムと大温度差システムの熱源方式経済効果試算は、**図3**の通りである(空調機、二次ポンプを除く)。熱源機は268USRTガス吸収冷温水機×2台とした。

イニシャルコストは冷水ポンプ、冷却水ポンプ、水配管の小型化・小口径化による工事費の低減によって、従来比7％、ランニングコストは搬送動力の低減によって従来比9％、の低減が図れる試算結果である。

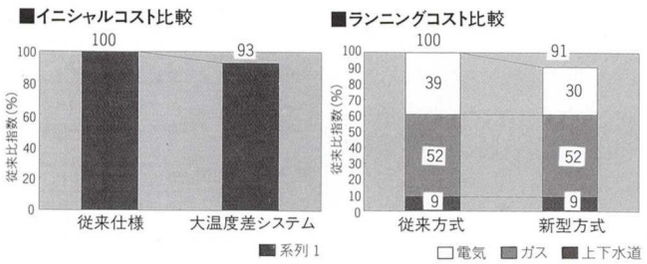


図3　コストの削減効果

新規性、創造性

熱媒体を用いた熱搬送に関して、搬送動力を低減するために大温度差システムを採用する例は以前より知られており、特に冷水系、空気系の大温度差システムは、東京ガス㈱によって空調システムに最適な条件として検討・検証され普及してきた。

このシステムは、冷却水系にもメスを入れ、ACAフローによる熱のカスケード利用を活用することによって、機器がコストアップすることなく冷却水大温度差対応を実現している点に新規性がある。

出典：東京ガス株式会社「ガス吸収式大温度差システム」

(はたけやま　みきお)

布製防火・防煙シャッター

岡田敏夫
東洋シヤッター㈱ 取締役企画室長

大規模な建築物においては、火災時の避難通路を確保するために防火区画及び防煙区画を形成することが義務づけられているが、現在それらの場所には主にスチール製のシャッターが使用されている。これらスチール製シャッターは、建築基準法の『構造規定』に基づくものであり、具体的には「防火シャッター」の場合、鋼製で鉄板の厚さが1.5ミリ以上のもの、また、「防煙シャッター」の場合は、鋼製で鉄板の厚さが1.5ミリ以上のものでありかつ遮煙性能を有するものと、その建築材料の材料・工法・寸法等が仕様化されているためである。

ただ、平成2年5月の「建設省告示1125号」により、甲種防火戸及び乙種防火戸の新たな試験方法が定められて以来、防火戸の一種であるととらえられることの多いシャッターについても、新しい材料開発が進み「シャッター＝鋼製」という従来の常識が覆されようとしている。

さらに、現在、建築基準法自体が抜本的に見直され、構造を規定する方式から性能を規定する方式いわゆる『性能規定』に移行すべくその体系化作業が進められている。実際に『性能規定』が導入されると、一定の性能さえ満たせば、多様な材料、設備、構造方法を採用でき、設計の自由度が高まることになる。そういった意味で、もはや防火区画及び防煙区画に使用するシャッターは必ずしも鋼製である必要はないと言える時代がやってきた。

この度、東洋シヤッターが開発・発売した『タイカクロス』は、シャッター本体に耐熱ガラスクロスを使用し、公的機関の甲種防火及び遮煙の性能試験に合格した布製の防火・防煙シャッターである。基本的な構造は鋼製シャッターと同じであり、平常時は天井内のシャフトに巻き取って収納されているが、火災時には煙（熱）感知器と連動して自動的に閉鎖、炎と煙を遮断し火災の延焼を防ぐ。

鋼製シャッターと同等の性能をもちながら設計・施工等において布の“軽い”“柔らかい”という特性が発揮される。具体的には、天井内の巻取部分がコンパクトになり、これまで区画を形成するのが難しかった狭い天井内でも設置できるようになった。また、10mまでなら中柱が要らないワイドな開口幅が設計の自由度を高めた。その他、軽量なので軀体補強の必要はほとんどなく、施工も容易にできるというメリットがあり、万一の衝突事故や挟まれ事故が起こったとしても、怪我をする危険性は大幅に軽減される。さらに、開閉音も静かで、圧迫感も少なく、火災時のパニック緩和も予想される。

性能

防火性能〈㈶建材試験センターにて実施〉
- 平成2年建設省告示第1125号に規定されている甲種防火性能試験に合格。試験成績書：依試第7H68159号

防煙性能〈㈶日本建築総合試験所にて実施〉
- 昭和48年建設省告示第2564号に規定されている遮煙性能試験に合格。試験成績書：IX B-97-115

遮熱性能〈㈶建材試験センターにて実施〉
- 最大受熱量／1.4W/㎠　試験成績書：依試第7H68159号

耐久性能〈社内試験、1500回〉

特徴

軽量
- シャッター本体である耐熱ガラスクロスの重量は、わずか0.7kg/㎡。鋼製シャッターの約30分の1程度と超軽量化された。そのため、軀体への負荷が少なく、施工性にも優れている。
- 耐熱ガラスクロスは、軽量かつ柔らかい素材であるため、万一の衝突事故や挟まれ事故での危険性が大幅に緩和される。

省スペース
- シャッター本体であるガラスクロスの厚さは、わずか0.7ミリ。巻取部分がコンパクトになり、天井内はすっきり省スペース。

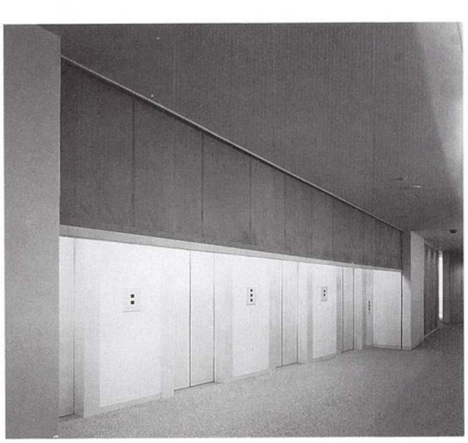
美観
- 10mまでなら中柱が要らないので、設計の自由度が高まる。
- ガイドレールの溝幅は、わずか12ミリ。すっきりしたデザインで、周囲の美観を損なわない。

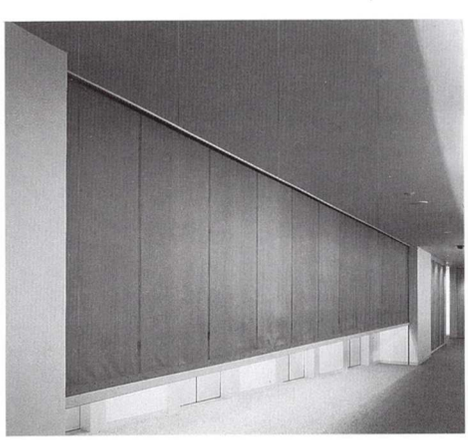
仕様（構成部材）

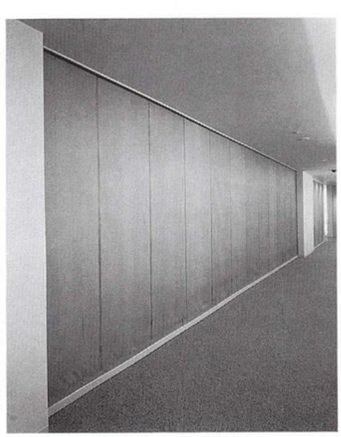
- 本体…耐熱ガラスクロス0.7ミリ［片面樹脂コーティング］
- ガイドレール／まぐさ／座板…スチール1.5ミリ or ステンレス1.5ミリ
- 操作方法…電動式 or 手動式

現在のところ、建築物において、この『タイカクロス』で防火区画及び防煙区画を形成する場合は、建築基準法第38条の個別認定を取得する必要がある。

（おかだ　としお）







屋内消火栓の設置—3—

由上雅章
ヤマトプロテック㈱

引き続き、屋内消火栓ポンプ決定のための条件を示しましょう。

(2) 消火ポンプに直結される電動機容量の目安は、次の計算式により求められます。

$$電動機容量(kW)=\frac{0.163\times Q\times H}{E}\times K$$

Q：吐出量（m³/min）　H：全揚程（m）

E：ポンプ効率　K：余裕率1.1

上記の計算式はあくまでも目安であり、消火ポンプはポンプメーカーのカタログを参考に選定して下さい。また、その場合、定格吐出量の150%吐出量時の計算値が電動機定格出力の110%を超えないことを確認します。なお、㈶日本消防設備安全センターの認定試験に合格したものを使用して下さい。

■消火栓ポンプの計算例

1号消火栓（2号消火栓の場合も、数値の入れ替えで同様にできる）の計算の一例を**図1**、**表1**に示します。

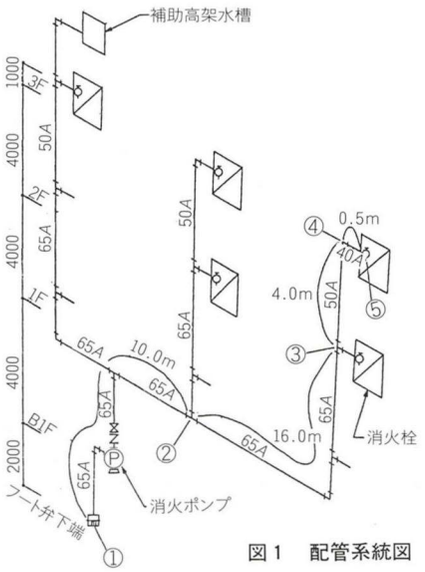


図1　配管系統図

■ポンプの設置場所と選定、大きさ、設置スペース

設置は、不燃材料により区画され、甲種または乙種の防火戸を設けた専用の室に設置します。一般的には、他のポンプ（給排水や空調等）と併設することは差し支えありません。

表1　屋内消火栓設備圧力損失計算書　　区画名＝最遠（2基同時）

区間番号	1-2	2-3	3-4	4-5
管の呼び径（A）	65	65	50	40
ヘッド等の個数（個）	2	1	1	1
流量（ℓ/min）	300.00	150.00	150.00	150.00
直管長（m）	10.0	16.0	4.0	0.5
45°エルボ　個数（個）	0	0	0	0
〃　等価管長／個（m）				
90°エルボ　個数（個）	1	1	0	1
〃　等価管長／個（m）	2.0	2.0		1.3
ティー分流　個数（個）	1	0	0	0
〃　等価管長／個（m）	4.1			
仕切弁　個数（個）	1	0	0	0
〃　等価管長／個（m）	0.4			
玉形弁　個数（個）	0	0	0	0
〃　等価管長／個（m）				
アングル弁　個数（個）	0	0	0	1
〃　等価管長／個（m）				7.0
逆止弁　個数（個）	1	0	0	0
〃　等価管長／個（m）	5.6			
アラーム弁　個数（個）	0	0	0	0
〃　等価管長／個（m）				
一斉開放弁（減）個数（個）	0	0	0	0
〃　等価管長／個（m）個数（個）				
〃　等価管長／個（m）個数（個）				
〃　等価管長／個（m）				
全等価管長（m）	22.1	18.0	4.0	8.8
管長1m当たり摩擦損失（m）	0.0408	0.0113	0.0382	0.1230
摩擦損失水頭区間（m）	0.90	0.20	0.15	1.08
摩擦損失水頭累計（m）	0.90	1.10	1.25	2.33

ポンプ揚程 H=41.72m
(安全率=1.10)
H_1：実揚程=15.00m
H_2：直管及び継手類
　摩擦損失=2.33m
H_3：放水圧損失=17.00m
H_4：ホース
　摩擦損失=3.60m
電動機容量=2.3kW
Q：揚水量=0.30m³/分
K：電動係数=1.1
E：ポンプ効率=1.00
(kW=0.163×1.0
×Q×H×K／E)
ポンプ仕様
口径65A×吐出量300ℓ/分
×揚程0.0m
×電動機0.0kW
※溶接式口径
=100A以上溶接

吐出量が定格吐出量の150%吐出量における全揚程は、定格吐出量における性能曲線上の全揚程の65%以上であることが必要です。

締切全揚程は、定格吐出量における性能曲線上の全揚程の140%以下です。

以上の条件に基づき、ポンプの設定を**図2**、**表2**に示します。

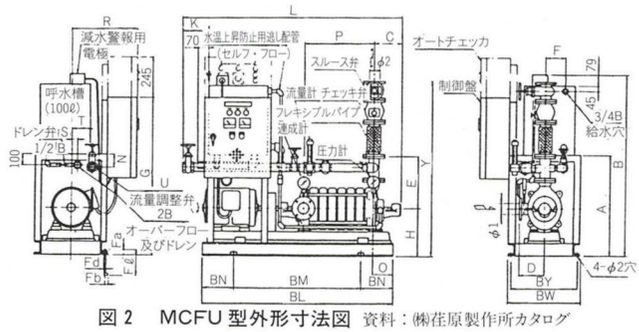


図2　MCFU型外形寸法図　資料：㈱荏原製作所カタログ

表2　電動機MCFU型寸法表（口径 φ50・φ65）　　単位：mm

機名	吸込口径 φ1	吐出し口径 φ2	段数	出力 kW	ユニット A	B	C	D	E	F	G	H	K	L	N	O	P
50MCFU363.7	50	50	3	3.7	780	1614	240	195	380	145	1285	320	230	1540	150	170	245
50MCFU365.5			3	5.5	780	1614	240	195	380	145	1285	320	230	1540	150	170	245
50MCFU465.5			4	5.5	780	1614	240	195	380	145	1285	320	230	1540	150	170	310
50MCFU467.5			4	7.5	780	1614	240	195	380	145	1435	320	230	1540	150	170	310
50MCFU567.5E			5	7.5	780	1614	240	195	380	145	1435	330	230	1540	140	170	375
50MCFU5611E			5	11	805	1639	240	195	380	145	1460	355	260	1740	140	170	375
50MCFU5611F			5	11	805	1639	240	195	380	145	1460	355	260	1740	140	170	375
50MCFU6611			6	11	805	1639	240	195	380	145	1460	365	210	1630	130	230	440
50MCFU6615			6	15	805	1639	240	195	380	145	1475	365	260	1740	130	170	440
65MCFU363.7	65	65	3	3.7	780	1614	240	195	390	145	1285	320	230	1540	160	170	245
65MCFU365.5			3	5.5	780	1614	240	195	390	145	1285	320	230	1540	160	170	245
65MCFU465.5			4	5.5	780	1614	240	195	390	145	1285	320	230	1540	160	170	310
65MCFU467.5			4	7.5	780	1614	240	195	390	145	1435	320	230	1540	160	170	310
65MCFU4611			4	11	805	1639	240	195	390	145	1460	355	260	1740	150	170	310
65MCFU567.5E			5	7.5	780	1614	240	195	390	145	1435	330	230	1540	150	170	375
65MCFU5611E			5	11	805	1639	240	195	390	145	1460	355	260	1740	150	170	375
65MCFU5611F			5	11	805	1639	240	195	390	145	1460	355	260	1740	150	170	375
65MCFU6611E			6	11	805	1639	240	195	390	145	1460	365	210	1630	140	230	440
65MCFU6615E			6	15	805	1639	240	195	390	145	1475	365	260	1740	140	170	440
65MCFU6615F			6	15	805	1639	240	195	390	145	1475	365	260	1740	140	170	440

機名	ユニット R	S	T	U	Y	ユニットベース BL	BM	BN	BW	BY	基礎ボルト Fd	Fℓ	Fa	Fb	Z	重量 kg
50MCFU363.7	490	55	190	1½B	1310	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	360
50MCFU365.5	490	55	190	1½B	1310	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	395
50MCFU465.5	490	55	190	1½B	1310	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	405
50MCFU467.5	490	55	190	1½B	1310	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	430
50MCFU567.5E	490	55	190	1½B	1320	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	455
50MCFU5611E	490	55	190	1½B	1345	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	525
50MCFU5611F	490	55	190	1½B	1345	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	525
50MCFU6611	490	55	190	1½B	1355	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	555
50MCFU6615	520	55	190	1½B	1355	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	585
65MCFU363.7	490	55	190	1½B	1345	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	360
65MCFU365.5	490	55	190	1½B	1345	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	395
65MCFU465.5	490	55	190	1½B	1345	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	405
65MCFU467.5	490	55	190	1½B	1345	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	430
65MCFU4611	490	55	190	1½B	1380	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	515
65MCFU567.5E	490	55	190	1½B	1355	1280	860	210	610	570	M12	250	35	50	15	455
65MCFU5611E	490	55	190	1½B	1380	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	525
65MCFU5611F	490	55	190	1½B	1380	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	525
65MCFU6611E	490	55	190	1½B	1390	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	555
65MCFU6615E	520	55	190	1½B	1390	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	585
65MCFU6615F	520	55	190	1½B	1390	1600	1060	270	620	570	M16	315	40	63	19	585

消火ポンプ室

サクションピットやメンテナンススペースを考慮して、消火ポンプ室の大きさを検討します。**図3**は、ポンプ室の納まりを示します。

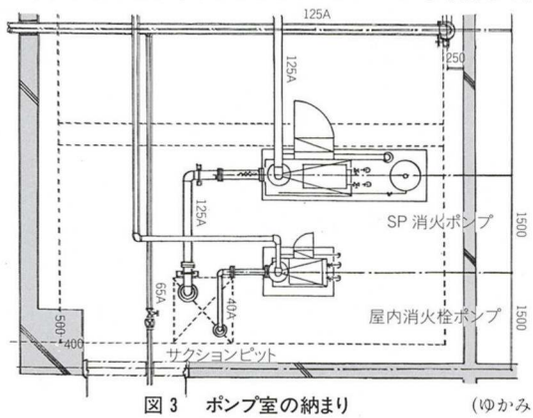


図3　ポンプ室の納まり　　(ゆかみ　まさあき)

SDコース5月開講

広い視野で物事をとらえる力と、豊かなパーソナリティを育てることを目的に1991年4月に開校した大阪ガスインテリアデザインスクールのスペースデザインコースは、今年も5月から毎週水曜日に、第一線で活躍中の実務家やアーチストを講師に迎えて全45回の講義が行われる。

なお、このコースは労働省教育訓練給付制度の指定講座であり、受講料は8割（最高20万円）支給される。

期　間　1999年5月19日㈬開講・1年間
毎週水曜日18：45〜21：05・全45回講義

定　員　30名（定員になり次第、締め切り）

費　用　入学金3万円・受講料29万円（共に税込）
※受講料はローン利用可能

申　込　パンフレットを請求後、同封受講申込書に写真2枚を添えて、開講日の1週間前にスクールあて送付。

申込先　大阪ガスインテリアデザインスクール
〒541-0051 大阪市中央区備後町3-6-14
TEL06-6262-4089、FAX06-6262-7202

講　師　東孝光／池上俊郎／石井修／遠藤剛生／大石達巳／大高猛／岡幸男／沖健次／柏木浩一／加藤力／喜多俊之／島村美由紀／津端修一／富安秀雄／中東達男／長瀬信博／藤田邦昭／本多友常／増田昇／三浦啓子／三宗司郎／向井正也／安原秀／安原盛彦／若林広幸

SDコースの説明会は、4月7日㈬19：00〜20：00、4月21日㈬19：00〜20：00を予定。説明会ほか、「教育訓練給付制度」の問い合わせなどは、上記スクール事務局まで。

'99総合建築材料・設備展

1971年以来隔年開催の「総合建築材料・設備展」は、今年15回目も㈳日本建築材料協会と日本工業新聞社の主催で、インテックス大阪を会場に開かれる。

生産者優位から生活者重視へと移行しつつある今、テーマを『建築は人を語る』とし、建材および建築設備業界の主張を、建設業界のみならず、一般ユーザーにも大々的にアピールすることとした。入場無料。

テーマ　"建築は人を語る"
—人が「快」と感じる環境—

会　期　1999年5月11日㈫〜14日㈮10：00〜17：00

会　場　インテックス大阪4号館
大阪市住之江区南港北1丁目5-102
大阪市営四ツ橋線「住之江公園駅」で乗り換え、ニュートラム「中ふ頭駅」下車

出　展　建材／住宅設備／景観材料・エクステリア関連／ソフト・情報システム／環境保全・資源リサイクル／健康住宅／省エネ建築・住宅／高齢者対応住宅部材・設備など

国際美学会議シンボルマーク募集

2001年8月27日〜31日に千葉県幕張地区で国際美学会議が開催される。組織委員会は現在、ポスターやプログラム、サーキュラーなどに使用するシンボルマークを募集中。応募資格問わず。入賞1点賞金20万円。

規定／オリジナルで未発表のもの。A4判白紙を縦長に使用。第15回であることを示す"XV"やテーマをデザインに取り入れるかどうかは応募者に一任。彩色自由（単色でも使用可能なデザインを）。用紙右上角に作品の天を示す△表示要。

締切／1999年6月30日（当日消印有効）

応募問い合わせは、帝塚山学院大学文学部島本研究室国際美学会議制作部会（TEL0723-65-0865）へ。

神戸輸入住材展'99

㈶神戸国際交流協会は外国製の住宅材料・設備に特化した専門国際見本市を開催。入場料500円。

会　期　1999年4月15日㈭〜17日㈯の3日間

会　場　神戸国際展示場　TEL078-303-0029
神戸市中央区港島中町6丁目11-1

第5回ISO14001構築セミナー

㈶住宅・建築 省エネルギー機構は、同機構を中心に構成された環境マネジメントシステム（EMS）研究会の成果に、建設現場を対象にEMSを構築するという演習を交じえて、セミナーを開催する。定員24名。

セミナー対象者は、ISO14001が平成8年9月に発効して以来1500を超える認証所得企業がある中で、まだ50数事業所と数少ない住宅・建築業界の人々。

会　場　㈶住宅・建築 省エネルギー機構
東京都千代田区二番町4-5 相互二番町ビル

受講料　80000円（テキスト代、昼食代、消費税）

申込先　同機構企画・環境部 EMSセミナー係（TEL03-3222-6737、FAX03-3222-6696）へ。

〈1日目〉1999年4月26日㈪9：15〜18：00
ISO14001規格内容／構築の手順／環境側面抽出（演習）／環境方針の設定（演習）

〈2日目〉1999年4月27日㈫9：15〜17：15
環境側面と環境影響評価／環境影響評価（演習）／環境目的の設定（演習）／内部環境監査／JIS Q 14001の審査登録制度

日本文化藝術財団の助成顕彰者に宮本佳明氏

1993年11月に設立された㈶日本文化藝術財団（千宗室会長）は、日本の伝統文化や現代藝術の分野における優秀な人材の育成を目的とする助成顕彰事業を中心に活動している。平成10年度第6回は、推薦された人々及び応募者の中から選考委員会（委員長：芳賀徹氏ほか9名）で審査し、下記の人々を顕彰した。（『外国人留学生・研究者助成金』部門は掲載省略）

『日本伝統文化振興賞』—石井眞木（まき）氏（作曲家）

『日本現代藝術振興賞』—安斎重男氏（写真家）

『日本文化藝術助成金』受給者
〈伝統文化部門〉—東野珠実（とうのたまみ）氏（雅楽・Computer音楽）
〈現代藝術部門〉—宮本佳明（かつひろ）氏（建築設計者）

受賞式は3月25日に明治記念館『キンケイの間』で行われ、賞状と賞金が授与された。

建築関係者が助成金受給者となるのは、平成6年第1回の妹島和世氏以来。

空間デザイン・コンペティション作品募集

日本電気硝子㈱主催の空間デザイン・コンペティションは6回目を迎え、2部門に分けて公募中。

審査員　内井昭蔵氏（滋賀県立大学教授）—委員長—
淺石　優氏（日本設計）
大江　匡氏（プランテック総合計画事務所）
戸谷文隆氏（日本電気硝子）

賞　金　A.〔提案部門〕
金賞1点100万円、銀賞1点50万円ほか
B.〔作品例部門〕
金賞1点50万円、銀賞1点30万円ほか

■提案部門「ガラス質を生かした建築」
ガラスブロック、ネオパリエ＆ラピエ、ファイアライト、クリスタルクレイの使われ方を斬新な視点から見直し、その新しいあり方、使い方の提案を求める。

登録締切　1999年8月9日㈪までに官製ハガキにて。

作品締切　1999年8月26日㈭。郵送または持参。

提出図面　提案の意図を表現する図面及び簡単な説明文（模型写真含む）。縮尺自由。
中判ケント紙 or600×840㎜の厚紙に収める。着色、写真貼付など表現自由。

■作品例部門「ガラス質を生かした建築」
ガラスブロック、ネオパリエ＆ラピエ、ファイアライト、クリスタルクレイのいずれか1種類あるいは2種類以上を用い、過去（1〜5回）の本コンペ入賞作品を除き、1999年8月9日㈪までに日本国内で竣工した建築物あるいは構築物。応募は1登録について1物件とし、設計した個人または組織に限る。

登録締切　1999年8月9日㈪までに官製ハガキにて。

作品締切　1999年8月26日㈭。郵送または持参。

提出作品　応募用台紙に作品の完成カラー写真を貼り、所定事項を記入して提出。写真の大きさ、枚数は自由。

提案部門、作品例部門ともに、登録・応募は下記へ。
㈱新建築社・空間デザイン・コンペティション—提案部門または作品例部門—係（TEL03-3811-7101）
〒113-8501東京都文京区湯島2-31-2



2658

2658 高知小津高校本館（東）

設　計：教育施設研究所広島事務所
施　工：晃立・東山・河添建設工事共同企業体
a．高知市城北町1-14
b．24,547.3 ㎡
c．　1,178.04㎡
d．　5,920.45㎡
e．SRC、6F
f．平成８年10月～平成10年３月

旧校舎は、昭和７年完成の県下に残る最大最後のネオゴシック建築である。平成元年から改築か保存かの市民を巻き込んだ議論の末、玄関のある中央部分を補強し残す方法と全面改築する方法をプロポーザル方式で提案を受け検討することとなり、保存・共生・再生という意欲的なテーマの提案がなされ、中央部分を保存する案が採用された。改築する本館（東）には尖塔アーチを持った窓や玄関の石張りのフレームなど旧校舎のデザインモチーフを採り入れた。平面計画は中廊下型とし、南に普通教室、北に教科教室型運営の職員室・ゼミ室を配し、廊下中央部分に採光通風を配慮したラウンジ・吹抜を設けた。保存部分（３階建）の屋上を本館（東）と同（西）（５階建）の４階部分を結ぶ動線として使用するユニークな計画としている。



2659

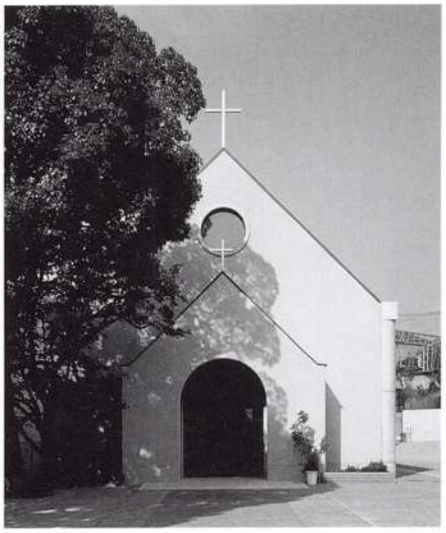
2659 西条警察署

設　計：都市建築研究所
施　工：宮嶋組
a．愛媛県西条市新田字市塚新田133番外
b．3,823.16㎡
c．　650.70㎡
d．2,466.31㎡
e．RC、5F
f．平成９年７月～平成10年３月

近年の警察は、親しみ、清潔、力強さを望まれている状況にあることから、正面にある１階待合ホールの壁は、柔らかさと、開放観のあるカーテンウォールを用い、親しみと入り易さを表現し、外観は左右対称とし、色は白色系でまとめ、清潔さと、力強さを表現した。また、人権を配意し、出入りの際、事件に関係する被疑者と一般来庁者が交わらないように、出入口を分散した。施設には、愛媛県の「ひとにやさしいまちづくり」の方針に従った身体障害者用便所、エレベーター等の設備を有しており、また駐車場（１台）を確保している。



2660



2661

2660 特別養護老人ホーム西宮恵泉

設　計：類設計室
施　工：戸田建設・フットワーク建設共同企業体
a．西宮市西宮浜３丁目７番及び８番
b．4,302.95㎡
c．2,344.16㎡
d．8,896.94㎡
e．SRC、９F、PH1F
f．平成９年３月～平成10年３月

2661 西宮聖ペテロ教会礼拝堂

設　計：新井組
施　工：新井組
a．西宮市御免町
b．1,811.25㎡
c．　189.27㎡
d．　189.27㎡
e．RC、１F
f．平成９年３月～平成９年10月



2662



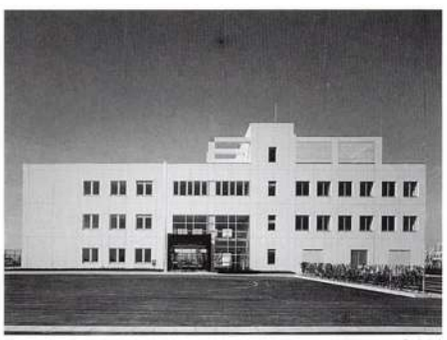
2663

2662 ヴェール園田

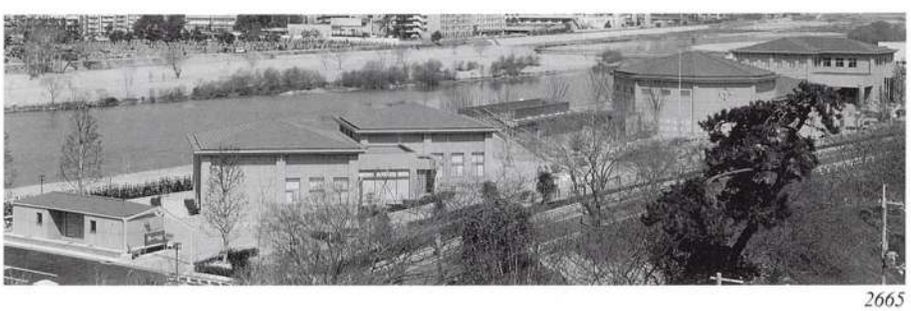
設　計：大林組本店一級建築士事務所
施　工：大林組・大末建設・藤木工務店共同企業体
a．尼崎市小中島３丁目79番５
b．2,680.51㎡
c．　927.38㎡
d．5,345.65㎡
e．RC、10F
f．平成８年11月～平成10年１月

2663 クレインズマンション

設　計：A. R. I 建築事務所
施　工：モリタ建設
a．東大阪市俊徳町５丁目33
b．1,910.04㎡
c．　549.6 ㎡
d．3,049.6 ㎡
e．RC、７F、ＰH1F
f．平成８年８月～平成９年11月



2664



2665

2664 港湾職業能力開発短期大学校神戸校

設　計：吉田・武藤建築研究所
施　工：新井組
a．神戸市中央区港島8-11
b．12,999㎡
c．　2,095㎡
d．　5,321㎡
e．RC、３F、ＰH1F
f．平成９年３月～平成10年２月

2665 兵庫県動物愛護センター

設　計：兵庫県都市住宅部営繕課
施　工：明生建設
a．尼崎市西昆陽４丁目1-1
b．11,500.00㎡
c．　2,231.18㎡
d．　2,599.59㎡
e．RC、２F、他
f．平成８年10月～平成９年12月

凡例

a．所在地

b．敷地面積

c．建築面積

d．延床面積

e．構造規模

f．工期

日本建築協会

月間の動き

【平成11年1月分】

理事会

第2回編集理事会
20日　4時～5時・於本会会議室
出席者　金多副会長ほか4名
議　事　(1)「建築と社会」の編集内容について
　　(2)「建築と社会」の収支状況について

第5回常任理事会
27日　4時～4時35分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか18名
議　事　(1)名誉正会員の推挙の件
　　(2)平成10年度第2回通常総会開催の件
　　(3)入・退会者承認の件
　　(4)後援・協賛名義使用承認の件
　　(5)事業報告

第8回会勢理事会
27日　3時～4時・於本会会議室
出席者　岡本・錢高会勢理事ほか5名
　　オブザーバー／市川会長、三品副会長
議　事　(1)入・退会状況
　　(2)今後の進め方

編集委員会

第8回素材と技術が生み出すデザイン幹事会
13日　6時30分～9時・於本会会議室
出席者　本多幹事ほか6名
議　事　1～4月号のテーマの内容検討

第8回施工材料分科会
14日　4時～6時・於本会会議室
出席者　十倉幹事ほか4名
議　事　(1)施工材料特集の企画
　　(2)「施工材料の頁」の企画

第3回計画分科会―インテリア・住宅系―
18日　7時～9時・於本会会議室
出席者　小島委員ほか5名
議　事　6月号「インテリア・住宅」特集企画

第9回構造分科会
20日　6時～7時45分・於本会会議室
出席者　楠本委員ほか5名
議　事　(1)「構造の頁」の企画
　　(2)10月号構造特集の企画

第10回編集委員会
21日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　内田委員長代行ほか8名
議　事　(1)2月号「都市のパブリック」「大阪市都市整備局」特集経過報告
　　(2)3月号「北信濃―街並み修景と地域文化の再構築」特集経過報告
　　(3)4月号「リニューアル」特集経過報告
　　(4)5月号「関西建築界の流れと東畑謙三氏の足跡をたどる」特集経過報告
　　(5)シリーズ頁経過報告
　　(6)編集内容について
　　(7)広告収入の減少に対する対策案
　　(8)収支状況報告

第9回広告企画小委員会
21日　5時～6時・於本会会議室
出席者　内田委員長代行ほか5名
議　事　(1)2月号「大阪市都市整備局」特集広告経過報告
　　(2)3月号「北信濃―街並み修景と地域文化の再構築」特集広告経過報告
　　(3)4月号「リニューアル」特集広告経過報告
　　(4)作品作風
　　(5)新建築調査（施工作品一覧）について
　　(6)会誌の個人会員向け発送の一括化
　　(7)収支状況報告

第10回法令分科会
25日　2時～4時・於本会会議室
出席者　炭崎幹事ほか3名
幹　事　(1)7月号「改正建築基準法」特集の企画
　　(2)「法令コーナー」の企画

第10回設備分科会
28日　6時30分～9時15分・於本会会議室
出席者　山根幹事ほか8名
議　事　(1)「設備の頁」の企画
　　(2)8月号設備特集の企画

第8回作品作風小委員会
28日　7時～8時30分・於本会会議室
出席者　前川副委員長ほか4名
議　事　(1)作品の掲載状況・掲載予定の報告
　　(2)作品の選定
　　(3)「gallery」「SKETCH BOOK」報告・予定

事業委員会

第4回30's EYE 記録編集分科会
6日　7時30分～9時30分・於本会会議室
出席者　米井主査ほか3名
議　事　出版物のテーマ及び出版方法

第9回若い会員の集い小委員会
12日　7時～9時30分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか4名
議　事　(1)事業委員会の報告と今後の予定
　　(2)「30's EYE 記録編集」
　　(3)当小委員会の今後のあり方
　　(4)「委員の時間」

第6回情報小委員会
13日　6時30分～7時30分・於関西電力中之島プラザ
出席者　川村副委員長ほか9名
議　事　(1)事業委員会の報告と今後の予定
　　(2)写真研修会

第6回見学会小委員会
14日　6時～7時・於本会会議室
出席者　福島副委員長ほか10名
議　事　(1)事業委員会の報告
　　(2)実施報告及び今後の見学会の候補

第6回事業委員会
20日　5時～7時・於本会会議室
出席者　多井委員長ほか7名
議　事　各小委員会からの報告と検討ほか

第5回30's EYE 記録編集分科会
20日　7時～9時30分・於本会会議室
出席者　米井主査ほか7名
議　事　(1)出版物のテーマ、出版方法
　　(2)今後の進め方

出版委員会

第9回出版委員会
21日　5時30分～7時・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか9名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
　　(2)今後のテーマと執筆者選定
　　(3)〈プロのノウハウ〉講座（第19回）開催

教育委員会

第3回工高生教育委員会
29日　6時～8時15分・於本会会議室
出席者　和田副委員長ほか6名
議　事　次年度第45回工高生デザインコンクール
　　募集規定原案の検討ほか

見学会

なら100年会館見学会
19日　1時30分～4時30分・参加者101名
大阪国際会議場建設工事見学会
29日　1時30分～4時30分・参加者46名

話題建築を聞く

HEP FIVE―観覧車のあるビル
26日　6時30分～8時30分・参加者43名

建築クラブ

建築クラブ新年宴会
12日　6時～7時30分・於リーガグランドホテル
参加者　54名

80年史編纂委員会

第6回編纂委員会
18日　4時～6時30分・於本会会議室
出席者　長谷部委員長ほか5名
議　事　80年史編纂について

「80年史」座談会
21日　2時～4時・於日本綿業会館
登場者　横尾義貫氏　小西岬氏　佐野正一氏
　　大林芳郎氏　尾亀清四郎氏
司会者　三品哲夫氏
オブザーバ／市川会長、長谷部委員長、坂本代表

建築14団体合同新年交礼会

4日　2時30分～3時30分・於マイドームおおさか
参加者　750名

入会者（敬称略）

〔団体会員2社〕
ゼネラル化成㈱　　新東洋合成㈱
〔個人会員2名〕
清　孝好（日建設計）　　百合野　耕治（大建設計）

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。

熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営 業 所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出 張 所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空　気　調　和
給排水衛生
搬送機設備
設　計　施　工
人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話 06-6364-6661（代表）
本　　社　〒100-0005 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話 03-3311-8511（代表）

空気調和設備
給排水設備
電気設備
産業設備
水処理施設
環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役大阪支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜 2-2-21　電話 06(6202)3071(代表)
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町 1-4-1　電話 03(3502)6111(大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・横浜・東関東・北関東・京都・神戸・四国

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06—6466—2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町 9 — 3　電 0720—49—2128

空気調和設備
衛生設備　設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(6458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話06-6949-1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある

「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切

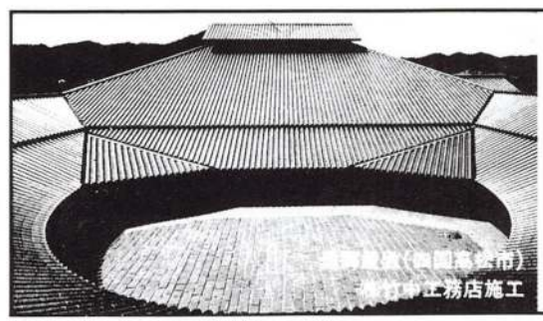
株式会社 **オクジュー**

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530—0047
TEL(06)6312—4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・宮崎・京都

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話（03）5689—2351代表



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 六五六一—七四五四
ファックス 六五六一—七四一六

ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(6313)1101
創業1919

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
● 電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
● 空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
● プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
● 情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
● 電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本社 大阪市中央区北浜3−6−13（日土地淀屋橋ビル）
電話 06（6205）3671（代）
支店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03（3666）1478（代）
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本社 〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代) FAX 06(6385)1050

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
SANPO
三宝電機株式会社
取締役社長 嘉納秀一
本社 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL.06(6364)1471・FAX(06(6364)5533
東京支社 〒105-0003 東京都港区西新橋3-23-1(ランディック第3ビル) TEL.03(5472)3311・FAX03(5472)0085
名古屋支店 〒462-0847 名古屋市北区金城3-12-14 TEL.052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店 〒657-0035 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL.078(842)6411・FAX078(842)6416
堺研究所 〒590-0906 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL.0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長 伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪(6202)0325〜9番
本社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
Master Builders Technologies
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本社：東京都港区六本木3−16−26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-6202-3294

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−6532−0641(代表)
FAX.06−6535−5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

価値あるWORKSをめざす活動
建築写真 オガワグラフィック
CATALOGUE PROJECT / PHOTO
代表作品集
企画・印刷
OGAWA GRAPHIC
小川和利
CD-ROM制作
〒542-0082 大阪市中央区島之内1-5-10 昭和島之内ビル206号
TEL・FAX (06) 6244−0826
確かな技術・豊かな実績 どうぞお気軽にお電話ください

新鮮
情報処理／編集・企画／印刷・製本
ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。
ND
日本電植株式会社
〒530-0043 大阪市北区天満2丁目5番15号
TEL.06(6352)7502㈹ FAX.06(6355)2714

夢を動かす技術がある
文化シヤッター

新発売

軽い引き力で、
引戸は壁のなかへ
スッキリと収納



カームスライダー
自動閉鎖装置付引戸【壁収納タイプ】

納まりの意匠性を高めた[壁収納タイプ]新発売。引戸はスッキリと壁のなかへ——。見た目も美しく、格調の高さを演出します。

●軽い引き力で開き、手を放すと自動的に静かに閉じ、人にやさしく、つかみやすい大型把手を採用し、操作性をさらに向上させています。
●上吊方式で床面にレールがなく車椅子やストレッチャーの通過もスムーズです。
●引戸には手詰防止ゴムを付け、安全性を高めています。
●抗菌仕様の把手も用意しています。
●表面材はスチール製4色、木製3柄のほか、オーダー色にも対応します。

文化シヤッター株式会社 / 中部営業推進部
〒464-0074 名古屋市千種区仲田二丁目1番24号 ☎052-733-1254
URL http://www.bunka-s.co.jp/

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材） コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材） 鉄骨ベース、逆打部の充塡モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント） コンクリート軀体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材） 地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材） コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

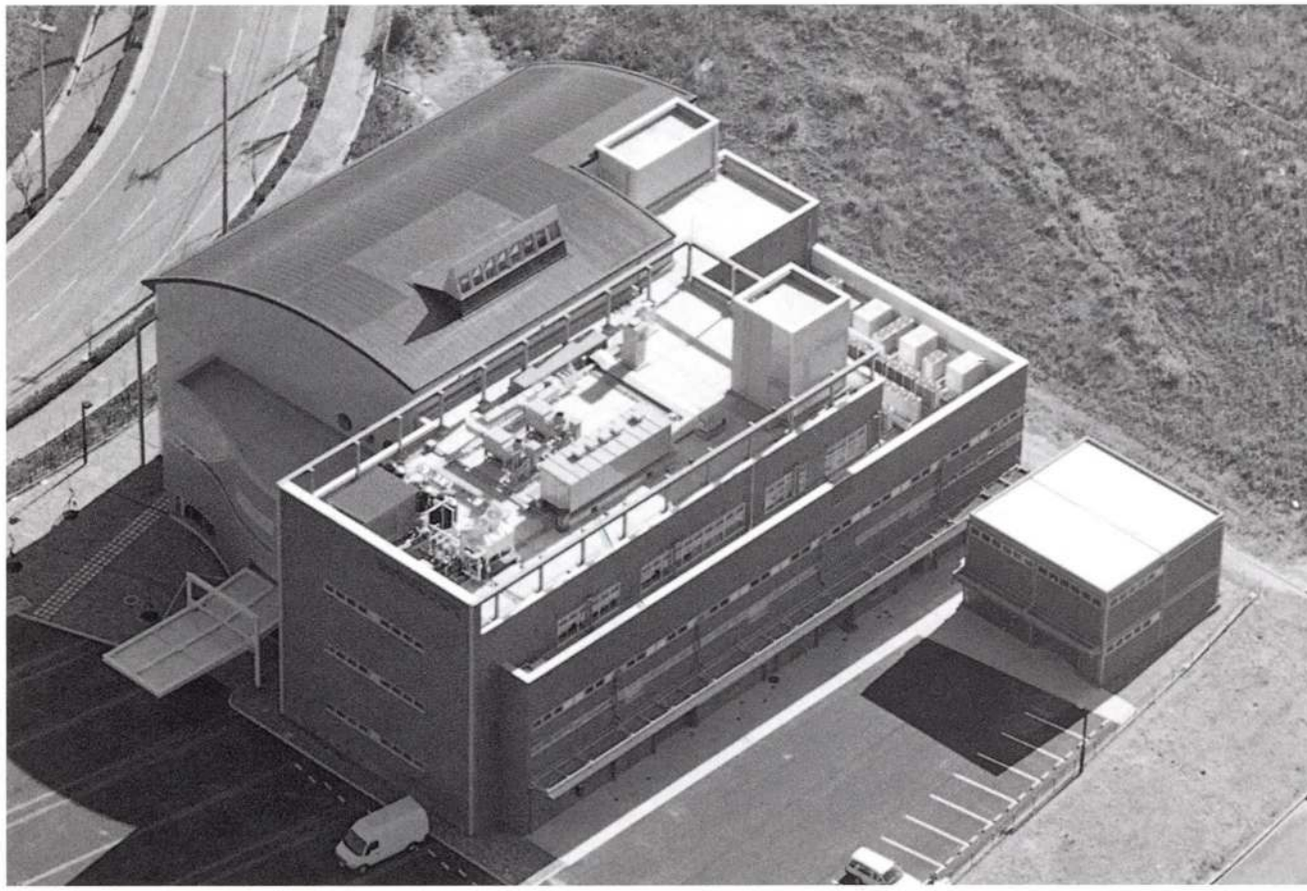
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581



アサヒプリテック(株)テクノセンター（神戸市ハイテクパーク内）
ソーラーシステム　フラット500　R加工　20KWシステム'98NEDO

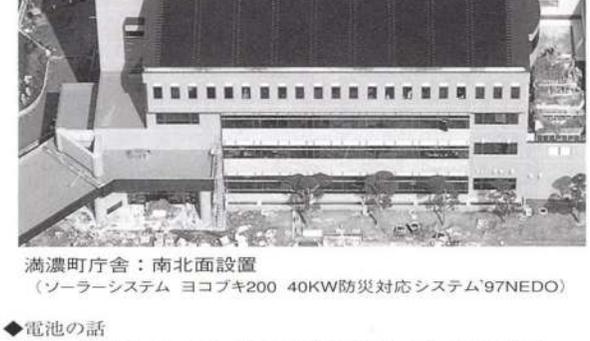
〔見かけ屋根一体型でない本物の〕

金属屋根材一体型太陽光発電システムルーフ

♥空と人の間でさまざまな歴史を築いてきました金属屋根のパイオニア　三晃金属工業が、屋根本来の機能に、美しいフォルムと新しい可能性をプラスした『金属屋根材一体型太陽光発電システムルーフ』を誕生させました。
太陽光発電装置は、もう設備の領域だけでは有りません。

★優良景観材料推進選定品（日本建材産業協会・景観材料推進協議会）
京都、鎌倉の風致景観地区実績有り。フッ素系フィルムでラミネートした表面は、ガラスを使用してないので表面反射がなく、近隣の環境に調和し、各種屋根デザインに融合致します。
フラット500タイプは、R加工が可能です。

★屋根30分耐火認定品　R-0301（ソーラーシステム　ヨコブキ200）
R-0291（ソーラーシステム　フラット500）
★軽量　ソーラーシステム　ヨコブキ200　7.15kg/㎡
ソーラーシステム　フラット500　14.80kg/㎡
★簡易施工・工期短縮、トータルコスト低減（余分な設置架台他不要）
★新型　ソーラーシステム　フラット420（改修用カバー工法対応可能品）
★各種助成制度（NEDO、NEF等）及び税制優遇制度対象品
★雪国用融雪機能組込可能（北海道にてデータ収集中、近々発売予定）



満濃町庁舎：南北面設置
（ソーラーシステム ヨコブキ200 40KW防災対応システム'97NEDO）

◆電池の話
超薄膜アモルファスシリコン太陽電池(キャノン製)を使用
直射光はもちろん、散乱光でも発電～北側設置でも充分発電
温度が上がると発電能力も上がる～夏に強い
バイパスダイオードにより、木の葉などの部分影では、発電量の急激な低下なく安定した供給が可能。

三晃金属工業株式会社
Sanko

本　　社　〒104-0031　東京都中央区京橋2-9-2
☎03-3567-3557　ソーラー屋根営業推進グループ
大阪支店　〒541-0041　大阪市中央区北浜4-1-21
☎06-6231-8571　営業推進グループ

名古屋支店☎052-582-0311　中国支店☎082-264-7881　九州支店☎092-44-3551
神戸営業所☎078-732-7272　大津営業所☎077-524-7572　奈良営業所☎0744-24-1034
福知山営業所☎0773-27-2372　高松営業所☎087-822-4451　松山営業所☎089-933-6055

Vol.80 通巻925号　平成11年4月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第三種郵便物認可　ISSN 0912-8182
社団法人 日本建築学会　〒553-0006 大阪市福島区吉野1-6-6 ☎06-6447-2075 FAX 06-6447-2078
定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収